

# 荒神山古墳

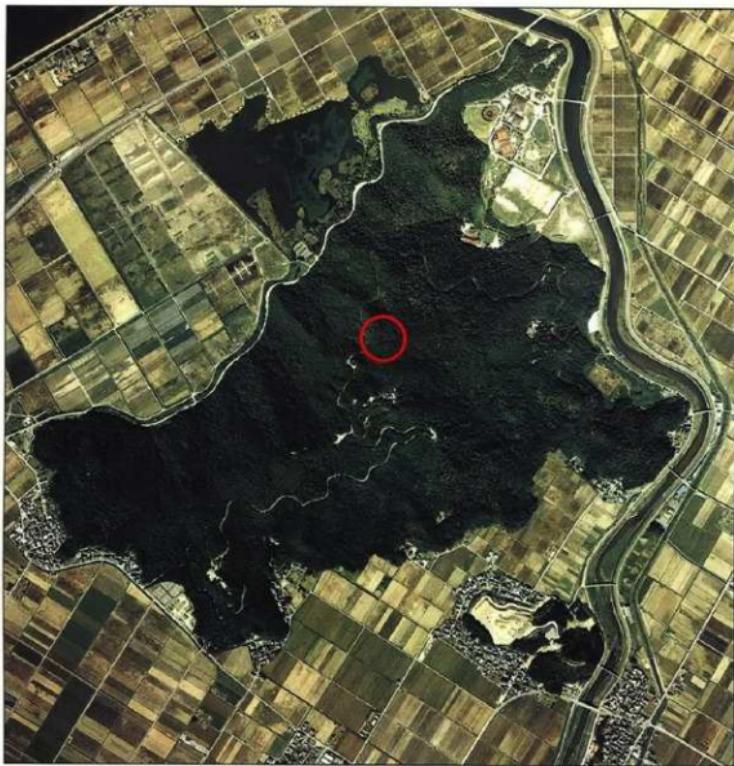


平成22年3月

彦根市教育委員会



南西上空より荒神山を望む（荒神山古墳は山頂に近い矢印の位置）



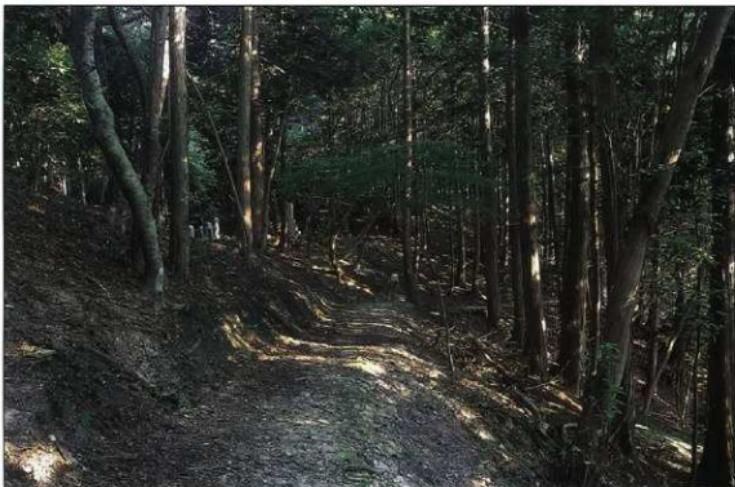
荒神山を上空から望む（赤丸印が荒神山古墳の位置／方位は上方北）



琵琶湖側より曾根沼越しに荒神山古墳を仰ぐ（荒神山古墳は山頂の濃い緑の矢印の位置）



前方部東側より後円部を望む



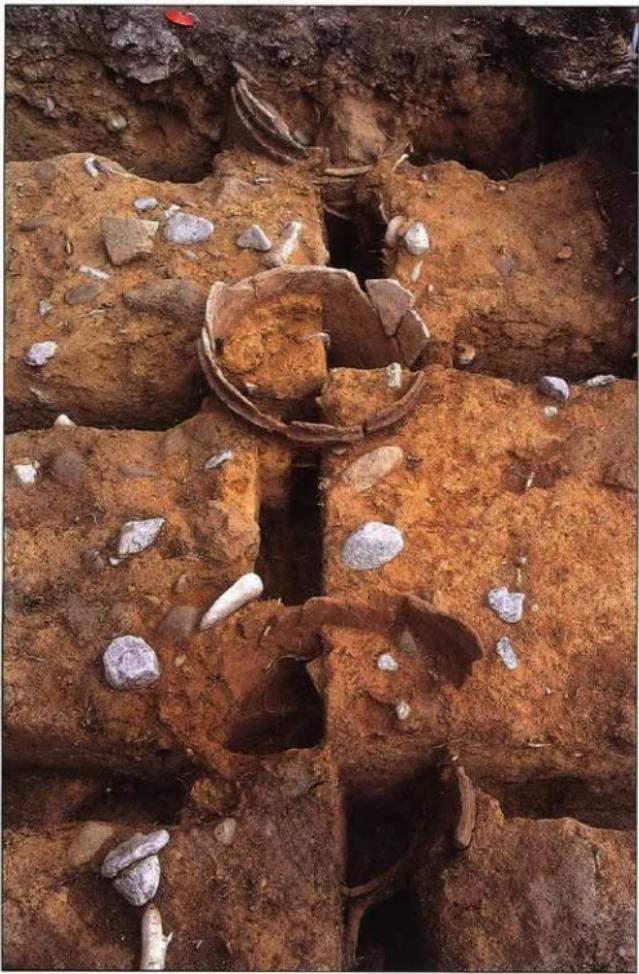
前方部西側より後円部を望む



前方部 T8 トレンチ 2段目テラスの埴輪検出状況



前方部 T8 トレンチ 2段目テラスの埴輪調査状況



前方部 T8 トレンチ 2段目テラスの埴輪列

前方部 T 8 トレンチ 2 段目テラス  
出土埴輪（図版99）



前方部 T 8 トレンチ 2 段目テラス  
出土埴輪（図版114）



前方部 T 8 トレンチ 2 段目テラス  
出土埴輪（図版119）

前方部 T7 トレンチ 1段目テラス  
出土埴輪（図版83）

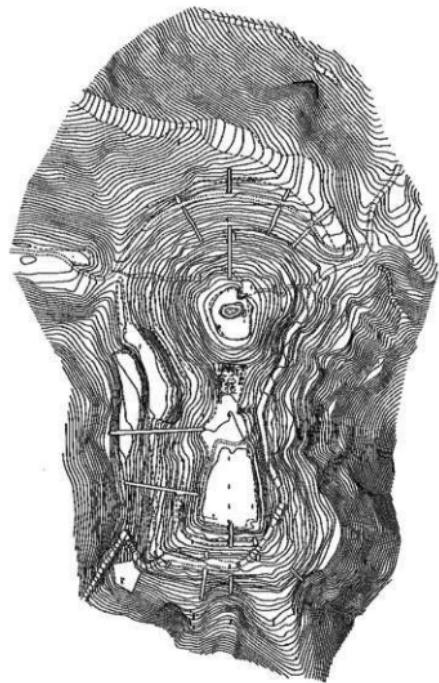


前方部 T8 トレンチ 1段目テラス  
出土埴輪（図版126）



荒神山採集と伝える車輪石（延寿寺寄贈）

# 荒神山古墳



## 目 次

### 例言

はじめ	1
I 位置と環境	2
II 1次・2次調査の成果	19
III 3次調査	24
IV 4次調査	30
V 3次・4次調査の成果	32
VI 出土遺物	37
VII 荒神山古墳と近江 前方後方墳から前方後円墳へ	85
おわりに	97

### 写真図版

### 例 言

- 本書は、彦根市教育委員会が平成15・16・18・19の各年度に実施した荒神山古墳の範囲確認調査の成果を収めたものである。
- 本調査の調査地は、彦根市清崎町字山之腰1925番、日夏町字日夏山4795番3、三津屋町字山ノ子1264番、石寺町字山土山1番1に位置する。
- 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

教育長：小田紹幸男	文化財部長：松岡一男	文化財部次長（兼文化財課長）：谷口 徹
課長補佐（兼文化財係長）：久保達彦	史跡整備係長：志賀昌貴	
副主査：北川恭子	主 任：辻 駿光	
主 任：高木絵美	主 任：池田隼人	
主 任：林 昭男	技 師：三尾次郎	
技 師：戸塚洋輔	技 師：田中良輔	
技 師：下高大輔		
- 本調査の期間中には、滋賀県立大学故高橋英久二氏・林博通氏、立命館大学和田晴吾氏、滋賀県埋蔵文化財センター田中勝弘氏、滋賀県立琵琶湖博物館川田政晴氏、および滋賀県教育委員会文化財保護課のご指導を受け、調査後の埴輪の整理においては滋賀県文化財保護協会辻川哲朗氏のご教授を得た。また、荒神山古墳調査検討委員会を開催して調査の成果をご検討願い、荒神山古墳が国指定に値する古墳であるとの評価をいただいた。委員会の委員は、和田晴吾氏・林博通氏・田中勝弘氏・用田政晴氏・辻川哲朗氏にお願いし、滋賀県教育委員会文化財保護課にオブザーバーとしてご出席を願った。
- 本書はVI章を林が、その他を谷口が執筆した。
- 本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
- 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

## はじめに

荒神山は、これまで古墳時代後期の群集墳が山中に散在することは良く知られていたが、古墳時代前期に遡る荒神山古墳については、埴輪片が散布するなど一部の研究者によってその存在が知られるだけであった。平成14年3月から4月にかけて、滋賀県立大学考古学研究室と彦根市史編さん室が、市内遺跡の資料作成事業の一環として当古墳の測量調査を実施し、全長約114mの前方後円墳を想定した。

これらの成果を受けて、彦根市教育委員会文化財課では、平成15年度から平成20年度にかけて4次の範囲確認を主とした発掘調査を実施した。現地調査の期間は、1次調査：平成15年6月9日～8月12日、2次調査：平成16年8月2日～11月10日、3次調査：平成18年7月12日～平成19年2月28日、4次調査：平成19年8月1日～10月12日であった。調査の箇所は、平成15年度には前方部と後円部にそれぞれ3箇所、平成16年度にはそれを補うように6箇所の狭長なトレンチを設けて範囲の確認を行い、全長124mの古墳であることが判明した。平成16年度の調査では、測量法に基づく基準点(3級・4級)の設置と補足測量も併せて行い、報告書を刊行(『荒神山古墳—平成15・16年度範囲確認調査概要』2005年3月)して彦根市指定文化財とした。その後、平成18年度と19年度には、とくに前方部のデータの不備を補う目的で3箇所にトレンチを設定して詳細調査を実施するとともに、さらに周辺の測量を行って指定域を確定し2次の成果を再び報告書に認めた(『荒神山古墳Ⅲ・Ⅳ—平成18・19年度範囲確認調査概要』2008年3月)。本書は、これまでの4次にわたる調査の成果を集成して、当古墳の歴史的位置付けを明確にしようとするものである。

なお、平成22年1月13日には、荒神山古墳調査検討委員会を開催して調査の成果を検討願い、荒神山古墳が国指定に値する重要な古墳であるとの評価をいただいた。

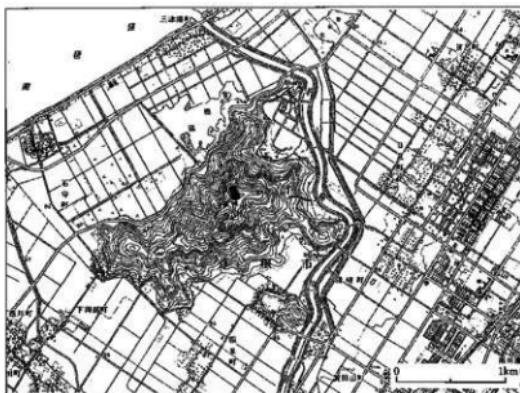


図1 荒神山古墳位置図

## I 位置と環境

### 〔荒神山古墳の位置〕

荒神山古墳は、彦根市域の西方、琵琶湖岸に近い湖東平野の独立丘である荒神山（標高284.1m）の、山頂から北へ約150m下った尾根の頂部に位置している。尾根頂部の標高は278.0m、山麓との比高差は約190mを測る。古墳の墳丘は山麓の平野部より、むしろ琵琶湖に向かって眺望が開けており、琵琶湖を意識した築造となっている点は留意される。古墳が築かれた当地は、かつて犬上郡と愛知郡の郡境に位置し、現在も彦根市日夏町（字口夏山）、清崎町（字山之脇）、三津屋町（字山ノ子）、石寺町（字山王山）の4つの町の境界線上に存在する。

### 〔地理的環境〕

湖東平野は、平野の中に独立丘が点在するのが特徴である。その独立丘の中でもひときわ規模が大きく高いのが荒神山である。この荒神山を大きく湾曲して取り巻くように宇曾川が流路を刻む。いさか不自然な流れであるが、川の両岸に自然堤防がよく発達しており、この流路はそれほど新しいものではない。

荒神山を境に、下流域には曾根沼を包み込むように低平な三角州が広がっており、琵琶湖岸に至って砂堆（浜堤）が発達する。砂堆は、琵琶湖に注ぐ河川によってもたらされた砂が、沿岸流によって流されて堆積したもので、彦根辺りの琵琶湖岸ではとりわけ顕著である。曾根沼は、荒神山にさえぎられて宇曾川の堆積が及ばなかったことから、砂堆との間に生まれた内湖である。こうした内湖も、かつては湖岸に数多く点在していたが、その多くが埋め立



図2 彦根の自然地形（『新修彦根市史』第1巻より）

てられて姿を消している。曾根沼もまた南半分が干拓されて陸化する。

一方、荒神山より上流域では、宇曾川がもたらした土砂により、先述の自然堤防のほか氾濫原や後背湿地が発達している。自然堤防は微高地であり、多くの場合はそこに集落が立地している。氾濫原や後背湿地は一面の水田地帯になっている。かつては、古代の条里地割が広がっていたが、近年は圃場整備により大区画の水田に変容している。

荒神山の数km西には、宇曾川よりはるかに大きな愛知川が北西に流路を刻んでいる。湖岸には砂堆と三角州が琵琶湖に向かって突出しており、川の両岸には自然堤防がよく発達する。なお、現在の愛知川は、服部町の北辺で北から西へと大きく屈曲しているが、この位置から彦富町、出路町、田原町、岡部町、西川町、甲崎町、そして湖岸の薩摩町へと伸びる自然堤防が顕著に認められる。各町は自然堤防の上に立地しているのである。留意されるのは、この自然堤防を境にして古代の条里地割に食い違いが生じている点である。一方で現在の愛知川を境に古代条里地割の食い違いは認められない。古代条里が施行された頃、旧愛知川は彦富町から薩摩町へと流路を刻んでいたと考えられ、当時の郡境も旧愛知川に沿ったものであった。

こうして宇曾川と愛知川の両河川は、時には河道を変えるほどの洪水を繰り返しながら肥沃な土壤をもたらし、当地に住む人々の生活と生産の場を提供してきたのである。

#### 〔歴史的環境〕

荒神山の山中や周辺には数多くの遺跡が存在する。その多くは未発掘の状態にあり、全容は杳として知れないが、発掘調査や文献資料などで明らかになっているものを時代順にまとめて、その特質を見ておこう。

**縄文時代** 彦根市域において、現在確認されている最古の土器は、荒神山の西、屋中寺遺跡の北辺で、河道状遺構の堆積土内から出土した縄文時代早期後半の押型文土器である。これらの土器は、縄文時代中期の船元式土器や北白川C式土器とともに出土した。彦根市域では、縄文時代後期・晩期の土器を出土した福満遺跡や松原内湖遺跡、晩期の土器を出土した矢倉川遺跡、同じく晩期の土器棺墓2基が出土した肥田城跡（平成20年度：4次調査）などが知られる。各遺跡とも平地に存在する遺跡であり、河川や琵琶湖の水産資源を食料源とした縄文人の存在が推測されるが、荒神山周辺の調査例はいまだ限られており、その詳細は今後の資料の増加を待ちたい。

**弥生時代** 屋中寺遺跡南辺から隣接する稲里遺跡の一帯では、弥生時代前期後葉に亘る遺構や遺物が検出されている。稲里遺跡で検出した土坑には、大量の稻穀とともにアワ・ヒエ・キビなどの雑穀類が確認されている。このことは当地でも水田稲作が行われるようになっていたことを示しているとともに、稲作以外の雑穀栽培も併用されていたことを推測させるものであり興味深い。また、土坑からは弥生時代前期後葉の「遠賀川系土器」とともに、東海地方に広く分布する「条痕文系土器」が混在状態で出土している。こうした様相は滋賀県の

北部や東部では一般的な傾向であり、畿内とともに東海地方との交流が著しい地域であったことを物語っている。

弥生時代中期になると彦根市内でも遺跡数が増加し、荒神山周辺でも妙楽寺遺跡や川瀬馬場遺跡などでまとまった遺構や遺物が確認されるようになる。また、荒神山とはやや距離を保つが、肥田西遺跡や肥田城跡でも遺構や遺物が出土している。

妙楽寺遺跡は荒神山の東麓、宇曾川に隣接して存在する遺跡である。宇曾川の災害復旧事業に伴って、昭和59年、同60年、同62年、平成3年の4次の調査が実施されており、1次調査と3次調査で弥生時代中期前葉から後葉に至る遺構や遺物を検出している。遺構には竪穴住居や溝・土坑などがあり、長期にわたって集落が営まれたことが明らかとなった。

川瀬馬場遺跡は荒神山の東方に位置する遺跡である。これまで昭和56年、昭和62年、平成21年と3次の調査が実施されており、弥生時代中期中葉から後葉の集落が確認されている。4本ないし6本程度の柱からなる掘立柱建物や溝・土坑などが検出されており、遺構内からは多くの遺物が出土している。出土した土器には、中期中葉に近江型甕として生まれ、中期後葉以降古墳時代前期に至るまで受口状口縁甕として長く命脈を保った近江に特徴的な煮沸用甕が数多く含まれるなど、当地における弥生時代中期の基準資料となるものである。なお、調査地が比較的湿潤な地であったことから木製品の遺存も良好であり、中には双頭渦文を施した精緻な木製板など稀有な例も存在する。細やかな双頭渦文の施文は鉄製工具の存在を推定させるに十分であり、その意味でも当時代の証左として貴重である。

肥田西遺跡は、荒神山の南方およそ3kmに位置する遺跡であるが、ここで検出した溝から弥生時代中期後半の土器が出土している。また、隣接する肥田城跡でも溝から弥生時代中期後半の土器が出土しており、包含層からも弥生時代中期後半～弥生時代後期の土器が出土するなど、周囲に同期の遺構が広がっているものと想定される。

弥生時代後期には、妙楽寺遺跡で中期以来の集落が存続するのを4次にわたる各調査で確認している。遺構として検出されているのは、竪穴住居のほか土坑や溝などである。比較的広範囲に遺構が広がっており、しかも次の古墳時代前期に継続している。縄文時代早期・中期の遺物が出土した屋中寺遺跡でも、下岡部町の東方で井戸・溝・河道状遺構そして導水施設などを検出しており、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土している。一帯に同期の集落が広がっていると想定される。荒神山の東麓と西麓に位置する妙楽寺遺跡と屋中寺遺跡が、ともに弥生時代から古墳時代前期へと集落を存続しているのは留意されるところである。

古墳時代 古墳時代前期には、弥生時代後期より継続する妙楽寺遺跡や屋中寺遺跡のほかにも、下岡部西遺跡・普光寺遺跡・芝原遺跡などで新たに集落遺跡が誕生している。

下岡部西遺跡は、屋中寺遺跡の西方約300mに位置する遺跡である。昭和57年度に実施された河瀬小学校校舎改築工事に伴う発掘調査により、包含層から古墳時代前期の甕などの遺物が出土している。屋中寺遺跡に連なる遺跡と考えられる。

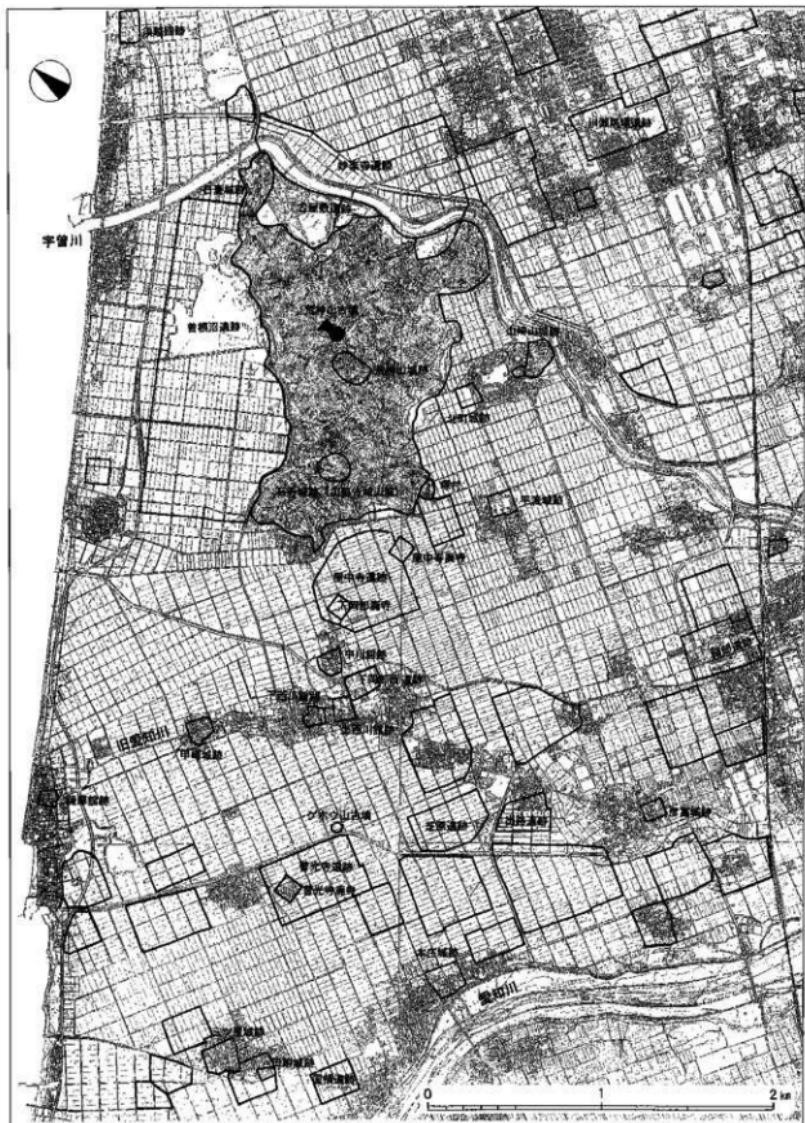


図3 荒神山周辺遺跡地図

普光寺遺跡は、荒神山の南西約2kmに所在する普光寺町の東方一帯に広がる遺跡である。平成3年度および5年度に実施された土地改良事業に伴う発掘調査によって、柱穴や不定形な落ち込みなどを検出しており、古墳時代前期の土器が出土している。

芝原遺跡は、普光寺遺跡に隣接し、普光寺遺跡の南東およそ500mに所在する遺跡である。平成5年度に実施した道路改良工事により、10棟を超える竪穴住居のほか溝・土坑などが密集して検出されており、多量の遺物が出土している。竪穴住居の1棟は床面の中央付近に方形の土坑があり、炭化物や灰の入った土坑内からはフイゴ片や鍛冶滓や鍛造片などが出土したことから鍛冶工房と推定している。共伴した土器から4世紀後半の遺構と考えられ、小規模ながら鍛冶工房が存在したことになる。弥生時代中期に始まった鉄器化は、まず恒常化する戦に対応するため鐵などの武器から始まった。その後、弥生時代後期以降に工具が、そして古墳時代中期には農具の鉄器化が加わったとされる。いまだ鉄素材の多くを輸入に依存していた古墳時代前期の段階に、鍛冶工房が発見された意義は大きい。なお、芝原遺跡は、続く5世紀代の遺構はほとんど確認されないものの、6世紀前半を中心とした11世紀に至るまで営々と集落遺構を刻んでいた。

弥生時代中期から古墳時代前期に至る集落の増加は、当該沖積地の開発の進展を示している。同時に、そこでは、水田経営の拡大のため、沖積地を流れる河川の治水灌漑を通して、集落の協同と序列化が進んだであろう。現状の限られた考古学的成果から読み取ることは困難であるが、幾度となく繰り返された集落の協同と序列化の過程で、集落を超えたまとまりが生まれるとともに、そのまとまりを統括する拠点的な集落を誕生させていったと考えられる。一方、拠点集落の中でも、集落の諸事を取り仕切る村長（ムラオサ）の権限拡大の過程で、さまざまな権限を奪取した統治者を誕生させることにもなった。古墳時代前期に登場する巨大古墳は、このような統治者の墓と考えることができる。

古墳時代の前期古墳を考える上で、弥生時代の墓制の変遷は重要な資料を提示している。とくに注目されるのは方形周溝墓という弥生時代に固有の墓制である。弥生時代以前にも集落を単位とする共同墓地は存在したが、水稻農耕の到来は自然の大地を食糧確保の生産手段である土地に変え、富を生み出す源として土地に対する執着をそれ以前とは比較にならないほど強く意識したであろう。その結果、墓地においても共同墓地の中を区画して一定の土地を墓として占有するようになった。それが遺構として顕在化したものが方形周溝墓であると考えられる。近年、方形周溝墓については研究が進み、おおよその変遷をたどったと理解されている。

方形周溝墓が誕生した当初は、各方形周溝墓に規模の格差は認められず、共同墓地内に同規模のものが同等に群集するものであったが、やがて特定の方形周溝墓に規模などにおいて卓越したものが認められるようになり、格差を生じるようになる。特定の家族や個人だけが卓越した状態で埋葬されるようになったのである。ただ、それでも共同墓地内に埋葬されることに変わりはなかった。ところが、ついに共同墓地を離れ、家族的な臍帯からも抜け出し

て、特定の個人だけが共同墓地から隔離した位置に特別の葬法で埋葬されるようになる。その被葬者こそ、拠点集落のさまざまな権限を奪取し、家父長的家族の血縁的臍帯を脱した統治者の姿と理解されるようになった。

近江において、こうした統治者は、方形周溝墓の伝統の下に前方後方墳を築くようになる。ただ、方形周溝墓から前方後方墳への発達はそれほど容易ではない。両者の間には幾段ものステップが介在したと考えられている。そのことをやや模式的に記述すると、まず大型方形周溝墓の一辺の周溝の中央に陸橋部を形成したものが現れ、その陸橋部が徐々に発達して後方部を形成するに至ったと理解される。陸橋部で葬送儀礼が行われ、その場が独立し成長して後方部を生み出したということであろう。ともあれ、こうしたステップを踏んで誕生した前方後方墳が、弥生時代後期末から古墳時代前期前半にかけて近江各地で確認されるようになる。彦根市内ではこうした様相を確認できていないが、県内では東近江市神郷亀塚古墳（弥生時代後期末・全長37.9m）・高島市熊野本古墳群中の6号墳（弥生時代後期末・全長27m）・長浜市高月町古保利古墳群中の小松古墳（弥生時代後期末・全長60m）そして大津市皇子山1号墳（古墳時代前期前半・全長60m）などが知られている。中でも愛知川左岸に位置する神郷亀塚古墳は3.8mの盛土を残しており、明らかに高塚を意図して構築されている点でも従来の方形周溝墓とは異なっている。家父長的家族の血縁的臍帯を脱した統治者の姿は、従来の方形周溝墓に葬られた有力家族の村長とは、墓を造る労働力においても大きく異なって卓越した存在となっており、隔世の感がある。

ただ、それでも近江の前方後方墳を概観すると、いまだ周囲に方形周溝墓を共存させるなど弥生時代以来の墓制の伝統を引きずるものも少なくない。地域により墓制の発達に遅速が認められるのである。このような混沌とした状況が、むしろ来る「前方後円墳の時代」に先行する、近江の「前方後方墳の時代」の特質と見ることができよう。

なお、前方後方墳をいまだ確認していない彦根市域でも、荒神山の西にある屋中寺遺跡で興味ある遺構を検出している。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭ころに築かれたと推定されている導水施設である。導水施設は、素掘りの溝から発見されたもので、木管と木樋を組み合わせたものである。全長5.5mからなり、針葉樹の板材を箱形に組んで木樋による取水部とし、芯が朽ちて空洞となった広葉樹の丸太材を据えて木管としている。およそ3度の傾斜が保たれている。こうした導水施設が、県内でも守山市服部遺跡から出土するなど類例が増加しており、近年では古墳からもそれを形象化した埴輪の存在が知られるようになった。

このような導水施設のあり方は農耕祭祀の1形態と考えられており、導水施設を用い净水を得る儀礼を通して水と土地を鎮め、農地の開発と保全を祈つたのであろう。それは農地を占有し支配するようになった統治者の存在を勞隸せるものであり、屋中寺遺跡で導水施設が出土することは、当該域にも統治者が存在したことを証左するものであろう。

荒神山古墳の時代　近江において拠点的な集落が生まれ、その統治者が方形周溝墓の伝統を引く前方後方墳に埋葬されるようになった頃、大和を中心とする畿内では、方形周溝墓の伝

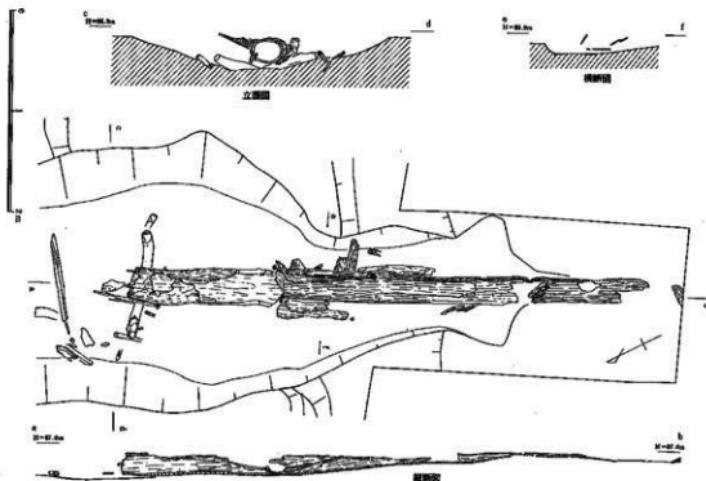


図4 導水施設(屋中寺廃寺遺跡出土)「屋中寺廃寺遺跡」滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

統を否定し前方後円墳を誕生させた。そして早くも3世紀中頃から後半には、畿内型と称される定型化した巨大な前方後円墳が築造されるようになる。この時期の前方後円墳は、左右対称の前方後円形の墳丘、墳丘を覆う葺石、墳丘を巡る埴輪、被葬者を埋葬する竪穴式石室と長大な木棺が特徴であり、木棺内には鏡、鉄形石・車輪石・石劍などの石製腕飾品、勾玉・管玉などの装身具、鉄製の武器・武具、鉄製の農工漁具などを副葬した。こうした100mを超える規模の前方後円墳が、大和を中心とする畿内において各地に築造され、大和を中心に結束する連合政権の存在が想定された。

強大化した大和政権の勢力は、やがて前方後円墳を築いてこなかった周辺の地域にも及び、大和政権を頂点とする政治体制が確立していくことになった。近江でも4世紀前半頃になると、大和政権の勢力の進出が顕著となり、これまで前方後方墳を築いてきた在地勢力に多大な影響を及ぼすようになる。いち早く大和政権の下に参画した在地勢力は、その葬制においても従来の前方後方墳を廃して新たに前方後円墳を導入するようになるが、大和政権に抗した在地勢力は前方後方墳に固執しつつ、しだいに勢力を衰退させていった。

先述の熊野本古墳群では前方後方墳の6号墳に変わって前方後円墳の12号墳が築造され、古保利古墳群でも前方後方墳の小松古墳に変わって深谷古墳などの前方後円墳が新たに築造されるようになった。同じ古墳群の中に新たに前方後円墳が加わった意義は大きく、在地勢力が墳形を変えていち早く大和政権下に参画したことを見ているが、新たに築造された前方後円墳は墳形が不定形であるなど、いまだ畿内の定型化された前方後円墳とは言い難いも

のであった。

一方、先述の大津市皇子山1号墳や愛知川左岸の神郷亀塚古墳などの前方後方墳は、その後に継続する古墳が確認されなくなり勢力の衰退が予測される。また、野洲川や天野川流域のように4世紀後半になんでも伝統的な円形墳や方形墳を存続させるなど、大和政権の近江進出にともなう在地勢力の動向は多様なものであった。

このような状況の中で、4世紀中頃以降、近江にも定型化された畿内型前方後円墳が出現してくる。その嚆矢と言えるのが日野川流域に築かれた全長70mの雪野山古墳である。墳形がやや不定形な前方後円墳であり埴輪を巡らせていないが、主体部は畿内型の竪穴式石室を持ち、三角縁神獣鏡を5面副葬するなど定型化された畿内型前方後円墳に極めて近い。この雪野山古墳にやや遅れて築造されたのが、全長134mと県下最大規模を有する安土瓢箪山古墳である。墳形・竪穴式石室・副葬品など典型的な畿内型前方後円墳である。そして4世紀末には瀬田川右岸に膳所茶臼山古墳が、また荒神山の山頂付近には荒神山古墳が築かれるのである。このような定型化された畿内型前方後円墳の出現は、大和政権との直接的な深いつながりが推測され、大和政権の政治的な意図に基づいて築造されたと推測される。同時に、荒神山古墳がそうであるように、これまで在地勢力の古墳が存在しなかったり衰退していった地域に新たに出現する傾向が認められ、しかもその後に継続する古墳が少ない点は留意すべきであろう。

4世紀に入って近江に進出した大和政権は、近江の在地勢力と連合し制圧しながら、さらに日本海地域や東海地方へと版図を拡大するため、その進入ルートを確保する必要があった。

そのため陸路と水路の両面にわたって交通の要衝を押さえ、その地の在地勢力に前方後円墳という新たな墓制を供与した。4世紀後半になると、大和政権は朝鮮半島との交流をも目的とするようになったため、とりわけ琵琶湖の湖上交通の掌握に力が注がれるようになった。膳所茶臼山古墳や荒神山古墳など定型化された畿内型前方後円墳が、琵琶湖を意識して築造され、しかもそれらが連携してネットワークを構成するようになるのは、大和政権の政策の証とを考えることができる。近江における前期古墳、とくに前方後円墳の分布状況は、大和政権の政策を如実に物語るものであった。

古墳時代中期 5世紀に入ると、大和政権は朝鮮半島、さらに中国大陆へと交流を広め、倭国全土の大王であることを内外に示すことになる。いわゆる「倭の五王」の時代である。河内の古市古墳群、和泉の百舌鳥古墳群の大王墓を頂点として、各地で王墓が築かれた。近江でも前期に見られた在地の前方後方墳は姿を消し、定型化した畿内型の前方後円墳が築かれて大和政権との関係が安定化する。この時期、彦根市域では荒神山古墳以降に同期の古墳は確認されていない。ただ、荒神山の南西端に所在する塚村で、古墳と思しき痕跡が存在する。明治初期に描かれた絵図を見ると、塚村が馬蹄形に描かれ、周囲を水路が取り囲んでいる。水路は昭和の圃場整備以前には幅4mほどの堀であったと伝える。古墳を示す遺物の出土



写真1 塚村絵図（「近江国愛知郡第拾二区塚村・延寿寺村・下平流村合村総絵図」部分）

はないが、全長100m、周濠を含めると150mを超える古墳時代中期に特徴的な大型前方後円墳であった可能性が考えられる。塚村の名はそのことに由来すると考えられなくもない。また、塚村の西方およそ900mの下岡部には「白塚」の小字名を残すなど、一帯に中期の古墳群が存在した可能性がある。今後の調査が期待されるところである。

古墳時代中期は、朝鮮半島や中国大陸との交流が盛んになった結果、それを主導した大和政権を経由して、各地の王の下にも先進的な技術や文化が導入された。初めて

本格的な窯を用いた須恵器の生産技術が到来し普及した。また、鉄の国内生産の確立により農具の鉄器化が行われて農業生産力が向上し、広範な水田開発が行われた。竪穴住居に窯を設けるようになるのもこの時期からである。荒神山周辺においても塚村古墳などの王によって、こうした先進的な技術や文化が導入されたと考えられるが、これまでの発掘調査では、この時期の遺構はほとんど明確になっていない。今後の調査の進展に期待したい。

**古墳時代後期** 6世紀の初め、畿外出身の繼体大王が即位する。彼の即位に際しては、それを支持する勢力とそうでない勢力との間で、大和の勢力のみならず畿内外の諸勢力をも巻き込んだ大きな対立が生じた。近江では繼体大王を支持する勢力の伸張が認められ、琵琶湖の水運と権益などを背景に勢力分布に変化が生まれたと考えられている。荒神山古墳以来、湖上交通の要の役割を担う荒神山周辺でも新たにゲホウ山古墳が築造されている。この古墳については、荒神山の西、普光寺町の東に「ゲホウ山」と称する古墳の伝承地があり、古くから注目されてきた。平成5年の圃場整備に伴う発掘調査によりゲホウ山古墳の南端に位置する辺りで周濠の一部が検出され、須恵器や土師器とともに多数の円筒埴輪や形象埴輪が出土した。形象埴輪には鶴形・馬形・蓋形・人物形があり、埴輪の製作技法から6世紀の製作が想定され、全長50m程度の規模を予測している。ゲホウ山古墳の近くには、上岡部町の岩神古墳、出路町の出路古墳など、発掘調査は行われていないが古墳時代後期と想定される古墳の伝承があり、注目される地域である。

また、近年では荒神山のおよそ3km南の肥田城跡でも、平成20年度の圃場整備に伴う4次調査で、小字塚乞手（つかごえど）の地から6世紀前半の古墳の周濠が検出された。周濠からは円筒埴輪とともに鳥形や蓋形などの木製埴輪が出土し注目されている。木製埴輪は、5世紀になって河内の大王墓の造営に伴って新たに考案された樹立物と考えられており、大和で群を抜いて多く出土する。近江でもこれまでに8遺跡から9基の古墳で出土例が知られ

るが、その特異性から、河内や大和など畿内勢力と特につながりの深い被葬者像が想定されている。

總体大王の出現した6世紀前半は、古墳の構築法が大きな画期を迎えた時期でもある。從来の竪穴式石室に変わって横穴式石室が採用されるようになり、近江でも主要な古墳で横穴式石室が構築されている。こうした王の古墳が横穴式石室に変化する時期に、これらの構造とは大きく異なる横穴式古墳を築造する

人々が存在した。荒神山山中にも荒神山古墳群にその姿を見ることができる。6世紀後半に築かれた山王谷支群の群集墳に、玄室の平面形が方形ないしそれに近い長方形で、その4壁を持ち送ってドーム状の天井とする横穴式石室が存在する。この特殊な形状をもつ古墳群が、近江では大津市北郊地域のほか米原市の磯崎古墳群などでも確認されており、いずれも渡来系氏族の古墳群と考えられている。これらの古墳群は、近くに有力古墳が存在すること、琵琶湖岸に群集するなどの共通点が認められる。荒神山の山王谷支群は琵琶湖を見下ろす位置に築かれており、近くにはゲホウ山古墳や塚乞手古墳などの有力古墳が築かれていた。古墳時代後期に琵琶湖の水運を掌握するなどして新たに勢力を持つようになった王のもとに、外来の新しい技術を提供して王を支えた渡来系の氏族集団が存在したと想定されている。

なお、荒神山に築かれた群集墳は、山王谷支群の17基のほか日夏支群の6基など合計33基が確認されている。ただ、これらの古墳に対応する同期の集落は、今のところ芝原遺跡や稻部遺跡で若干存在が確認されているに過ぎない。さらに多くの集落が、いまだ水田下に眠っているものと考えられる。

一方、この時代には、在地の人々の間にも群集墳を築く階層が誕生している。荒神山とはやや距離を保つが、犬上川左岸の森堂町にある段ノ東遺跡や西葛籠町の葛籠北遺跡で群集墳が検出されている。段ノ東遺跡は、排水路の工事に伴って6世紀中葉の方墳2基、円墳2基を確認しており、周囲にさらに多くの古墳が群集していると想定される。方墳の1基からは埴輪片が出土している。これらの古墳は、いずれも横穴式石室ではなく、伝統的な箱式の組合木棺に遺体を直接埋葬する葬法を用いている。また、中学校校舎建設に伴って発掘調査が

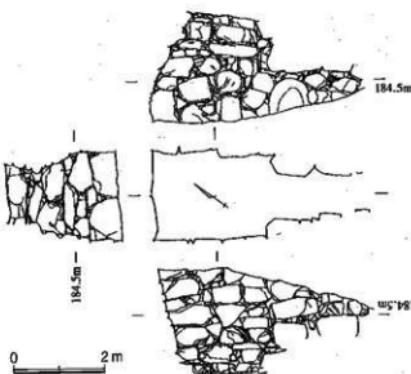


図5 荒神山古墳群山王谷支群1号墳実測図（『新修藤根市史にともなう藤根市内遺跡・遺物調査報告書』より）



写真2 子持勾玉（福満遺跡出土）

る。葛籠北遺跡の古墳群は、こうした集落から輩出された在地の有力氏族が墓域を形成していたと想定される。なお、福満遺跡では6世紀後半と推定される子持勾玉が出土し注目されている。子持勾玉は、長さ8.1cm、幅5.4cm、厚さ3cmを測り、背部に3個、腹部に1個、側面に各2個ずつ、合計8個の小型勾玉を付け、体部には竹管状の小さな円圈を配している。こうした子持勾玉は、日本海地域から信濃、そして関東方面に出土例が知られ、さらに朝鮮半島でも出土することから、日本海地域を経由して朝鮮半島との交流があったことが指摘されている。興味深い貴重な出土品である。

6世紀後半頃になると古墳時代の代表的な墳墓であった前方後円墳は築造されなくなり、巨大な墓を特徴とした時代は、いよいよ終焉間近となる。群集墳もまた7世紀中頃には築かれなくなり、荒神山山麓に築かれた群集墳もこの頃までに造墓を終えている。ただ、集落そのものは、屋中寺遺跡や下岡部西遺跡など荒神山西方一帯でしだいに発達の兆しを見せ、白鳳時代さらに奈良時代へと継承されて、来るべき律令体制を支える原動力となるのである。

白鳳時代 7世紀後半になると、新しく伝来した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でも6箇所でこうした古代寺院の痕跡を確認している。旧犬上郡の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂廃寺、旧愛知郡の屋中寺廃寺・下岡部廃寺、旧神崎郡の普光寺廃寺である。ここでは荒神山に近い屋中寺廃寺・下岡部廃寺・普光寺廃寺の3つの古代寺院跡について簡単に紹介しておこう。

屋中寺廃寺は、上岡部町字屋中寺一帯に所在する古代寺院跡である。昭和2年の耕地整理の際、礎石や柱根そして多量の瓦が出土した。石田茂作氏は、礎石や柱根の有り方から法隆

行われた葛籠北遺跡では、6世紀中葉から7世紀前半の8基の円墳と5基の土坑墓を確認しており、これらは旧河道を境として2つの支群に識別できる。やはり伝統的な箱式組合木棺や土坑を葬法として採用していた。これらの古墳は犬上川の扇状地端部に位置しており、供獻された鎌の存在などからも、豊かな湧水を用いて水稻農耕に從事していた在地の有力氏族集団の存在を覺察とさせる。

犬上川流域では、葛籠北遺跡の古墳群に対応するように、左岸で神ノ木遺跡・南川瀬南遺跡・上沢尻遺跡、右岸でも品井戸遺跡・福満遺跡・竹ヶ鼻遺跡などで6世紀代の集落が営まれている。

寺式または法起寺式の伽藍を想定している。出土した瓦には、素弁八葉文・單弁八葉文（山田寺式+川原寺式）・複弁八葉文の軒丸瓦と、三重弧文・均整唐草文の軒平瓦がある。7世紀後半を主に、奈良時代の軒平瓦が含まれている。「平安遺文」に、当地のすぐ東に川原寺の莊園である平流莊が存在しており、川原寺の影響の下に建立されたと考えられている。

下岡部廃寺は、屋中寺廃寺の西南約650mの近距離に築かれた古代寺院跡である。下岡部町の東北の墓地近在が寺院跡に想定されている。單弁八葉文（山田寺式）・複弁八葉文（川原寺式）・複弁八葉文の軒丸瓦などが出土しており、7世紀後半の建立と考えられる。墓地の周辺は小字を大村と称しており、「近江国朝流村集田地図」（天平勝宝3年：751）に表記された「大村寺」が当廃寺と推定されている。

普光寺廃寺は、普光寺町の広浜神社境内に巨大な塔心礎が存在することで知られる古代寺院跡である。複弁八葉文（川原寺式）・複弁八葉文（法隆寺式）の軒丸瓦や重弧文軒平瓦などが出土しており、7世紀後半の建立と考えられる。石田茂作氏は、小字名から東に金堂、西に塔を配置した法隆寺式の伽藍を想定している。なお、「普光寺」の名が正嘉元年（1257）の神田文書や大永5年（1525）の泉涌寺文書に記載されるが、そのことが普光寺廃寺のことを示しているかどうかは定かではない。

7世紀後半に建立されたこれららの古代寺院跡は、当時の地方豪族が新たに到来した仏教文化をいち早く取り込んで、自らの氏寺として建立したものであった。このような氏寺が近い位置に3箇所も存在するのは、荒神山西の沖積地の開発が比較的早く進み、農業生産力が向上していたことを物語るものであろう。

奈良時代 7世紀後半以降、日本では中国にならった律令制に基づく中央集権的な国家体制を築いていく。とくに大宝元年（701）に作られた大宝律令により、日本の律令体制は法的に一応の完成をみた。大宝律令制定後の律令体制下における地方の行政組織は、国-郡-郷（天平11年：739以前は「里」）であった。近江国府は大津の瀬田丘陵上に置かれたが、郡と郷の在り様を彦根市域で見ておこう。

郡家（ぐうけ）については、竹ヶ鼻町の竹ヶ鼻廃寺の発掘調査により、古代寺院跡であることを示す多量の瓦とともに、整然と並ぶ規模の大きな掘立柱建物群を検出しており、寺院と並んで大上郡家が存在したのではないかと推定している。出土遺物にも円面鏡や銅匙など官衙的な品が出土する。国司が中央から派遣されるのに対して、郡司はその地方の有力者が



写真3 広浜神社境内の塔心礎

任命されたようであるが、犬上郡の郡司は郡名を負う犬上氏が有力視されている。

また郷の所在地として、神崎郡に7郷、愛知郡に6郷、犬上郡に11郷が存在したようであるが、彦根市域としては、神崎郡の場合、甲崎町一帯に神崎郷、甲崎町・新海町に小社郷が想定されている。同様に愛知郡では肥田町一帯に平田郷が、また犬上郡では東沼波町・西沼波町に沼波郷、高宮町に高宮郷、安食中町に安食郷、清崎町に清水郷、開出今町に竜田郷、八坂町に青根郷、大堀町・正法寺町に駅家郷がそれぞれ考えられている。各郷は、税の最小単位である戸が郷長の下に50戸集まって律令体制を底辺で支えていたのである。

こうした律令体制が整備される一方で、早くも養老3年（723）には三世一身法、そして天平15年（743）には難田永代私財法が成立するなど、難田の私有化が認められるようになった。彦根の地でも、天平勝宝3年（751）の東大寺領難田地図に現在の荒神山である朝流岡が描かれ、隣接して朝流村70町の開発地が記されている。朝流村は三津屋町と石寺町の範囲に当たり、この地がのちに東大寺の莊園になった。荒神山周辺でも、公有地である口分田とともに開発私有地が早くからすすめられていた様子を知ることができる貴重な資料である。公有地が郷と呼ばれたのに対して、開発私有地は「村」と表記されている点も興味深い。

このころ朝流岡と呼ばれていたことが明らかとなった荒神山であるが、古墳時代に荒神山古墳や群集墳を築くなど長く葬送の地であったこの山は、奈良時代以降、仏教の要素が加わり、神仏の山へと様変わりしていく。やがて山頂には奥山寺が建立され、山麓の天台宗寺院



写真4 男神像形象（本隆寺藏）

（現在の千手寺・延寿寺）や神社（唐崎神社）が深く関わりながら、天台宗延暦寺系の修験の一拠点であったことが最近の研究で明らかになっている。現在、石寺町の本隆寺で管理されている男神僧形像（奈良時代後期～平安時代初期）は、明治初年の神仏分離までは山頂の奥山寺（荒神山神社）に祭られていた。この像は頭を円頂とした僧の姿に作られ、腹の前で左右の手を上下に重ねている。手に持物は失われているが、かつては笏を持っていたと推測され、神が仏教に帰依し出家した姿を現している。葬送の山であり神の山であった荒神山が、仏教化していく過程を象徴的に示すものとして注目される。

平安時代 延久2年（1069）、後三条天皇は莊園整理令を発布した。このような莊園整理令はたびたび出されており、それ自体は画期的な意味を持つものではない。ただ、後三条天皇

の発した莊園整理令の重要な点は、朝廷に莊園の所在・領主・田畠の面積などを提出し、一定の条件を満たせば朝廷が莊園を認可したのである。7世紀後半以降、日本の国家体制である律令制は「公地公民」を原則とし、建前としては私有地を認めて来なかった。私有地である莊園を朝廷が公認したことにより、公的な莊園の成立が、やがて到來する中世社会の基盤をなしていくのである。

後三条天皇は自らの経済基盤の確立にも積極的であり、勅旨田の名のもとに実体としての莊園を各國に設けた。彦根の後三条町近在にも後三条勅旨田が存在している。この頃に彦根市域には、善利莊が芹町・芹川町付近に京都太秦の広隆寺領として設けられたほか、犬上莊が高宮町・安食中町付近に近衛家領として、清水莊が旧清水郷の清崎町付近に山科の勧修寺領としてそれぞれ成立する。

**鎌倉時代** 鎌倉時代になると、近江の中世史に大きな影響を与える守護佐々木氏が登場する一方、莊園制が最終的に確立し、中世社会の枠組みができあがった。この頃、近江は、都の至近にあり、東国・北国との接点ともなるため、多くの莊園が成立した。とくに比叡山延暦寺（山門）の藤元として、山門領莊園が大きな比重を占めた。近江国内における山門領莊園は200箇所近くにのぼり、延暦寺と密接な関係にある日吉社領も50箇所以上に及んだという。

彦根市付近でも山門領莊園として彦根市の南端から東近江市の北端、つまり愛知川河口の両岸に栗見莊が成立する。栗見莊は栗見十郷がその莊域と考えられている。彦根市域では新海町・田附町・本庄町が含まれる。本庄町の久留美神社は、明治以前には栗見莊二宮・十津師社と称しており、木造聖観音菩薩立像（平安時代）や2つの鼻高面（応永15年：1408）などが伝えられている。また、同神社所蔵の「栗見之庄由来之事」（寛政4年：1792）によれば、莊内十郷の祭礼で日吉山王七社の神輿が4月に7日7夜の神事を行っていたと記している。愛知川の流路が変わり莊域が分断されても、栗見莊の伝統は長く続いている。

また、彦根市の北部から米原市の南部にかけた地には、鎌倉時代を代表する歌人藤原定家の領吉富莊も成立している。中世東海道の小野宿も含まれており、交通の要衝を抱える莊城であった。この吉富莊は、南北朝以降には小野の名を冠して小野莊と呼ばれるようになり、冷泉家が領するようになっている。

**南北朝・室町時代** 南北朝から室町時代になると、近江の莊園は、寺社領や公家領とともに武家領が増加する。文献に現れた彦根市域の莊園を拾ってみると、これまで見てきた莊園のほかに、梶井宮門跡領の八坂莊、同じく梶井宮門跡領の高宮莊、同じく梶井宮門跡領の日夏莊、素順上人の領した小泉莊、泉涌寺領の沼波莊、大徳寺領の西今村莊、そして長曾根莊、福光莊、河瀬莊などが確認できる。

このような中世の莊園を構成する村落や都市については、文献資料だけでは具体的な姿を知ることが困難であったが、考古学的な調査の成果によりしだいに明らかになってきていく。彦根市内の調査例はいまだ乏しいが、その幾つかを見ておこう。

田附町の北方に位置する国領遺跡では平成15年度に発掘調査が実施され、11世紀から12世

紀を中心とした遺構や遺物が出土した。建物跡は確認していないが、溝や土坑などを検出しておらず、多量の土師器皿や黒色土器が出土している。溝の中からは妙法蓮華經が書写された15世紀頃の柿経がまとめて出土した。先述の栗見荘と直接関連するとは考えられないが注目される遺物である。

犬上川の河口左岸に位置する八坂遺跡では、平成14年度から15年度にかけて発掘調査が実施された。遺構面は2層あり、上層は14世紀後半から15世紀前半の畠の畠遺構であった。下層は12世紀前半から13世紀前半で、掘立柱建物や曲物井戸・溝などが検出され、土師器や東海系山茶碗のほか輸入陶磁器が出土している。八坂は八坂荘が存在し、中世より五箇商人の成員の一つとして琵琶湖を渡り遠く若狭と通商を結ぶなど、広く商業活動が行われた地である。輸入陶磁器の出土はこうしたこととも関連するものであろう。



写真5 石組溝（古屋敷遺跡出土）

荒神山の北東に位置する妙楽寺遺跡や古屋敷遺跡でも古代から中世の遺構や遺物が出土している。妙楽寺遺跡は、弥生時代中・後期から古墳時代前期の遺跡として既述したが、やや時を経た平安時代末から鎌倉時代（I期）、室町時代中期（II期）、15世紀末から16世紀後半（III期）、16世紀末（IV期）の4期が確認されている。I期・II期は掘立柱建物や井戸・溝などで構成される村の有り様を示している。ところがIII期になると犬上郡条里に沿って道路と水路が縦横に整然と区画された短冊形地割が顕著となり、地割内の屋敷地には掘立柱建物が延々と巡る。とくに水路が生活の中に積極的に取り込まれており、要所に舟入が設けられて琵琶湖につながっていたと想定される。出土遺物も日用雑器とともに貿易陶磁や茶道具が含まれている。もはや戦国の村ではなく琵琶湖岸に設けられた戦国都市の概観を呈している。IV期はIII期

の遺構を踏襲しているが、出土遺物を見てもIII期のような精彩はない。

一方、宇曾川の対岸、荒神山の麓に位置する古屋敷遺跡は14世紀から16世紀中期までの遺構が2面以上存在する。面的な調査が実施された16世紀中期の遺構は、石組溝と道路・土塁によって大小に区画割りされた屋敷地で構成されている。最大の屋敷割りは840m<sup>2</sup>、最小は80m<sup>2</sup>と格差が大きい。屋敷地には掘立柱建物とともに石組の枡や竈などが存在する。そして宇曾川側に水路が確認され、水路に降りる階段が設けられている。妙楽寺遺跡のIII期ほど整然としていないが、同様の機能を持つ都市空間が存在したと想定される。

**戦国時代** 代々にわたって近江の守護の地位にあった佐々木氏一族であるが、承久の乱（1221）により嫡流となった佐々木信綱のち、4人の子ども達がそれぞれ一家を起こして近江内で分立。以後、4家、中でも近江の北を領した京極氏と南の六角氏が、同族でありながら互いに牽制をして争いを繰り返すようになった。応仁の乱（1467～1477）が勃発すると、六角氏と京極氏はそれぞれ西軍と東軍に属し、近江でも国人・土豪を巻き込んだ戦いが繰り広げられた。国人や土豪は、鎌倉時代以来、荘園の莊官や村落社会のなかで成長してきたものである。彼らは日常的には自分の村の居館に居住し、村の指導者として生活していたが、度重なる戦いの渦中に居館を武装し詰城を構えて戦に対処した。同時に一族の命運をかけて六角氏や京極氏、京極氏の被官から台頭した浅井氏の配下に列したのである。彦根の地は、六角氏と京極氏・浅井氏の勢力の境目に位置しており、各勢力への去就にはとりわけ苦労したであろう。

彦根市域には、こうした国人・土豪の城や館が約60箇所に存在する。中で比較的大きなものが、佐和山城・高宮城・肥田城などである。一方で、荒神山周辺にも規模の小さな城や館を文献や遺構などから確認することができる。荒神山の山頂から北に伸びる尾根筋に城を構えた日夏氏の日夏城、荒神山の南の独立丘に山崎氏の山崎山城、須越町に須越館、荒神山山頂近くに荒神山城、山頂から西に伸びる尾根筋に石寺城（山脇古城山城）、稲里町の北町城と平流城、下岡部町の中川館、下西川町の下西川館、上西川町の上西川館、甲崎町の甲崎城、薩摩町の薩摩館、彦富町の彦富城、本庄町の本庄城、南三ツ谷町の三ツ屋城、新海町の新海城、そして田附町にある田附氏の田附城などなど。1つの集落に1つの城といつても過言ではないほどに城が林立している。

こうした城の中で、発掘調査が実施されたのが山崎山城である。山崎氏は、佐々木一族の愛知氏の流れと伝え、15世紀中頃に六角氏に仕えるようになった。山崎賢家の頃には、賢家の「賢」を六角義賢（承禎）から与えられるなど、六角氏の有力家臣になっていた。永禄11年（1570）織田信長の攻撃により六角氏が勢力を失うと、賢家は浅井勢に加わり、元亀元年（1570）の細川合戦まで浅井勢に属している。その後、信長方に転じ、信長の命により山崎山城を築いたと考えられている。山崎山城は、琵琶湖岸に近い下街道を見下ろす要衝に位置している。



写真6 山崎山城跡発掘調査風景

平成4年、当地に水道配水タンクの建設が計画されたため、同年から翌年にかけて発掘調査が実施された。調査では山の尾根のほぼ中央に大型の堀切が築かれ、この堀切を境として東側を城域としていた。堀切の土橋を渡った内側は櫓台と虎口が設けられ、尾根に沿って東西約90m、南北約20mが城郭となっていた。城郭の周囲には湖東流紋岩を数段積み上げて石垣としていた。かつては2.5m程度の高さがあったと推定される。この石垣は、その特徴が安土城の石垣に類似しており、山崎山城の築城も安土城と同じ天正年間の前半頃（1573～79頃）と想定している。従来の「土造りの城」が「石造りの城」へと大きく変化する画期に築かれた城跡として貴重な遺構である。

天正10年（1582）、甲州攻めを終えて岐阜より安土へ凱旋する信長を、堅家が山崎に茶屋を設けてもてなした記録（『信長公記』）が残っている。同年、信長が本能寺で倒れた後、堅家は秀吉の軍門に下り、天正11年（1583）、摂津三田城主に転じるとともに山崎山城は廃城となった。

近年、荒神山の南およそ3kmの地に位置する肥田城跡でも発掘調査が実施され、肥田城跡の一端が明らかになっている。肥田城は宇曾川をへだてて隣接する高野瀬城を本拠とした在地の土豪高野瀬隆重が、六角氏の命により築いたと伝える平城である。城の中核部は、江戸時代を迎えて間もない慶安3年（1650）に彦根藩の命により開墾され小字「上新田」「下新田」に変わっている。その北西と南西には「勘ヶ由屋敷」「孫右衛門」「藤藏屋敷」「丹波屋敷」「新助屋敷」「民部屋敷」「山王」などの小字名が残っており、家臣団の屋敷や寺が広がっていた。現在も屋敷地の広がる「登町」「西町」「東町」は短冊形地割と長方形街区が整然と残り、城下町の姿を留めている。こうした屋敷地を画すように外周には土塁と堀がめぐり、要所に門を設けて平城を形成していた。

平成19年度から20年度にかけて実施されたは場整備に伴う発掘調査では、「山王」と「丹波屋敷」を分ける区画溝や掘立柱建物が検出され、懸仏・卒塔婆・飲食器・燭台などの仏具が出土している。また、高野瀬秀隆の代に浅井氏に通じたため六角氏により水攻めを受けているが、その際に築かれた堤防の跡も検出している。

浅井氏滅亡後、秀隆は織田信長家臣の柴田勝家に仕えるが、天正2年に越前で自害。その後は信長・秀吉の下で蜂屋頼隆・長谷川秀一が肥田城主となって活躍するが、秀一が朝鮮出兵中に病死すると、肥田城に城主は置かれず、廃城と化した。

荒神山とその周辺は、宇曾川や愛知川がもたらした肥沃な土壤と琵琶湖を介した湖上交通により早くから開発と交流が進み、古墳時代前期の荒神山古墳をはじめ古代寺院や莊園、城郭など多くの文化財を生み出した。こうした豊かな文化財は、今日を生きる私達にとっても有益なものとして、それを明らかにし糧とするとともに、将来にしっかりと託していく必要があろう。

## II 1次・2次調査の成果

平成15年度の1次調査では、前方部と後円部にそれぞれ3箇所の狭長なトレンチ調査を実施した。また、平成16年度の2次調査では、平成15年度の調査を補う形で、6箇所に狭長なトレンチを設けて古墳の範囲確認に重点を置いた調査を行った。2次調査では、平成14年3月から4月にかけて滋賀県立大学考古学研究室と彦根市史編さん室が行った測量調査の成果を基に、その補足測量と基準点（3級・4級）の設置を行って測量法に基づく位置を明確にした。ここでは、そうした調査による成果を整理することにしよう。

### 古墳の規模

荒神山古墳は、その主軸を北北西—南南東に置き、前方部を北西に広がる琵琶湖に向かた前方後円墳である。各部位について現在確認している計測値は下記のとおりである。

全長約124m	前方部長約53m	後円部径約80m
	前方部長約61m	くびれ部幅約52m
	前方部高約10m	くびれ部高約9m

前方部の墳頂は、くびれ部近くが標高272.5m でもっとも低く、幅も9m ともっとも狭い。対する北北西の墳頂端は、標高273.5m でもっとも高く、幅も約18m を測り、もっとも広くなる。くびれ部と墳頂端の距離はおよそ45m あり、両者の比高差はわずかに1m である。くびれ部に荒神山神社の墓地が存在すること、墓地の前方部側にかつて金比羅宮が建立されていたという伝えがあること、また「伝高宮寺文書」（『高宮町史』）に大永元年（1521）六角定頼が荒神山に陣を置いて高宮城を攻めたとあり、「小佐治文書」にも天文21年（1552）六角義賢が京極高広に対峙するため荒神山に本陣を置いたと記しており、それらの際に当地が砦として利用された可能性も考えられるなど、平坦な墳頂は後世の改変も考慮すべきである。一方、前方部の北西側と、前方部から後円部にいたる西側の斜面には、それぞれ数箇所にわたって地滑り跡と考えられる墳丘の変形も認められる。

後円部の墳頂は、やや不定形ながら直径およそ14m の平坦面を形成している。ただ、後円部構築後の土砂の崩落は前方部に比して著しく、墳丘の比較的高い箇所でも1m 前後の堆積を確認している。墳頂の旧状も大幅な補正が必要であろう。

後円部から前方部に向かう北東斜面には、長さ30m 前後、奥行き8m 余の2段からなる大きなテラスが存在する。このテラスも六角定頼や六角義賢の布陣などに起因する後世の改変と考えられ、一部には稚拙な構造の石垣も認めることができる。

### 古墳の構築法

荒神山古墳は、荒神山の山頂から伸びる尾根の鞍部を利用して築造された前方後円墳である。後円部を山頂側に置き、前方部を琵琶湖に向かっている。後円部は、山頂に至る南西側の尾根と東に伸びる尾根を、それぞれ開削して円形に整えており、その結果、後円部南側が周濠状を呈している。この後円部からさらに北北西に伸びる尾根を整形して古墳の主軸とし、

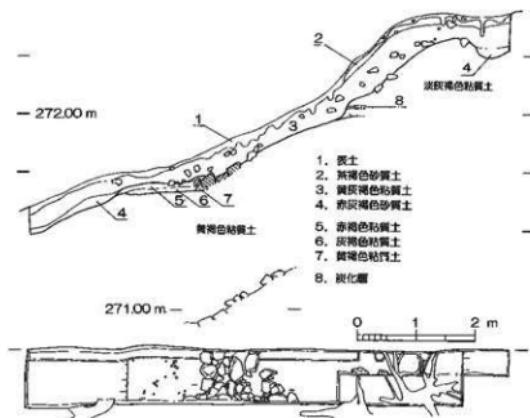


図6 T2 トレンチ平面図・断面図

そこに前方部・後円部とも2段のテラスを設けた3段構成の墳丘を築く。

墳丘の断ち割り調査を実施していないので構築土の全容は不明だが、これまでの調査で確認した墳丘下の土層としては、湖東流紋岩からなる岩床のほか、その風化土である（淡）灰褐色砂質土（一部で粘質土化）、黄褐色粘質土、赤橙色粘質土などを識別している。これらの土層が墳丘整形時の地山であるのか、その後の盛土であるのか分別はむずかしいが、岩床は明らかに地山が露出したものであり、その風化土である（淡）灰褐色砂質土（粘質土）なども地山の可能性が高い。それに対して黄褐色粘質土や赤橙色粘質土は盛土とも考えられる。因みに前者の岩床は前方部の下段（基底部～1段目テラス）、中段（1段目テラス～2段目テラス）、上段（2段目テラス～墳頂）の各段、および後円部の下段で検出しており、後者は後円部の上段（T5 トレンチ）と前方部端の北西辺中央の上段および中段（T2 トレンチ）で確認している。荒神山古墳の構築土の解明は今後の課題である。

#### 段築

荒神山古墳は、尾根を整形して基底部とし、その上に前方部・後円部とも2段のテラスと墳頂平坦面を設けている。これまでの調査で確認した基底部と各段のテラスの標高は下記のとおりである。

	【前方部】	【後円部】
墳頂	273.0m	277.5m
【上段】	(比高差3.0m)	(比高差8.5m)
2段目テラス	270.0m	269.0m
【中段】	(比高差3.5m～4.0m)	(比高差3.0m)

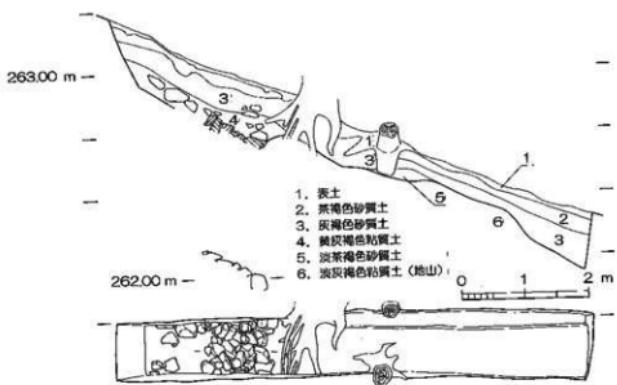


図7 T4トレンチ平面図・断面図

	1段目テラス	266.0m~266.5m	266.0m
【下段】		(比高差3.0m)	(比高差2.0m~4.0m)
基底部	263.0m~263.5m	262.0m~264.0m	

後円部の基底部高に2mの差が認められるのは、T4トレンチが基底石高262.0mであるのに対して、T6トレンチでは基底石高264.0mを計測したからである。T6トレンチが尾根を開削して基底部を設けていることに起因するのであろう。したがって前方部・後円部とも、後円部の上段を除いて比高差はおよそ3.0mになる。後円部上段の比高差は、墳頂が現在の表土高で示しているため正確ではない。本来の比高差はさらに大きくなることが予想されるが、現状でも比高差8.5mは際立っている。

ここで基底部と各段のテラスについて、これまでの調査によって明らかになったことを記しておこう。まず基底部について、前方部は平成15年度調査（T1トレンチ）で基底石と考えられる大形の石を確認したが、土砂の崩落が著しく明確な基底部は検出できなかった。一方、後円部ではT4・T6の2箇所のトレンチで良好な基底部を確認した。2箇所とも整形した地山の下端にわずかな平坦面を設けて、40cm前後の大型の基底石を1列配し、その上を20~30cmの葺石で覆う。基底部に基底石を配する明瞭な平坦面は確認できない。基底石・葺石ともに湖東流紋岩の割石を使用している。基底部の墳丘傾斜角は、30度（T4トレンチ）と33度（T6トレンチ）を測る。

各段のテラスは、前方部北西辺中央（T2トレンチ）と後円部中軸線（T5トレンチ）で2段目テラスを検出した。とくにT2トレンチのテラスは、埴輪こそ原位置を留めなかつもののテラスの遺存状態が良好であり、テラスの幅は1.3mを測った。整形した地山（あるいは盛土）の上に灰褐色粘質土と赤褐色粘質土を厚さ10cm前後に薄く搗き固めて整え、そ

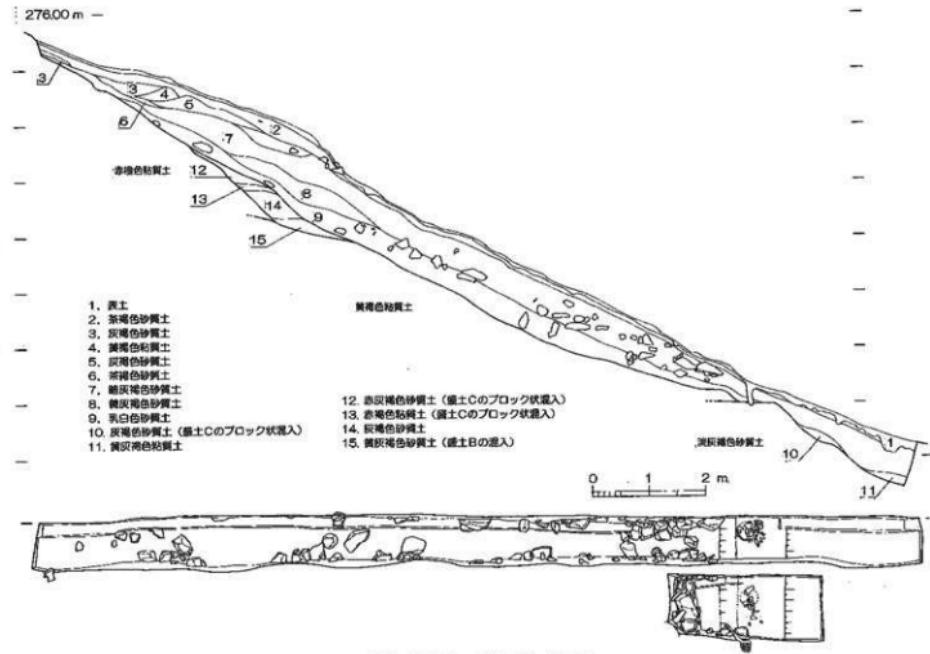


図8 T5 トレンチ平面図・断面図

の上に直径5~10cmの円碟を敷いていた。

なお、各段のテラスは、これまで山麓の滋賀県立荒神山少年自然の家が設けたオリエンテーリングコース用の遊歩道と重複していると考えてきた。確かに墳丘西側の遊歩道は2段目テラスの位置におおよそ重なり、また前方部北西辺は1段目テラスには重複している。ただ、後円部南東側を大きく弧状に走る遊歩道は、基底部と1段目テラスの中位を走っており、テラスとは重複していない。

#### 葺石

葺石は20~30cmの湖東流紋岩製の割石からなる。現状では、多くの葺石が土砂とともに崩落して下方に堆積しており、葺石が当初の姿を留めていたのは基底部や段のテラス直上に限られていた。これらの葺石は詳細に観察すると、葺石の小口を外側に揃えるように下から上へ積み上げた「小口積み」と、葺石を貼り付けるように覆う「貼石状」の葺き方が見られた。小口積みが認められるのはわずかであり、多くが貼石状であった。つまり、荒神山古墳の葺石は、一部に古相の小口積み手法を残しつつ、全体としては貼石状に葺く手法へ移行し

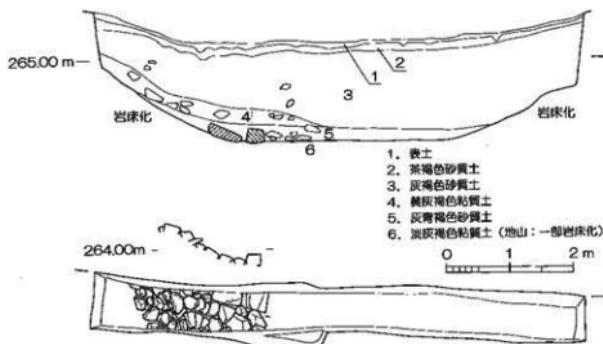


図9 T5 トレンチ平面図・断面図

ていると推測される。

#### 埴輪

これまでの調査は狭長な試掘トレンチによる確認調査であり、埴輪の全容は掴みようもないが、円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪の3種の埴輪片が出土しており、古墳時代前期後葉（4世紀後半）の時期が与えられている。出土した埴輪片のほとんどが、葺石や多量の土砂とともに下方へ崩落した状態であり、原位置を留めていたのはわずかに後円部中軸線のT5トレンチ2段目テラスのみであった。ここでは隣接する埴輪を確認するため、西に拡張区を設けた。出土した埴輪は、下端部をかろうじて残しているだけであったが、テラス上に埴輪を置き、灰褐色粘質土を厚さ10cm余りに薄く搗き固めて埴輪を固定していた。その上にはやはり円碟を敷いていたらしく、周囲で円碟を多数採集した。拡張区で出土した埴輪との距離は約1.2mを測り、この距離がテラスを巡る埴輪のおよその間隔と推測した。各トレンチから出土した埴輪の位置から、埴輪が前方部の1段目テラス・2段目テラス・墳頂平坦面と、後円部の1段目テラス・2段目テラス・墳頂平坦面のそれぞれに巡っていたと想定している。因みに最下端の基底部では、精査にもかかわらず埴輪の痕跡は認められなかった。

#### 主体部

後円部の墳頂平坦面のほぼ中央に深さ0.8mの楕円形の窪地があり、主体部の盜掘坑と考えている。周囲に板石が確認されるところから、竪穴式石室である可能性が高い。これまで調査対象とはしていないが、今後、調査の体制を整えて詳細な調査を実施する必要がある。なお、近くの延寿寺（稻里町）から彦根市教育委員会へ寄贈していただいた考古資料の中に、荒神山出土と伝える緑色凝灰岩製の車輪石がある。当古墳の主体部から出土したとする明確な根拠はないが、時期的には齟齬しない貴重な資料である。

### III 3次調査

前章で概要を記したように、荒神山古墳は1次・2次調査によって多くの成果を得ることができ、平成16年度にはそれらの成果によって彦根市の指定文化財となったが、いまだ幾つかの課題を残していた。その1つが「くびれ部」における「造り出し」の有無である。また、前方部の実態も不鮮明であった。そこで平成18年度には、この2つの解明を主目的として3次調査を実施した。

3次調査では、くびれ部の造り出しを確認するため、くびれ部の東側にT7トレンチを、また、前方部をさらに解明するため、遺存状況が比較的良好と推定される前方部東辺にT8トレンチをそれぞれ設定して調査を実施した。両トレンチとも古墳の基底部から墳丘上端までの狭長なトレンチ調査とした。

#### T7トレンチ（図11）

T7トレンチの調査の結果、古墳の基底部が想定されるトレンチ下端一帯が大きく変容し、平坦地を形成していた。既述の六角定額と六角義賢布陣に関連した戦国期の改造と考えられる。古墳の基底部に至る裾部を削って岩盤を露呈させるとともに、削った土砂（灰褐色砂質土）を下方に客土して平坦面を造り出している。平坦面の裾には、古墳の葺石を転用したと考えられる稚拙な石垣状の積石も確認できた。

一方、露呈する岩盤の少し上手で1段目テラスを検出した。1段目テラスは、テラスの幅1.9mを測り、その中央で円筒埴輪が出土した（図10）。円筒埴輪は内部に南北方向から落下してきたと考えられる葺石を抱えており、葺石で損壊した埴輪片が北側を中心に散在して

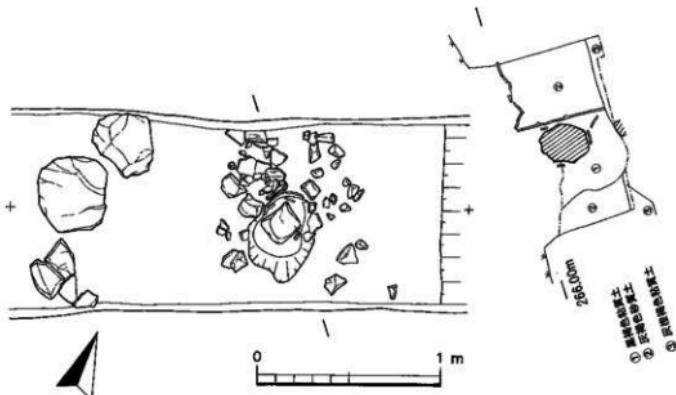


図10 T7トレンチ1段目テラス検出状況

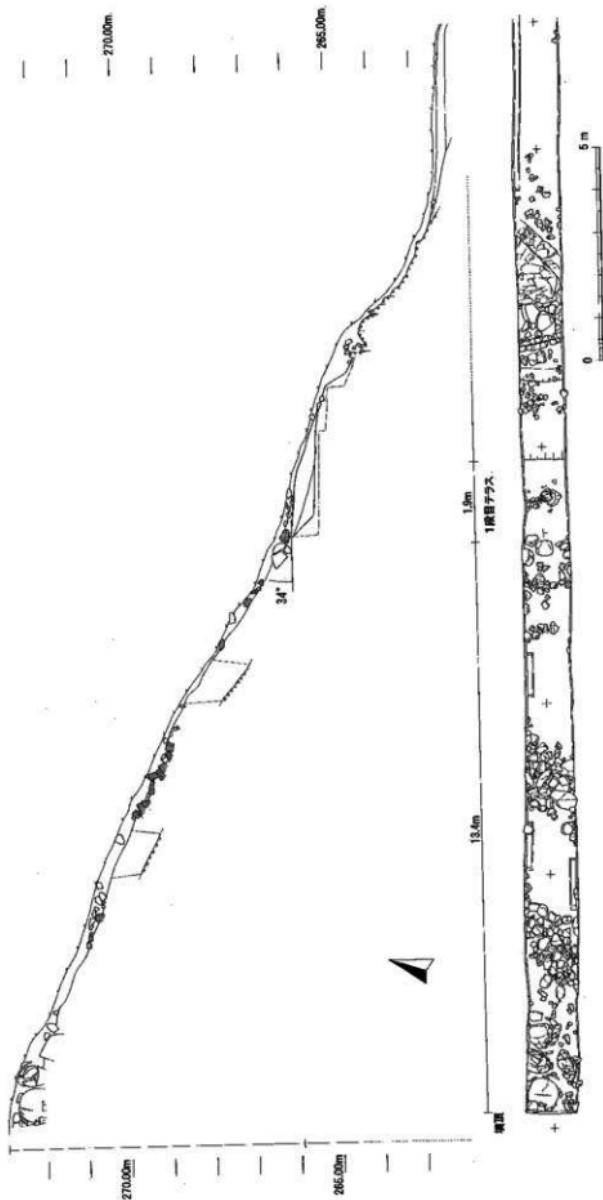


図11 T7トレンチ平面図・断面図

いる。断面の土層観察により、湖東流紋岩からなる岩盤の直上には、それが風化して形成された③灰橙褐色粘質土があり、古墳はその地山を整形して築造されている。地山整形時の1段目テラスの幅は2.9mを測る。円筒埴輪はこの地山整形上に置かれ、②灰褐色砂質土によって、およそ50cm埋めて埴輪を固定していた。断面観察では、埴輪の突堤の下から2段目上10cmまでが埋置されていた。そして最後に、整えられた上面に直径5~10cmの円礫が敷かれていたようである。円礫は川原石であり、わざわざ山上まで運び上げて、テラスに埋置された埴輪の隙間を飾ったのであろう。各段のテラス周辺で多量の川原石を採集している。

1段目テラスの上方へ向かう基底石は一辺が40cm余を測り、葺石より一回り大きく、上面を平坦に据えている。断面観察により、この基底石は1段目テラスの埴輪を埋置後に据えていることが判明した。基底石より上方に据えられた葺石は残存状態が余り良好ではない。墳丘傾斜角は34度を測る。

2段目テラスについては、想定される辺りを精査したにもかかわらずテラスも埴輪も検出することができなかった。トレンチ外の周囲の表土をみても明瞭なテラス部は認められない。一方、表土を仔細に観察すると、墳頂から2段目テラスのラインを越えて外へ舌状に広がる張り出しが確認される。その幅と張り出しの長さは、ともに約10m程度の規模が想定される。その位置は古墳の全体からすると、くびれ部より前方部側に偏っているが、これを所謂「造り出し」と考えるかどうかについては今後の調査の進展を待ちたい。ただ、この張り出しに影響されて2段目テラスが消失しているのは事実のようであり、埴輪列も確認することができない。なお、張り出し一帯には湖東流紋岩製の球形の岩床が多数露頭している。卵の殻のように剥離する特徴が認められるが、一部は葺石を代用するように葺石の間を埋めている。

確認できない2段目テラスのラインの上下には、葺石が比較的良好に遺存していた。一部には小口積みも認められる。これらの葺石も、やはり張り出しの影響を受け、等高線に沿って外へ舌状に弧を描いて葺かれているようである。

T7トレンチでは、葺石が全く認められなかつた3箇所で深堀りを行つた。その結果、約1mで岩床に到達し、岩床までの土層は岩床の風化土である灰褐色砂質土の単純層であつた。荒神山古墳の少なくとも前方部は、山頂から伸びる尾根の鞍部を利用し、それを整形して前方部としたものであり、盛土により構築されたものではないと判断される。

#### T8トレンチ（図14）

T8トレンチの調査では、古墳の基底部となる基底石を検出した。基底石は一辺が40cmの比較的扁平な石を斜面に貼り付けるように設置しているが、その下方にテラスや埴輪などは確認できなかつた。墳丘傾斜角は31度を測る。1段目テラスにいたる葺石は比較的良好に遺存しており、上下端を小口積み、中位を貼石状に葺いている。

1段目テラスは、テラスの幅2.1mを測り、下方寄りで円筒埴輪が出土した（図12）。断面の観察により、湖東流紋岩が風化して生まれた③灰橙褐色粘質土の地山を整形してテラス

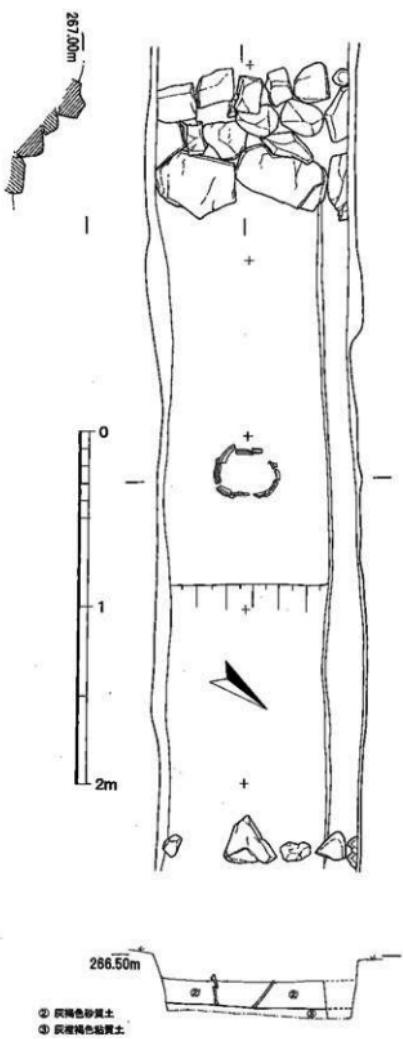


図12 T8 トレンチ1段目テラス検出状況

のベースを造り、その上に円筒埴輪を置き、②灰褐色砂質土で埋めて埴輪を固定していた。1段目テラスの上方に向かう位置に据えられた基底石は、一辺が40~50cmの扁平なもので2石が並んで出土した。この基底石の上方は小口積みの葺石が良好な状態にあり、墳丘傾斜角は33度であった。

T8 トレンチの2段目テラスは、今回の調査の中で埴輪や基底石・葺石の状況がもともと良く残っていたため、北に拡張区を設けてデータの集積を図った。2段目テラスは幅2.0mで、ほぼ中央の位置から円筒埴輪が3基並んで出土した。真ん中と北の2基は下方に向かってやや傾いていたが、3基は等しく0.6m間隔にある。調査は基本的に古墳完成時の姿で掘削を止めたが、一部で断面観察用に筋堀りを縦横に実施し、テラスと埴輪、そして基底石や葺石の構築過程を追認するよう努めた。その結果、湖東流紋岩の風化土である⑥灰褐色砂質土の地山を整形してテラスの祖形を造り、その上に⑤乳灰褐色砂質土・④淡黄褐色砂質土・③灰橙褐色粘質土の3層でテラスを整地して南北両側の埴輪を設置。次いで②淡黄褐色粘質土を10~20cmの厚さに搾き固めるように置いて、南北両側の埴輪を固定するとともに中央の埴輪を設置し、改めて①灰褐色粘質土を同様の厚さに入れてすべての埴輪を固定している。つまり2層の土で埴輪の高さ調整を行っているのである。埴輪の下端部しか残っていないため埴輪の形状

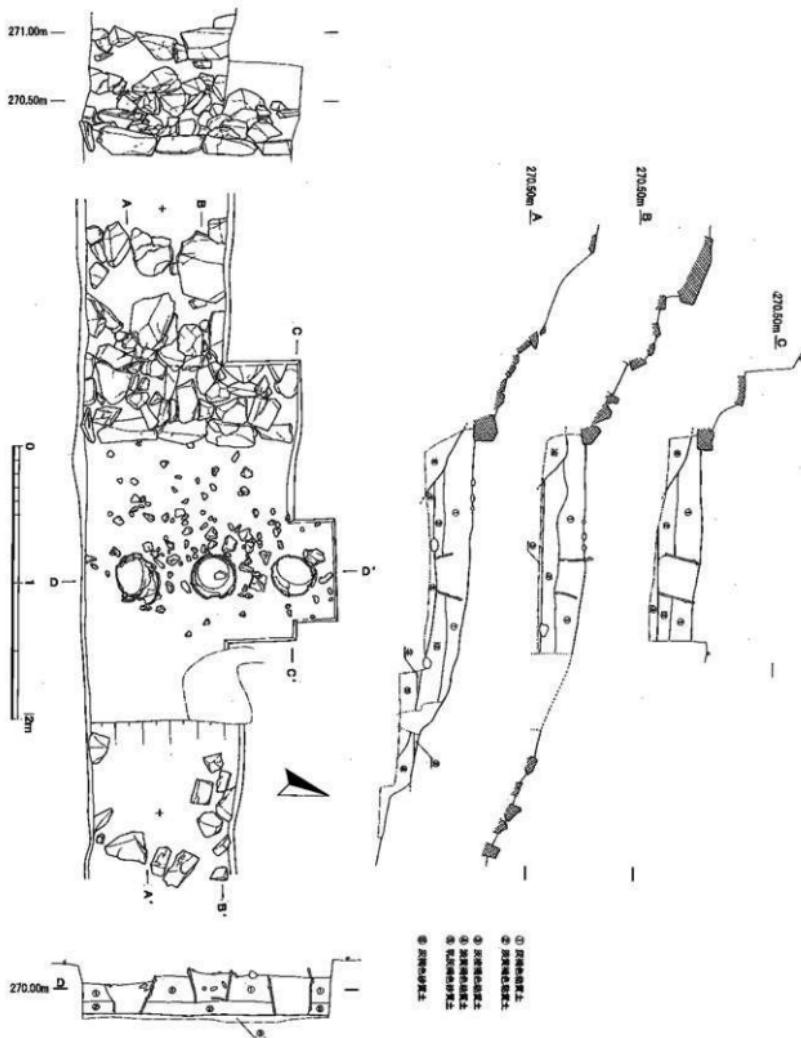


図13 T8トレンチ2段目テラス検出状況

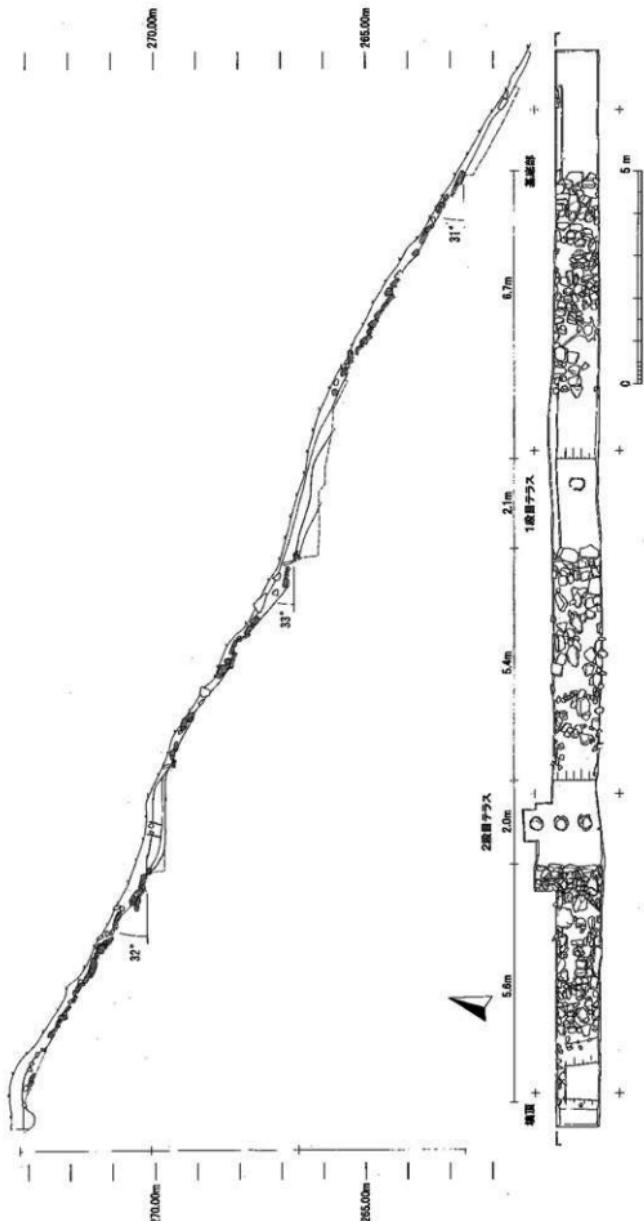


図14 T 8 トレンチ平面図・断面図

は推測の域を出ないが、南北両側と中央の埴輪で、埴輪の種類が異なっていた可能性も考えられる。こうして埴輪の埋置が完了すると、最後に円礫(川原石)をテラス一面に敷いて飾った。また、断面観察では基底石は①層の上に据えられており、テラス上方に配される基底石や葺石は、埴輪の埋置が完了した後に葺かれたことを示していた。

このテラスでは埴輪とともに基底石や葺石も良好な姿を留めていた。基底石と葺石は、他のテラスに比べて鋭利な割石が多用されているのが特徴である。基底石は、長さ40~50cm、幅20cm前後の比較的細長い割石を横長に連ねて基底部を構成しており、その上に葺石を半ば乗せるように重ねて小口積みとする。ただ、こうした様態をなすのはテラス上方1m余りに限られ、さらに上方では貼石状に葺いている。当所の墳丘傾斜角は32度を測る。

墳頂部には、その外周に小規模な溝と土壘が認められる。溝は幅60cm、深さ30cm程度の規模で、その掘削土を溝の外側に積み上げて土壘としている。平成16年度の調査でもT2トレンチで同様の溝と土壘を検出しておらず、古墳の前方部墳頂の外周を巡るように築かれているものと考えられる。ただ、この遺構は古墳に直接関連するものとは考え難く、先述の六角定頼あるいは六角義賢の荒神山布陣にゆかりの遺構と推測される。溝と土壘の構築によって破壊されたと思われる埴輪片が、土壘内や下方の葺石の間から出土することから、当初は墳頂の周囲にも埴輪列が存在したのであろう。

#### IV 4次調査

平成19年度の4次調査では、前方部をさらに解明するため、前方部北東コーナーの基底部にT9トレンチを設定して調査を実施した。調査の結果、前方部の前面と側面の2面で、基底部とその上に葺かれた葺石を検出した。ただ、残存状態は良好とは言い難く、特にコーナー一帯は基底石や葺石がほとんど存在せず、それ以外でも葺石の欠損が处处に認められた。こうした基底石や葺石は、崩落して数m下方の窪地に多量に集積していた。

基底部は、前方部前面と側面の両方で、瀬東流紋岩の風化土である灰橙褐色粘質土の地山を削り込み、幅50~60cmのテラスを形成していた。テラスに埴輪を並べた痕跡は認められなかった。このテラスの墳丘側に基底石を据える。基底石は葺石より一回り大きく比較的扁平なものが多く、崩落を防ぐため谷側に小石を挟んでその上に据える工夫がなされているものも見られた。葺石は比較的小振りのものが多く、一部で小口積みが見られる他は貼石状に葺いている。葺石を仔細に観察すると、墳丘に水平あるいは垂直方向に直線的な石列が認められた。葺石の構築過程を示すものかもしれない。

なお、前方部の前面と側面のなす角度は、本来、直角に近い鋭角であるはずだが、現状では鈍角となっている。等高線図を見ても前面と側面が直線的な角度をなさず、漸次曲折するようである。しかも、前面は中軸線に直交せずやや北西方向に引っ張られるような広がりを見せているのが留意される。

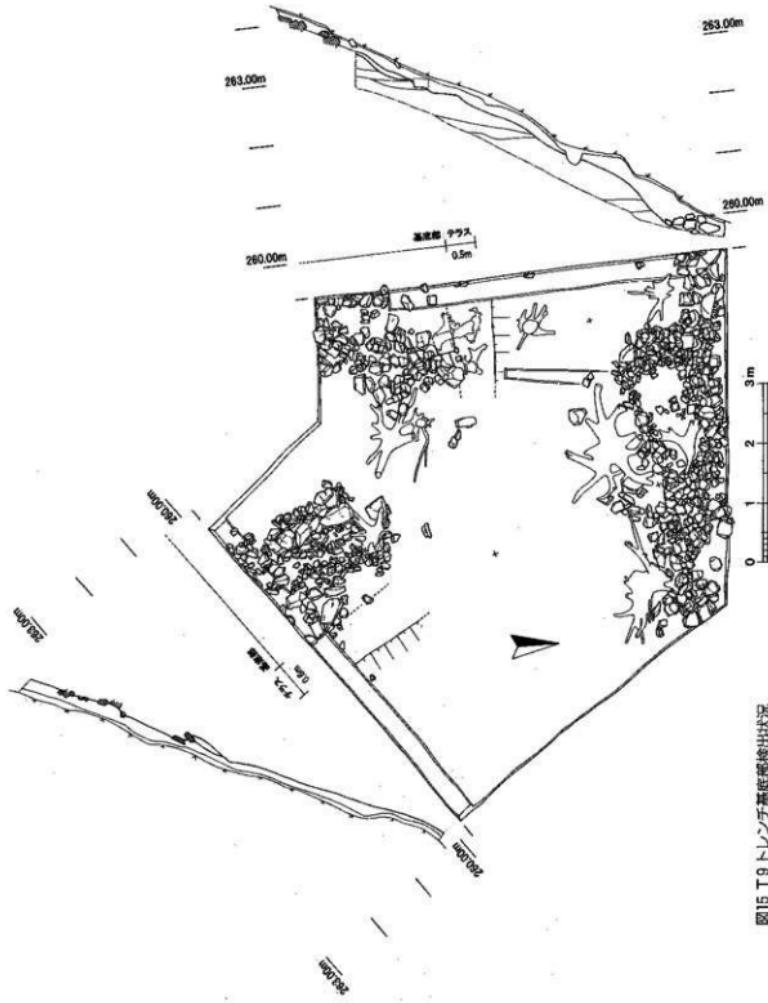


図15 T9トレンチ基底部検出状況

## V 3次・4次調査の成果

これまで4次にわたって実施した荒神山古墳の調査は、あくまで範囲確認を主目的に実施した試掘調査であったが、古墳の範囲以外にも多くの成果を得ることができた。1次・2次調査の成果については、II章に整理したとおりである。3次・4次調査は、1次・2次調査の不備を補うために実施したものである。3次調査は「くびれ部」の確認、及び前方部の実態のさらなる解明を目的に実施した。また、4次調査は前方部コーナーの確認を目的とした。これらの調査成果を整理すると以下のとおりである。

### くびれ部の「張り出し」

3次調査で設けたT7トレンチでは、くびれ部より前方部側で、墳頂から2段目テラスのラインを越えて外へ舌状に広がる張り出し部を確認した。その幅と張り出しの長さは、ともに約10m程度の規模が想定される。葺石も張り出しに沿って舌状に弧を描いて葺かれており、当所では2段目テラスや埴輪列も存在しない。所謂「造り出し」の一形態と考えるのかどうか、今後の検討課題である。なお、T7トレンチに対応する西側のくびれ部については、一帯が地滑りや遊歩道などによって形状を変えており、T7に相応する張り出し部の痕跡は確認できなかった。

### 古墳の構築法

墳丘の構築土については、1次・2次の調査で灰褐色系の砂質土・黄褐色系の粘質土・赤橙色系の粘質土などの構築土を確認していたが、これらの土層が墳丘整形時の地山であるのか、その後の盛土であるのか分別が困難であった。今回のT7トレンチの調査では、この問題を解決するため葺石の認められなかった3箇所で深堀りを行った。その結果、約1mで岩床に到達し、岩床までの土層は岩床の風化土である灰褐色砂質土からなる単純層であった。岩床は墳頂部で露頭する球形の岩床とも連なっており、少なくとも前方部については、荒神山の山頂から伸びる尾根の鞍部を利用し、それを整形して前方部としたものであり、一部に補填的に盛られることはあっても基本的には盛土により構築されたものではないと判断される。因みに尾根の鞍部は、南方の山頂から当古墳へと伸び、古墳の墳頂辺りで分岐して東と北西に伸びていたものと考えられる。なお、後円部のひとときわ高い墳頂部、T5トレンチで確認した標高272mより上でベースを形成していた赤橙色粘質土については、その色調が他と大きく異なる点も含めて盛土の可能性が高い。墳丘の断ち割り調査を実施していない現状では、墳丘の構築法を明確にすることは困難であるが、これまでの調査を踏まえると、おおよそ上記のような想定が可能となろう。

### 段築

古墳の保存状態がもっとも良好と考えられたT8トレンチの調査によって、前方部が後円部同様に2段のテラスを設けた3段築成の墳丘であることが確定した。荒神山古墳は、尾根を整形して基底部とし、その上に前方部・後円部とも2段のテラスと墳頂平坦面を設けてい

た。

基底部については、2次調査において後円部T4・T6の2箇所のトレンチで良好な基底部を検出しておらず、整形した地山の下端にわずかなテラスを設けて基底石を配していた。3次・4次調査でも、T8とT9トレンチで基底部を検出することができ、これまで明らかでなかった前方部の状況を確認することができた。T8トレンチでは、1辺40cmの比較的扁平な基底石を斜面に貼り付けるように設置していたが、その下方にテラスは確認できなかつた。前方部の東コーナーに位置するT9トレンチでは、東側面と北前面でわずかなテラスを築き、その上に扁平な基底石を置く。基底石の崩落を防ぐため谷側に小石を挟んでいた。墓域を画す重要な意味をもつ基底部であるが、荒神山古墳では前方部・後円部ともにわずかなテラスを設けて基底石を巡らせるのみで、埴輪などを設置することはなかつたと考えられる。因みに基底部の墳丘傾斜角は、30度（T4トレンチ）、33度（T6トレンチ）、31度（T8トレンチ）で、ほぼ同様の数値を示している。この数値は、次の1段目・2段目の傾斜角とも大差ない。荒神山古墳の墳丘傾斜角は30度+αに統一されていると考えられる。

各段のテラスについては、T7トレンチの1段目テラスとT8トレンチの1段目テラス・2段目テラスで原位置に留まる埴輪を検出することができ、埴輪の設置に関しての詳細なデータを得ることができた。とくに良好だったT8トレンチの2段目テラスでは、拡張区を設けてデータの集積を図った。テラスの幅は2.0mで、ほぼ中央の位置から円筒埴輪が3基並んで出土した。3基は等しく0.6mの間隔に埋置されていた。テラスと埴輪、そして基底石や葺石などの構築過程を追認するため縦横に筋堀を行って精査したところ、以下のことが判明した。構築順に記すと、まず地山を整形してテラスの粗形を造り、3層の整地土を薄く層状に入れて地盤を整え、両端の埴輪を配置。次いで10~20cmの厚さに土を掻き固めるよう置いて両端の埴輪を固定するとともに中央の埴輪を設置し、改めて同様の厚さに土を入れてすべての埴輪を固定。つまり2層の土で埴輪の高さを調整しているのである。埴輪の下端部しか残っていないので埴輪の形状は推測の域を出ないが、両端と中央で埴輪の種類が異なっていた可能性も考えられる。こうして埴輪の埋置が完了すると、最後に5cm前後の円碟（川原石）をテラス一面に敷き詰めている。玉石でテラスを飾る意図があったのであろう。3箇所の断面観察では、上方に築かれる基底石や葺石は、埴輪の埋置後であることも示していた。

T8トレンチの2段目テラスの状況を、他のテラスと比較しておこう。比較の対象には、2次調査で検出した前方部前面中央のT2トレンチ2段目テラスと後円部中軸線のT5トレンチ2段目テラスも加えることにする。まずテラスの幅は、T2トレンチ2段目が1.3m、T5トレンチ2段目が1.2mであるのに対して、T7トレンチ1段目は1.9m、T8トレンチ1段目は2.1m、そして2段目が2.0mと前方部東側で幅広い値を示すが、その理由は不明である。次に、埴輪の埋置された間隔については、T5トレンチ2段目テラスしか対比できないが、このテラスでは間隔が1.2mであった。埴輪の遺存状態が悪かったことを考えると、中央の埴輪が検出できなかつたとも考えられ、その場合には同じく0.6mの間隔となる。

埴輪の設置状況については各テラスとも良く似た状況にあり、地山を整形あるいは整地土を置いてテラスを整え、埴輪を配置して埋土で埋め、最後に円礫（川原石）を敷き詰めて飾るというやり方である。円礫を敷くという手法は類例を知らない。荒神山古墳に特有の方法かもしれない。埴輪の埋置後、上方の基底石や葺石を置くという方法も興味深い。T7トレント1段目テラスやT8トレント1段目テラスも同手法であるが、T2トレント2段目テラスではその逆となっている。作業能率からすれば後者の方が仕事がし易いように思われるが、分業体制で使役される古墳造りはそれほど合理的には理解できないのかもしれない。

#### 葺石

葺石は20~30cmの湖東流紋岩の割石からなる。1次・2次調査では、多くの葺石が土砂とともに崩落して下方に堆積しており、葺石が当初の姿を留めていたのはわずかな箇所に限られていた。それらの観察の結果では、一部に古相の「小口積み」を残しながらも、多くが「貼石状」に葺く手法へと移行していると考えられた。3次・4次調査でもこのことに留意し、観察に努めた。とくに比較的葺石の残りが良好なT7・T8トレントの観察では、「小口積み」は予想以上に多く残っており、しかも葺く場所によって住み分けがなされていた。基底石の上部に「小口積み」を多用し、上方へ行くにしたがって「貼石状」になる傾向が認められるのである。「小口積み」の場合、石は多く必要だが、その分崩れにくい。「貼石状」の場合はその逆である。このことが考慮されて土台となる下方を「小口積み」、上方を「貼石状」に葺いたのではないかと考えられる。

#### 埴輪

個々の埴輪についてはVI章で詳述しているので、ここでは埴輪が墳丘を巡っていた位置を整理しておこう。これまでにも記したように、多くの埴輪は現位置を留めることなく土砂や葺石などとともに下方に崩落していた。このことを考慮に入れながら、埴輪が巡っていた位置を復元すると、前方部の1段目テラス・2段目テラス・墳頂平坦面、後円部の1段目テラス・2段目テラス・墳頂平坦面が想定される。墳丘最下端の基底部は、わずかなテラスを精査し、さらに下方も確認したが埴輪は巡っていなかったと思われる。この見解は、1次・2次調査で得た結論と変わらない。

#### 墳形のひずみ

最後にT9トレントの調査で確認した墳形のひずみについて付記しておこう。このことについてでは墳丘測量の時から留意してきたが、実際に発掘によってそのことが明らかになった。

T9トレントは全体として遺構の保存状態は良好ではなかった。とくにコーナー一帯は基底石や葺石がほとんど当初の位置に留まることなく下方に崩落していた。ただ、その両側に残っていた基底石や葺石から、コーナー部を復元することができた。その結果、前方部前面と東側面のなす角度はおよそ126度を測り、本来は直角に近い鋭角になるはずだが、現状では鈍角に開いている。等高線図を見ても前方部前面が鈍角のまま北西方向に引っ張られるようにひずんでいる。

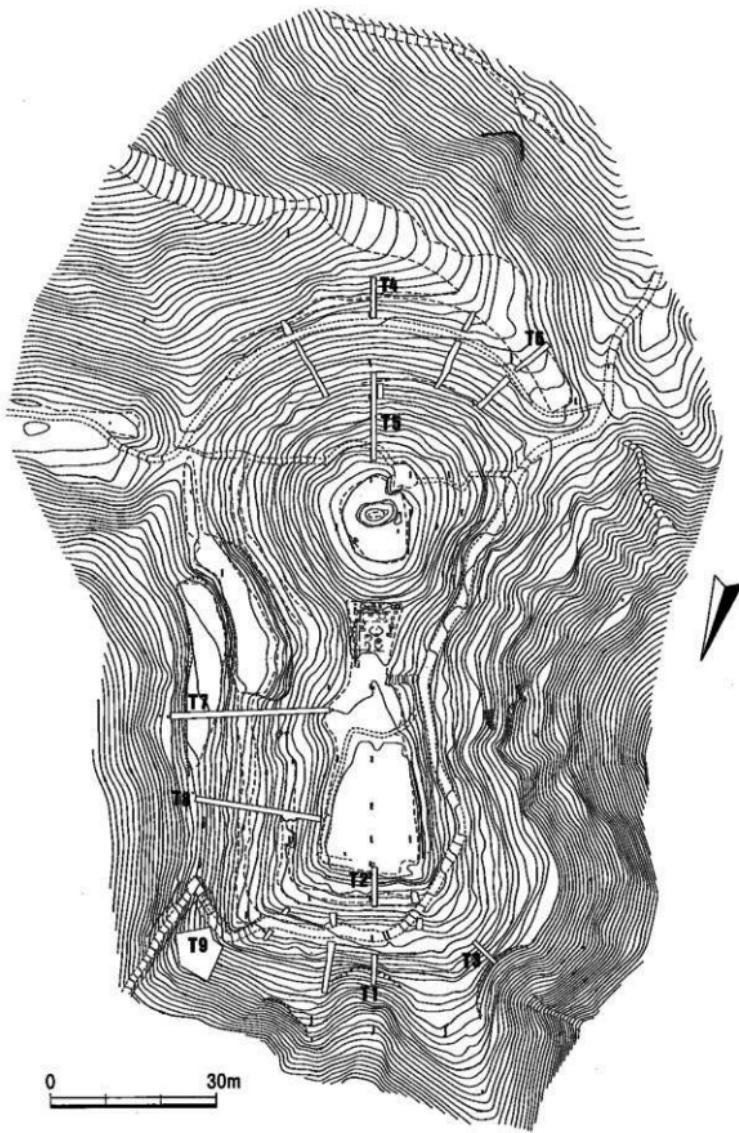


図16 荒神山古墳試掘トレンチ設定図

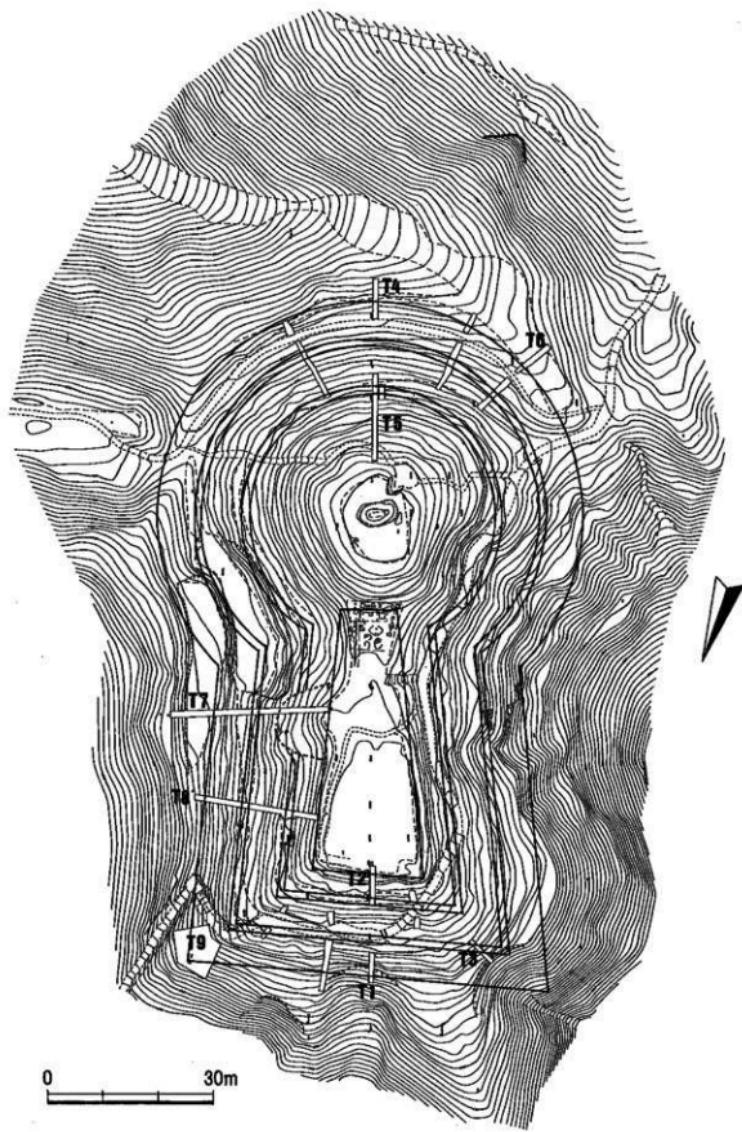


図17 荒神山古墳復原想定図

## VI 出土遺物

### 出土遺物の概要

4次にわたる発掘調査によって出土した遺物は、古墳に伴う埴輪類（普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪・壺形埴輪・形象埴輪）、近世以降のかわらけや陶磁器、瓦など遺物コンテナ(38.6cm×59.0cm×15.4cm)で25箱分であった。その出土遺物のほとんどを埴輪が占め、近世以降の遺物はわずかである。

埴輪は円筒埴輪を主とし、T2トレンチ・T4トレンチ～T9トレンチで出土した。また、

後円部東側に3段の平坦地があるが、3次調査中にこの付近でまとまった量の埴輪を表探した（表探地点A：図18）。本報告ではこの表探資料も報告することとする。

以下、埴輪についての報告を主とし、出土遺物の内容を記述していきたい。

なお、4次にわたる発掘調査の出土遺物ではないが、荒神山山麓の延寿寺に、代々荒神山出土と伝えられてきた車輪石がある。現在、市教育委員会に寄贈を受けた資料であるが、今回その資料についても報告を行ふ。

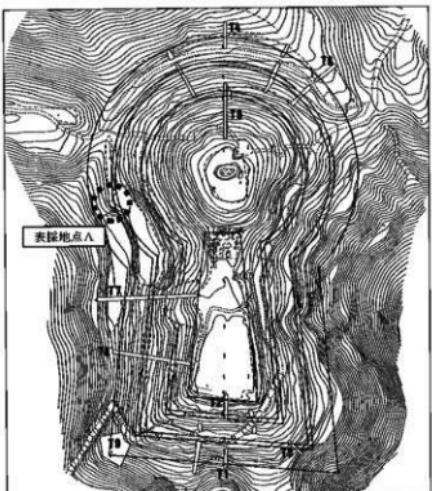


図18 墓輪の表探地点

### 普通円筒埴輪

荒神山古墳では、T2トレンチ・T4トレンチ～T9トレンチで円筒埴輪（普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪）を出土した。鱗付円筒埴輪に関しては現段階では出土していない。また、楕円筒埴輪に関しては、全局復元できる資料が少なく、部分的なゆがみとの判断基準が明確になっていないため、現段階ではその存在の可能性を言及するにとどめておく。ここでは、はじめに普通円筒埴輪の出土分布について述べる。その後、普通円筒埴輪全体についての概要を述べ、後円部・前方部の順に各トレンチ・出土地点ごとの報告を行う。ただし、破片資料であるがゆえに、胴部のみ底部のみの個体は、普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪・壺形埴輪・形象埴輪の識別が困難である。そのため、普通円筒埴輪として報告する資料の中には、それらが含まれている可能性がある。報告に際しては、整理調査によって比較的大きく復元でき

たものを中心に、小片でも各部位の特徴のわかるものを選んで提示した。また、口縁部、底部に関してはすべて資料提示した。図化にあたっては、ゆがみなどを考慮して、残存率10%以上の資料に関しては反転復元を行い、それ以外のものに関しては展開図とすることを基本とした。展開図は断面を中心とし、右側に外面の平面図、左側に内面の平面図とした。また、全周復元できるものや、楕円筒埴輪の可能性のある資料に関しては、横断面も図示した。器面上に塗布された赤色顔料については、残存範囲をトーンにより提示するとともに、本文中でも説明を加えることにした。胴部のみの資料の径は、基本的に突帯の側面で計測を行った。

### (1) 普通円筒埴輪の出土分布

上述したように、T2トレンチ・T4トレンチ～T9トレンチで円筒埴輪を出土した。その中でも、T5トレンチ・T7トレンチ・T8トレンチの各トレンチでは各段テラスを中心とまとまった量の円筒埴輪が出土した。そのうち、原位置を保っていた埴輪はT5トレンチ：2段目テラス、T7トレンチ：1段目テラス、T8トレンチ：1段目テラス、T8トレンチ：

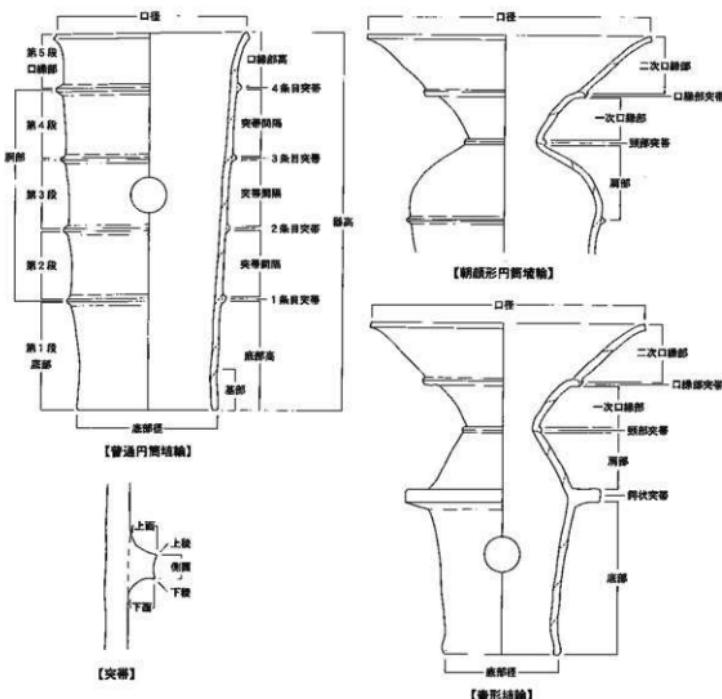


図19 円筒・壺形埴輪部分名称

2段目テラスの4箇所で、計7個体確認している。さらに、そのうち2箇所で埴輪列を確認している。T5トレンチ：2段目テラスでは心々距離1.2mを測る2個体の埴輪列を、T8トレンチ：2段目テラスでは心々距離0.6mを測る3個体の埴輪列を確認している。また、各トレンチの墳頂部・墳裾部では原位置を留める埴輪を確認していないが、T5トレンチ・T7トレンチ・T8トレンチの各トレンチの3段目斜面よりまとまった量の埴輪片が出土していることを勘案すれば、後円部・前方部とともに墳頂部に埴輪列が存在した可能性は高いと考えられる。逆に、墳裾部付近では、各トレンチとも埴輪の出土量がそれほど多くないことから、墳裾に埴輪列はめぐっていなかったか、めぐっていたとしても心々距離が長く樹立本数が少なかった可能性が高い。

## (2) 普通円筒埴輪の概要

今回、整理調査を行った荒神山古墳の普通円筒埴輪には、全形を復元できる資料はなかった。また、2条目以上を復元できる資料もわずかであった。そのため、ここでは円筒埴輪を構成する各要素ごとに特徴をまとめ、概要とする。(以下、各部名称・技法名称・概念については川西1978に準拠する。)

**形態** 上述したように、出土資料の中には、底部から口縁部まで復元できる資料はなかった。また、2条目以上を復元できる資料はわずかに4点であった(83・99・119・155)。そのため、今回の出土資料では、荒神山古墳の埴輪の全形や器高について言及することはできない。ここでは、形態についての断片的な情報となるが、現在明らかでないいくつかの点について列挙する。  
 ①口縁部を含めて上から2段目に方形(逆三角形・半円形)透孔を確認できる(34)。  
 ②2段目に2方向の方形透孔が入る資料と、2段目に透孔が全く入らない資料が確認できる。この点より、2種類以上の形態の存在を想定できる。  
 ③1条目突帯より下部の底部に透孔が入る資料はない。

**法量(表1)** 口径については、30~44cmのものがあるが、資料が少ないため、分布の中心は明確ではない。底径については22~37cmのものがあり、26~29cmに分布の中心がある。20cm程度の小型品もわずかながら存在する。胴部の器壁の厚さは概ね1.0~1.2cmを測り、厚いものでは1.5cm、薄いものでは0.8cmほどである。なお、底部径の分布図作成にあたっては、埴輪のゆがみ等を考慮し残存率10%以上の資料を対象とした。

**口縁部(図20)** 口縁部の形態は次の5類に分類した。

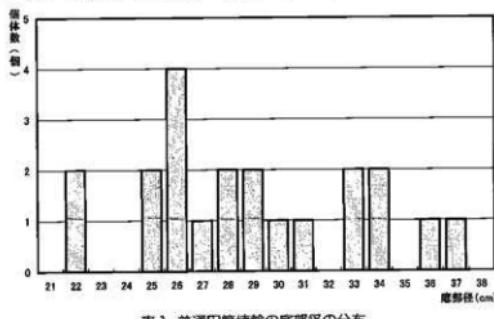


表1 普通円筒埴輪の底部径の分布

- 〔A類〕端部が外方に短く屈曲するもの。
- 〔B類〕最上段突帯からゆるやかに外反するもの。
- 〔C類〕外反気味に立ち上がり、端部を丸く、もしくは面をもっておさめるもの。
- 〔D類〕口縁端部付近で水平に折れ曲がるもの。
- 〔E類〕直立気味に立ち上がり、端部上端に面をなすもの。

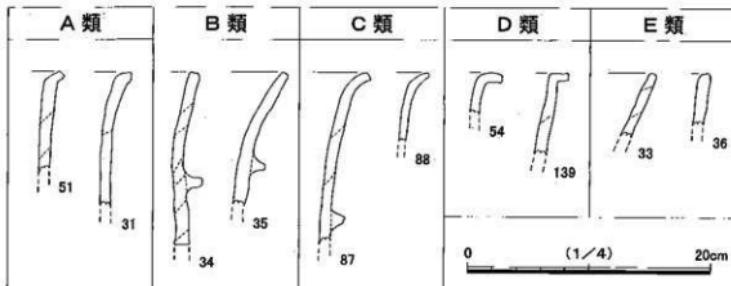


図20 口縁部形態の分類

突帯（図21） 突帯の断面形態は次の7類に分類した。

- 〔a類〕断面方形で突出度の高いもの。
- 〔b類〕断面M字形のもの。
- 〔c類〕断面台形で突出度の高いもの。
- 〔d類〕断面台形で突出度の低いもの。
- 〔e類〕上稜がやや突出するもの。
- 〔f類〕明確な稜をもたず、丸く仕上げるもの。
- 〔g類〕下稜がやや突出するもの。

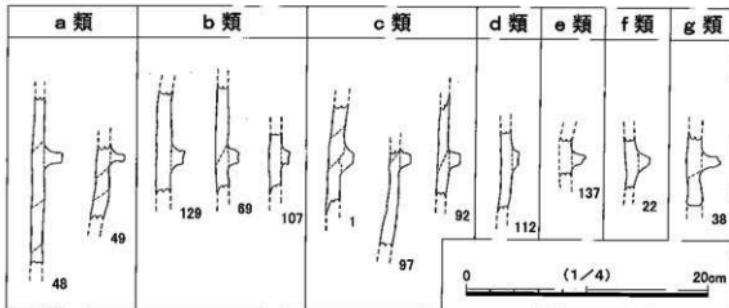


図21 突帯形態の分類

**突帯間隔設定技法** 突帯の設置位置を示すための設定指標を施す技法である。荒神山古墳の埴輪には、方形刺突技法（A手法）と凹線技法（B手法）の2種類が認められる。方形刺突技法では、約7.3cmおきに0.5cm程度の断面方形の棒状工具により、器面を刺突した痕跡がみられる（1：写真7）。方形刺突は一次調整のタテハケ又はナナメハケの後に施されている（4：写真8）。また、刺突のための棒状工具の痕跡として、突帯上辺の点状圧痕（110：写真9）や底部付近のタテ方向線状圧痕（15：写真10）が認められる。凹線技法では幅約0.2cmの凹線が引かれている（99：写真11）。凹線を引くための工具痕が、突帯上辺のL字状圧痕として認められる（117：写真12）。両手法とともに、基本的にこれらの目印に対して突帯の上辺をあわせて貼り付けられている。

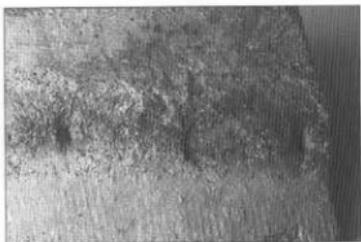


写真7 突帯剥離面にみられる方形刺突（1）

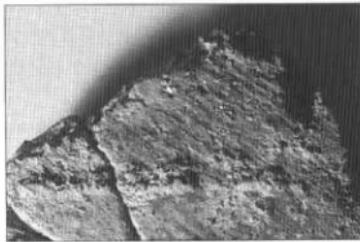


写真8 突帯剥離面にみられるナナメハケと方形刺突（4）



写真9 突帯上辺の点状圧痕（110）

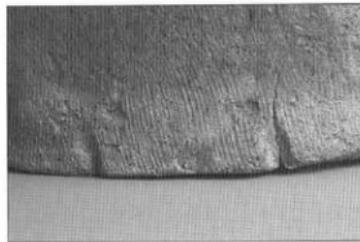


写真10 タテ方向の線状圧痕（15）



写真11 突帯剥離面の凹擦（99）

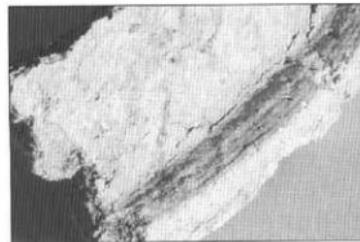


写真12 突帯上辺のL字状圧痕（117）

### 突帯間隔（表2）

〔口縁部高〕口縁部下の突帯の突帯上辺から口縁部端までを計測。計測可能なものは3個体であった。それぞれ7.6cm、8.8cm、12.0cmを測る。

〔胴部突帯間隔〕突帯の上辺間を計測した。計測可能な個体は4個体であった。12~13cm前後のもの(119・155)と14~15cm前後のもの(83・99)に分かれる。

〔底部高〕底面から1条目突帯の上辺までを計測。計測可能な個体は7個体であった。底部高は17cm前後のもの(119)と18.5cm~19cm前後のもの(2・126・155)、21cm前後のもの(83・99・114)に分かれる。

〔底部高と突帯間隔〕底部高と突帯間隔がセットでわかる資料は4点であった。それぞれ底部高と突帯間隔が21cm前後と14~15cm前後のもの(83・99)、19cm前後と12cm前後のもの(155)、17cm前後と12cm~13cm前後のもの(119)である。資料数が少ないため、この数値が荒神山古墳の埴輪の規格かどうかは現段階では明言できない。

透孔 透孔は円形、方形(長方形)、逆三角形、半円形の4種類を確認した。主体となるのは円形と方形だが、透孔の穿たれる段数や方向などの関係の分かる資料がほとんど確認されておらず、わずかに119で2段目に2方向の方形の透孔をあけるものが確認されているだけである。また、各透孔の大きさのわかる資料もわずかだが、円形透孔に関しては、直径6~7cmのものが多い。

底部 底部の形態分類は行わなかった。しかし、荒神山古墳の埴輪底部形態は、直線的なもの、自重によりゆがんだもの、外反するものなど様々な形態がある。基部は粘土帶あるいは粘土紐を用いて、基部となる輪をつくる。粘土帶の幅は4cmから10cmを確認しているが6cm前後のものが多い。その粘土帶の接合方法については、2種類確認している。底面の設置面を観察できるように埴輪を傾け、外面を上に内面を下になるようにしたところ、粘土帶の左側からのものが右側からのものの外側に接合しているもの(138:写真13)と、その逆で粘土帶の左側からのものが右側からのものの内側に接合しているもの(144:写真14)である。また、底面に何らかの圧痕を確認できるものは少ないが、8で棒状の圧痕(写真15)が、142で板目状の圧痕(写真16)が認められる。

胎土・焼成・色調 胎土は全体的に砂礫を含むものが多い。砂礫の大きさ・量などから2つのグループに分類した。

〔A類〕0.1cm前後の細かい砂礫を含み精緻なもの。

〔B類〕0.3~0.5cmの大きめの砂礫を多く含むもの。

遺物番号	口縁部高	突帯間隔	底部高	突帯間隔設定技法		分類
				A	B	
2	—	—	18.9	A	II	
34	8.8	—	—	—	II	
35	7.6	—	—	—	II	
83	—	15.1	21.2	—	II	
87	12	—	—	—	II	
99	—	14.1	21	B	I	
114	—	—	20.8	A	II	
119	—	12.8	16.9	B	I	
126	—	—	19.1	—	II	
155	—	11.9	19.6	—	II	

表2 突帯間隔計測一覽

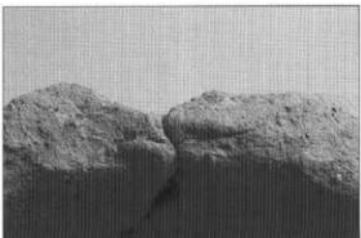


写真13 底部：粘土帯の接合状況 (138)



写真14 底部：粘土帯の接合状況 (144)

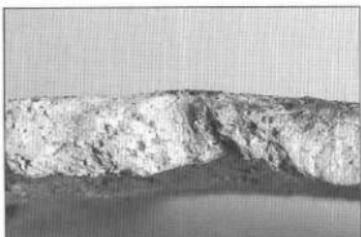


写真15 底部：棒状の圧痕 (8)

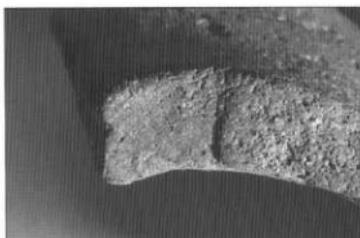


写真16 底部：板目状の圧痕 (142)

焼成は、全般的に軟質である。器壁の厚いものなどには断面に黒芯が確認されるものもある。また、資料の大半が黒斑を有していることから、野焼き焼成であると考えられる。色調は、明黄褐色、にぶい黄橙色、浅黄橙色、橙色を呈するものを主体とし、少數ながら、灰黄褐色やにぶい褐色を呈するものなどもありバラエティーに富んでいる。これらの違いは胎土による要因が大きいと思われるが、同じ個体内でも、焼成時や埋没状態などにより色調が違うことが確認されているため、色調の違いだけで別個体とは判断しきれない。

調整 外面調整には、タテハケ、ナナメハケ、ヨコハケ、ナデ、板ナデの5種類が、内面調整にはヨコハケ、ナナメハケ、ナデ、板ナデの4種類が認められる。

各ハケメは条線の粗密により3つに分類できる。

〔原体A〕 4～5本/cm 前後の粗いもの。

〔原体B〕 7～8本/cm 前後の細かいもの。

〔原体C〕 10本以上/cm の微細なもの。

これらのうちで主体となるのは、原体Aと原体Bで、原体Cはごく少数である。外面のハケメについては、現段階で2次調整タテハケと明確に判断できる資料は存在しない。さらに、突帯の剥離面より、外面調整が1次調整タテハケ（ナナメハケ）のみの痕跡を確認できる資料もある（4：写真8）。以上より、外面のタテハケは、1次調整のみで2次調整を欠くものが主体を占めると考える。なお、外面調整ヨコハケは、口縁部の資料1点（87）のみ

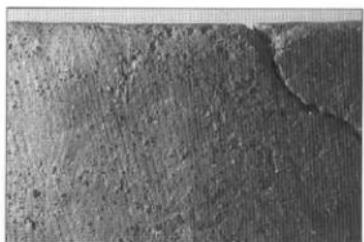


写真17 外面ハケ原体 A (2)



写真18 外面ハケ原体 B (83)



写真19 外面ハケ原体 C (128)

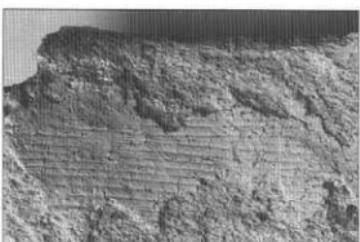


写真20 内面ヨコハケ原体 A (146)



写真21 内面ヨコ板ナデ (94)

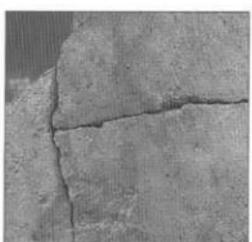


写真22 底部付近に垂れた赤色顔料 (15)

を確認した。

ナデについては、タテ・ナナメ・ヨコと各方向のものを確認している。板ナデについては調整痕を判別している資料は少ないが、確認している資料の中では横方向のものが目立つ。

これらの内外面調整技法の組み合わせは、以下の2つのグループに大別できる。

①内外面調整ナデのもの。

②外面調整がタテ・ナナメハケで、内面調整がナデ、板ナデ、ナナメ・ヨコハケのもの。

線刻 今回、円筒埴輪で線刻が確認されたのは1点であり、ほとんどの埴輪では線刻はなかっ

たと思われる。31で線刻を確認しているが、口縁部外面調整後に鋭角な「く」の字状の線刻が3本刻まれている。なお、器種不明品(187)で斜線の線刻を確認している。

**赤色顔料** 器面に赤色顔料が残る個体がある。基本的に外面に施されているが、口縁部のみ内外面に施される資料を確認している。また、外面に施されているものでも、1条目突帯側面より上部に施されており、埴輪埋設時に見えなくなる底部には施されなかつたようである。また、底部付近で赤色顔料が上部より垂れているものも確認した(15:写真10)。

### (3) 普通円筒埴輪の分類

ここでは、普通円筒埴輪について、外面調整を主な視点として、埴輪を以下の2群に分類する。

**I群** 外面調整ナデのもの。内面調整も同じくナデ調整が施され、口縁部の形態はA類を主体とする。突帯の形態は、b・c類を主体とし、少数ながらa・e・fも存在する。突帯間隔設定技法はB手法のみ確認している。透孔の形状は方形を主体とする。胎土はB類を主体とする。

**II群** 外面調整タテ・ナナメハケのもの。内面調整は、ナデを主体とするものの、ナナメ・ヨコハケも施される。口縁形態は、A類・B類・C類・D類と様々な形態のものがある。突帯に関しては、c類を主体とするが、a類・b類・e類なども少なからず確認でき、様々な形態があるといえる。突帯間隔設定技法に関してはA手法のみ確認している。透孔は円形を主体としつつ、方形や逆三角形、半円形なども確認されている。胎土は、A類・B類とも確認でき、どちらが主体とはいがたい。赤色顔料の割合がI群に比べて高い。

	外面調整		内面調整	形態							突帯間隔設定技法	透孔			胎土	赤色顔料								
				口縁部		突帯						形状												
	ナデ	タテハケ		ナナメハケ	ナナメハケ	A	B	C	D	E	a	b	c	d	e	f	g	A	B	方形	円形	逆三角形	半円	
I群	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
II群	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

■ 主体的
□ 客体的
▨ 全体の1割以下

表3 普通円筒埴輪の分類

### (4) 後円部出土の普通円筒埴輪

#### ① T5 トレンチ: 2段目テラス出土普通円筒埴輪(1~16、図22・23)

T5 トレンチ: 2段目テラス出土埴輪で原位置を保っていたものは、2と15である。それぞれ、その出土状況より、2は1と、15は14と同一個体と思われる。2と15は心々距離1.2mを測る埴輪列で、2はT5 トレンチ 2段目テラスで底部の2/3程度が原位置を留めて

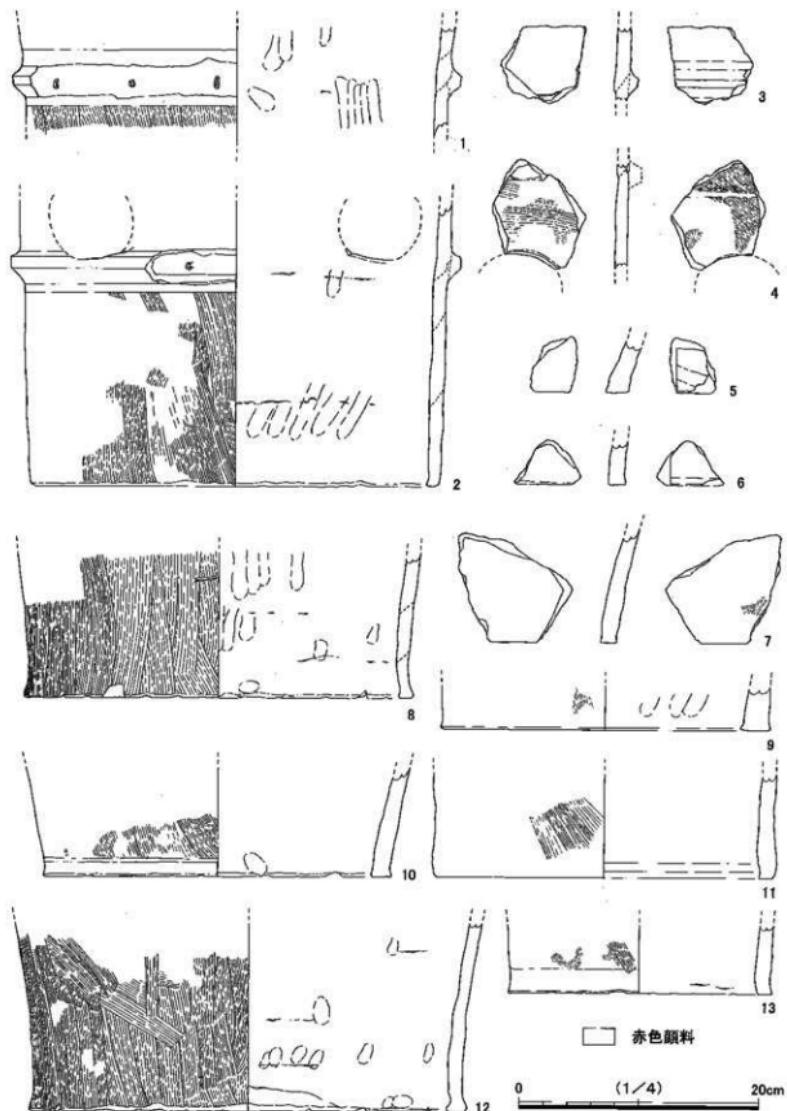


図22 T5 トレンチの2段目テラス出土普通円筒埴輪実測図(1)

いた。復元底径34.0cm、底部高18.9cmを測る。外面は原体Aのタテハケを短いストロークで施す。内面は右傾ナメ方向のユビナデが明瞭に残っているが、粘土帶や粘土紐の接合痕も明瞭に残っている。突帶はc類で、突帶剥離面に方形刺突を残す。同一個体と考えられる1によると、刺突の間隔は約7.3cmを測る。また、1・2ともに1条目突帶側面の半ばより上部の外面に赤色顔料を塗布している。15は、

原位置埴輪2の西拵張区では原位置で出土したもので、14とは出土状況から同一個体の可能性が高い。底径は29.8cmを測る。外面は原体Bのタテハケを施し、所々に赤色顔料が垂れた痕跡が見られる。上部外面に赤色顔料を塗布した際に垂れたものと思われる。また、底部外面には、5.0~6.0cm間隔でタテ方向の圧痕が残っており、そのタテ方向の圧痕は若干左側に傾いている。突帶間隔設定時に使用された規格工具痕であろう。内面はタテ方向のユビナデの痕跡が明瞭に残っている。しかし、粘土帶や粘土紐の接合痕も明瞭に残っており、それによると、粘土紐(帶)は螺旋状に巻き上げられたようである。同一個体と思われる14の外面の調整は15と同じで、突帶はc類、透孔は円形(半円形)である。同一個体と考えられる15の底部に赤色顔料の垂れた痕跡があるにも関わらず14には赤色顔料の痕跡は認められない。

3・4は胴部である。4は外面にナナメハケ調整を確認できる。突帶の剥離面にも、ナナメハケ調整を確認できるが、それは下半のナナメハケと同一動作によることから、外面調整が1次ナナメハケのみで2次調整を欠くとみて大過ない。また、刺突がナナメハケを切っていることから、ナナメハケ調整→突帶間隔設定→突帶貼付という工程を復元することができる。透孔は円形である。

5~13・16は底部である。様々な形態のものがある。8は、復元底径32.5cmを測り、外面は原体Aのタテハケを、内面はタテ方向のユビナデを施すⅡ群である。10~13も外面にタテハケ又はナナメハケを施し、内面ナデ調整を施すⅡ群である。復元底径は10が29.0cm、11が28.0cm、12が36.0cm、13が22.0cmを測る。12の外面には、赤色顔料の垂れた痕跡が

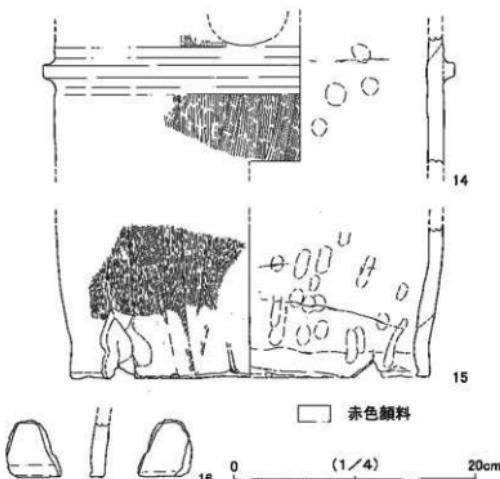


図23 T5 トレンチの2段目テラス出土普通円筒埴輪実測図(2)

確認できる。

②T5 トレンチ：3段目斜面出土普通円筒埴輪（17～25、図24）

17～22は胴部である。17は突帯c類で、復元胴径は40.0cmを測る。調整は、外面が原体

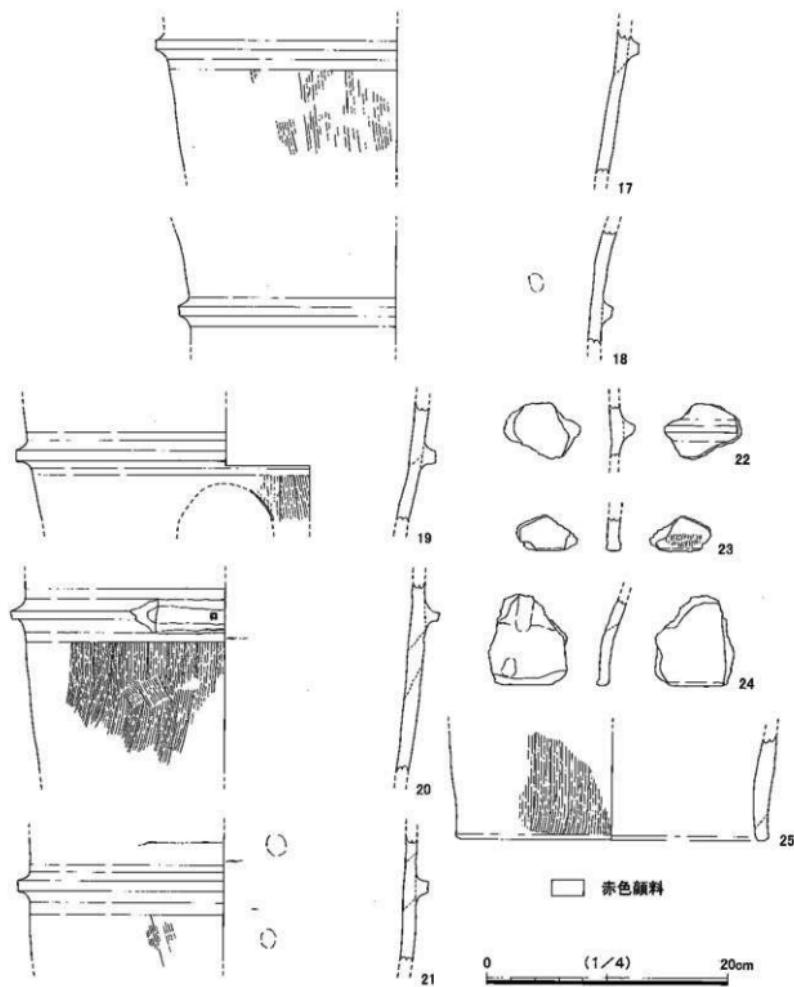


図24 T5 トレンチの3段目斜面出土普通円筒埴輪実測図

Aのタテハケ、内面がナデ調整で、II群に属す。わずかではあるが、外面に赤色顔料を確認できる。18は突帯c類で、復元胴径36.0cmを測る。内外面とも摩耗のため調整は不明であるが、外面の赤色顔料は確認できる。19~21は、いずれも突帯c類で、外面原体Aのタテハケを施し、II群に属す。また、いずれも外面に赤色顔料を残す。19は突帯下段に円形の透孔が確認できる。20は突帯剥離面に方形刺突が残る。

23~25は底部である。23・25では外面に原体Aのタテハケを施しII群に属す。25は底径26.0cmを測る。

#### ③ T4 トレンチ出土普通円筒埴輪 (26~30、図25)

26~30は胴部である。27は、突帯c類で外面タテハケのII群に属す。28は、突帯は剥離してしまって形態は不明だが、剥離面にタテハケを確認できる。また、タテハケ後に突帯間隔設定の方形刺突が施されていることを確認できる。29は突帯c類で、方形の透孔を穿つ。30は突帯c類で、外面タテハケのII群に属す。いずれにも赤色顔料は認められなかった。

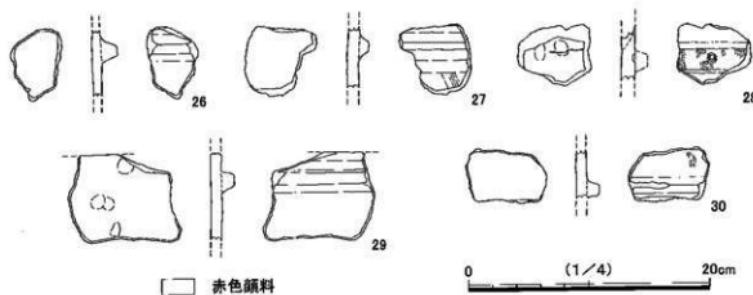


図25 T4 トレンチ出土普通円筒埴輪実測図

#### ④ 表探地点A出土普通円筒埴輪 (31~50、図26・27)

31~36は口縁部である。31・32はともにII群である。口縁はA類で、内外面とも原体Bのナナメハケが施されたのちに、端部付近は内外面ともヨコナデが施される。同一個体の可能性もある。31は、復元口径40.3cmを測り、外面には、ナナメハケの調整後、鋭角な「く」の字状の線刻が3本刻まれている。また、内面には粘土紐の接合痕が確認できる。33・36は口縁E類で、内外面とも丁寧なヨコナデが施される。また、内外面とも赤色顔料が確認できる。33は復元口径34.9cmを測り、内面には粘土紐の接合痕が確認できる。34・35はII群で、口縁B類、突帯a類である。内外面原体Bのタテハケ・ナナメハケを施した後、口縁端部付近のみ丁寧にヨコナデを施す。また、内外面とも赤色顔料を確認できる。外面は全面に塗布される。内面に関しては端部付近のみで、34では端部から約7.0cm付近まで、35では端部から約5.5cm付近まで赤色顔料が塗布されていたようである。34は、口縁部から数えて2段目に方形(逆三角形・半円形)の透孔を穿つ。また、横断部の曲率が非常に緩やか

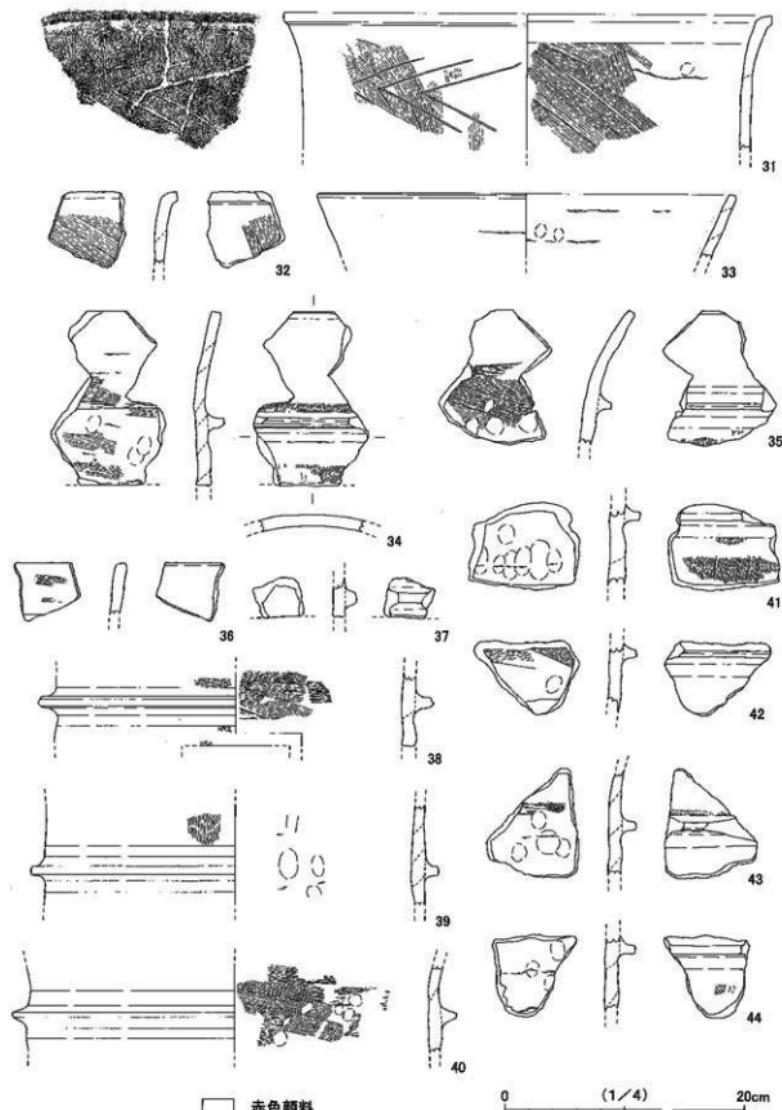


図26 表探地点 A で採集の普通円筒埴輪実測図 (1)

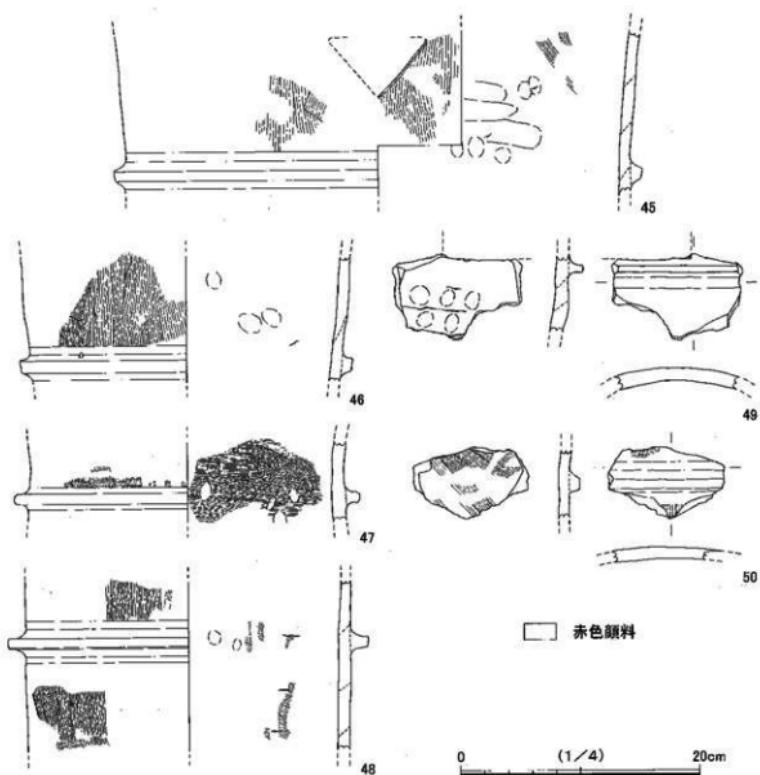


図27 表採地点 A で採取した普通円筒埴輪実測図 (2)

なことから、楕円筒埴輪の可能性もある。

37~50は胴部である。37は突帯 c 類で、方形（逆三角形・半円形）の透孔を穿つ。38は II 群で、復元洞径が33.2cmを測る。突帯 g 類で、外面は原体 B のタテハケを、内面は原体 B のヨコハケが施され、方形（逆三角形・半円形）の透孔を穿つ。外面には赤色顔料を確認できる。39は II 群で、復元洞径が34.0cmを測る。突帯 a 類で、外面に原体 B のタテハケ、内面にタテ方向のユビナデが施される。外面には赤色顔料を確認できる。40は、復元洞径37.2 cmを測る。外面は摩耗が激しいため調整は不明だが、内面は原体 B のヨコハケが確認される。また、摩耗のためやや不明瞭だが、外面の赤色顔料もわずかに確認できる。41・44は II 群で、突帯 a 類で、外面原体 B のタテハケ、内面タテ方向のユビナデを施し、外面に赤色

顔料を確認できる。42は、突帯a類で、外面は摩耗しているが、内面は原体Bのナナメ・ヨコハケが施され、外面に赤色顔料を確認できる。43はII群である。突帯a類で、外面は原体Bのタテハケを、内面は原体Cのヨコハケを施し、外面に赤色顔料を確認できる。45・46はII群である。突帯c類で、外面は原体Aのタテハケを、内面はヨコ・ナナメ方向のユビナデが施されている。45は、復元胴径44.0cmを測り、逆三角形の透孔を穿つ。46は復元胴径27.7cmを測る。47はII群である。突帯a類で、復元胴径28.8cmを測る。調整は内外面とも細かい原体であるC類を使用し、外面はタテハケを、内面はヨコハケを施す。また、内面はヨコハケ後の指頭圧痕が認められる。外面全体と内面の上部の一部に赤色顔料が確認できる。48はII群である。復元胴径30.0cmを測り、突帯a類で外面は原体Bのタテハケ、内面は原体Bのヨコハケとタテ方向のユビナデを施す。内面には一部粘土紐の接合痕が認められる。外面は赤色顔料が確認できる。49はI群である。突帯a類で、内外面ともナデが施されている。内面はタテ方向のユビナデが明瞭だが、粘土紐の接合痕も明瞭に残る。外面には赤色顔料が確認できる。50はII群である。突帯c類で、外面原体Aのタテハケを、内面原体Bのナナメハケを施す。49・50はともに横断部の曲率が非常に緩やかであることから精円筒埴輪の可能性がある。

#### (5) 前方部出土の普通円筒埴輪

##### ① T7 トレンチ：1段目テラス出土普通円筒埴輪（51～83、図28～30）

T7 トレンチ：1段目テラス出土埴輪のなかで、原位置を保っていた埴輪は83である。83はII群に属し、復元底径28.6cm、底部高21.2cm、突帯間隔15.1cmを測る。底部の残存率は約1/3であるが、2段目透孔は認められない。突帯はb類である。外面は、原体Bのタテハケを反時計回りに施している。内面は、同じく原体Bのナナメ・ヨコハケを下から上に向かって順番に施している。内面には、粘土紐の接合痕や埴輪成形時の指頭圧痕が認められる。胎土はB類で、色調はぶい黄橙色である。赤色顔料に関しては内外面とも認められない。

51～54は口縁部である。51・52はI群である。口縁A類で、内外面ナデを施す。特に端部付近には、内外面ともに丁寧なヨコナデを施す。51は復元口径37.3cmを測る。53・54は口縁D類である。

55～74、77～82は胴部である。55はII群で復元胴径34.0cmを測る。突帯c類で、外面原体Bのタテハケを施す。56・58・59はI群である。突帯c類で、内外面ナデを施す。復元胴径については、56は36.0cm、58は38.0cm、59は40.0cmを測る。59は内面の一部に横向の板ナデが認められ、方形の透孔を穿つ。57は復元胴径36.0cmを測る。突帯c類で、方形（逆三角形、半円形）透孔を穿つ。外面は摩耗のため調整不明だが、内面はナデが施される。赤色顔料は認められない。60は突帯b類で、内面原体Aのヨコハケを施す。61はII群で突帯c類である。方形の透孔を穿つ。外面原体Aのタテハケを、内面原体Aのヨコハケを施す。62は突帯c類である。63はI群で突帯b類である。調整は内外面ともナデを施す。

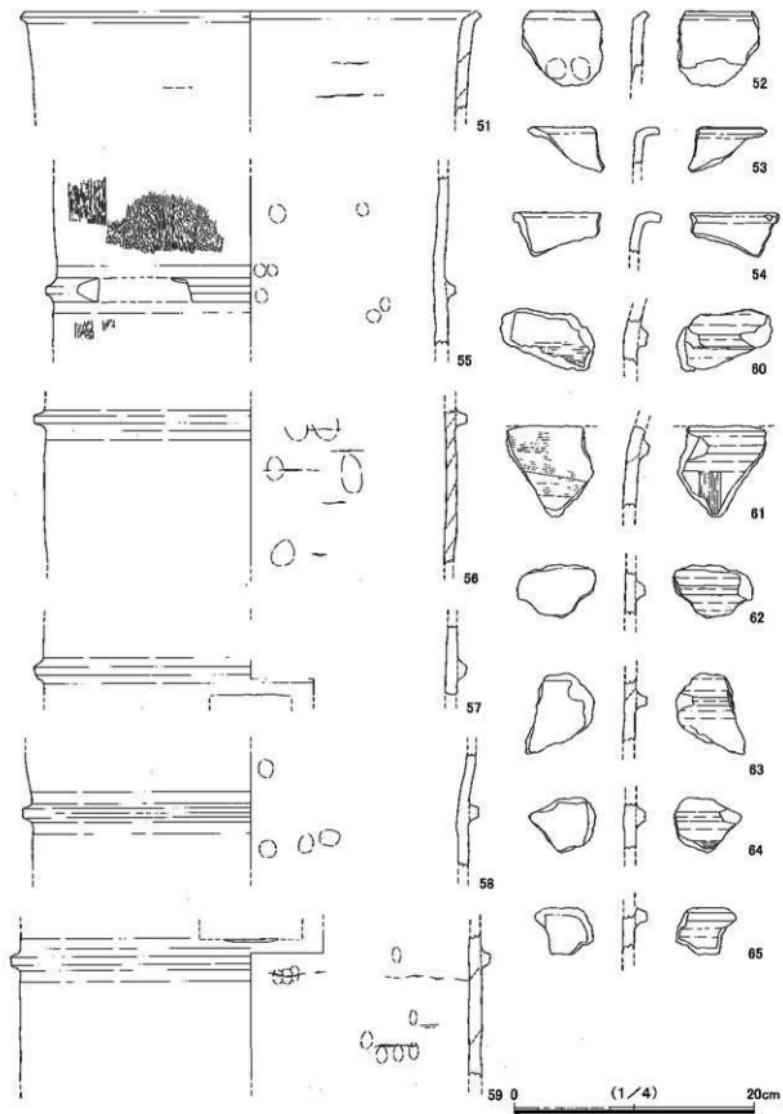


図28 T7 トレンチの1段目テラス出土普通円筒埴輪実測図(1)

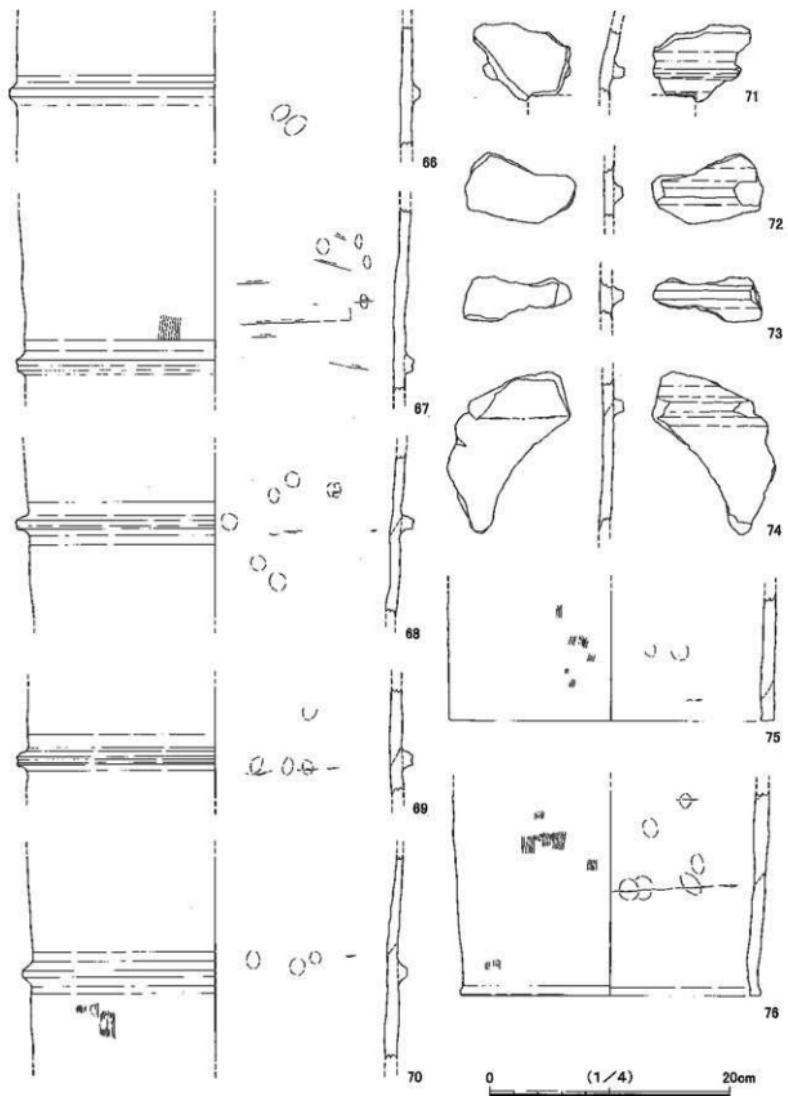


図28 T7 トレンチの1段目テラス出土普通円筒輪実測図（2）

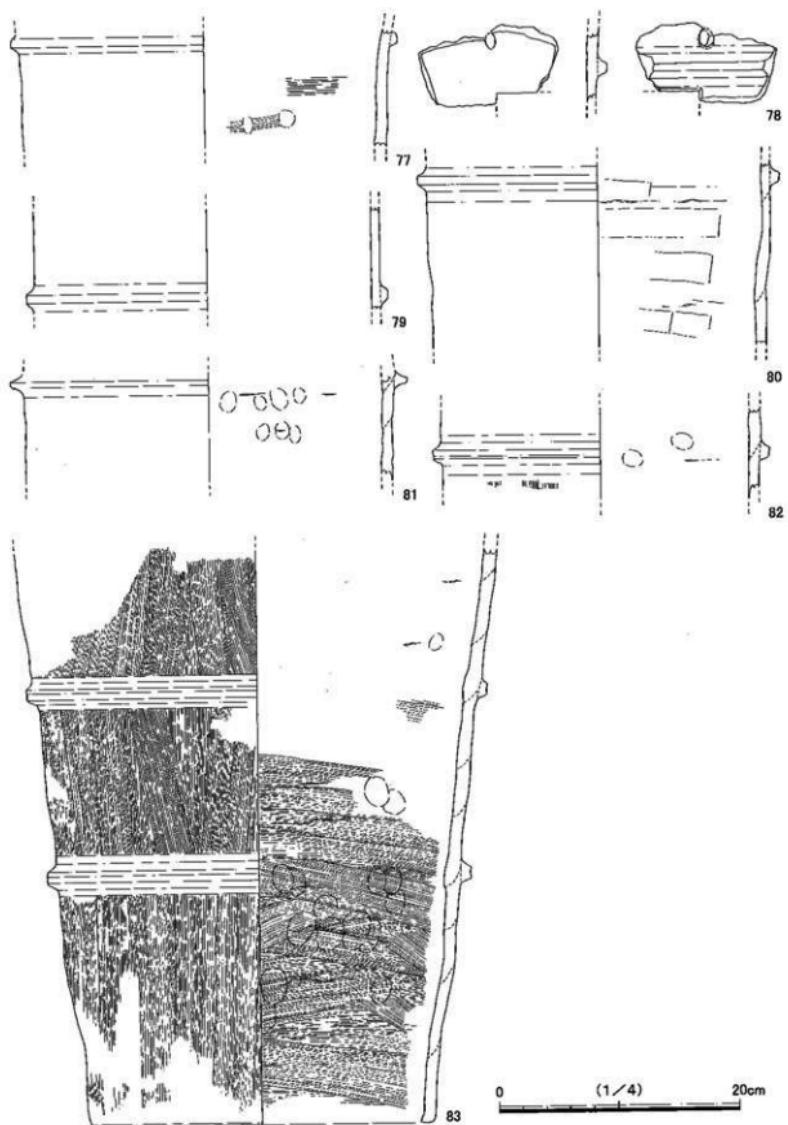


図80 T7 トレンチの1段目テラス出土普通円筒埴輪実測図（3）

64はⅡ群である。突帯c類で、外面原体Bのタテハケ、内面ナデを施す。65はI群で、突帯c類で内外面ナデが施される。66は復元胴径34.0cmを測る。突帯d類である。内外面とも摩耗が激しいため、調整は不明である。67はⅡ群である。復元胴径33.0cmを測る。突帯b類で、外面原体Aのタテハケがわずかに認められる。内面はヨコ方向板ナデが施され、所々ユビナデも確認できる。68・69はI群で、内外面ともナデが施される。68は復元胴径33.0cmを測り、突帯c類である。69は復元胴径33.0cmを測り、突帯b類である。70はⅡ群である。復元胴径32.0cmを測る。突帯c類で、外面原体Bのタテハケ、内面ナデを施す。71・74はI群である。突帯c類で、内外面ともナデを施す。72・73はともに突帯c類である。外面は摩耗のため調整は不明である。

75・76は底部である。ともにⅡ群で外面原体Bのタテハケ、内面ナデを施す。復元底径は、75が27.0cm、76が25.0cmを測る。76は内面にユビナデと粘土紐の接合痕を明瞭に残す。77は復元胴径32.0cmを測る。突帯c類で、外面は摩耗しているものの、内面は原体Aのヨコハケとユビナデを施す。78はI群で、内外面ナデ調整である。突帯の上部に長径1.7cm短径1.3cmの小孔が、突帯貼り付け後に内面から外面に向かって穿たれている。突帯c類で、透孔は方形である。80・81はI群で、外面ナデが施されるが、80の内面調整にはヨコ方向の板ナデが認められ、器壁が非常に薄い。復元胴径は80が30.0cm、81が33.0cmを測る。82はⅡ群で、外面原体Bのタテハケを施す。

#### ②T7トレンチ：1段目テラス以外出土普通円筒埴輪（84～86、図31）

T7トレンチは、1段目テラスを除くと埴輪の出土量が少なく、ほとんどが表土・流土中の出土であった。また、T7トレンチの2段目テラスでは原位置埴輪を確認することができなかっただけでなく、そもそも出土量自体がT7トレンチ・T8トレンチの他のテラスに比べて極端に少ない。遺構の項でも触れたが、このテラスは他のテラスに比べ平面形態も異なっており、埴輪列がもともと存在しなかった可能性もある。仮に、原位置の埴輪が何らかの理由によって抜け落ちたと考えても、その痕跡は残されていないため、やはり埴輪の出土量の少なさを説明しがたいのである。84は2段目斜面で出土した。内外面とも摩耗が激しく調整はわからない。突帯はf類とみたが、この形態も摩耗による可能性を残す。85は2段

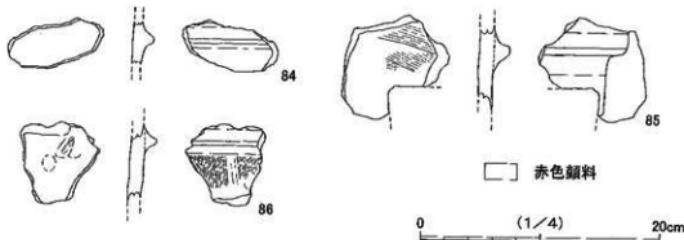


図31 T7トレンチの1段目テラス以外出土普通円筒埴輪実測図

目テラスで出土した。外面は摩耗しているが、内面には原体 A のナナメハケを確認できる。突帯は c 類で、方形（半円形）の透孔を穿っている。外面には赤色顔料を確認できる。86は墳裾部付近で、後世の改変をうけたと思われる平坦地から出土した。外面に原体 B のタテハケが施された II 群である。内面の一部にナナメ方向にユビナデが強く施されている。

③ T8 トレンチ：2段目テラス出土普通円筒埴輪（87～124、図32～35）

T8 トレンチ：2段目テラスでは、3個体の原位置を留めた埴輪列を検出した。前方部端から後円部に向かって99、114、119の順番に埴輪列を形成していた。それぞれの埴輪間の心々距離は0.6mを測る。埴輪樹立に際しては、3個体の両サイドに比べて中央の114を約0.1m高くして樹立させており、埴輪間で意図的に高さ調節を行っていたと考えられる。この埴輪列の3個体は、いずれも底部がほぼ一周残存している。99は I 群に属す。底部は、最大径31.5cm、最小径25.7cmと長短差5.8cm前後におよび、若干楕円形を呈す。底部高21.0cm、突帯間隔14.1cmを測る。突帯 b 類である。調整は外面ナデで、内面板ナデとユビナデが施されている。板ナデは、底部付近では左上がりのナナメ方向に、2条目突帯付近になるとヨコ方向に施されている。また、内面には指頭圧痕が明瞭に残るが、粘土紐の接合痕もナデ消されずに明瞭に残っている。それによると、粘土紐の幅は3.0～4.0cmを測る。突帯の剥離部分には突帯間隔設定の凹線が確認できる。凹線幅は約0.2cmを測る。胎土は精緻な A 類で、色調は浅黄橙色を呈す。114は II 群に属す。底部は1周分残存しており、底径は26.3cm、底部高は20.8cm、器壁は0.9cm前後と薄手である。突帯 c 類で、外面調整は原体 B のタテハケを施す。タテハケは、反時計回りに2段に施されている。内面はナデが施されているが、摩耗が激しいため不明瞭な部分も多い。そのため粘土紐の接合痕も確認できない。119は I 群に属す。底部は1周分残存しており、最大径27.3cm、最小径22.7cmと長短差が4.6cm前後におよび、若干楕円形を呈している。底部高は16.9cm、突帯間隔は12.8cmを測り、器壁は0.9cm前後とやや薄い。突帯は、1条目が e 類で上部が突出しており、2条目は c 類である。内外面ともナデ調整だが、内面はユビナデが明瞭で、特に底部のナデは強く施される。ナデで消え残った粘土紐の接合痕がよく遺存しており、それにより粘土紐の幅が4.0～5.0cmであることが確認できる。また、底部から2段目に方形の透孔が2孔穿たれている。胎土は少し粗雑な B 類で、色調はにぶい褐色である。

87・88は口縁部である。どちらも口縁端部で外反するタイプであるが、87は端部に面をもち、88は丸くおさめるタイプである。87は突帯 e 類で、復元口径44.0cm、口縁部高12.0cmを測り、外面調整は原体 B で、若干左上がりのヨコハケを施す。このハケは口縁端部際まで施される。内面はナデだが、一部粘土紐接合痕が確認される。88は、外面調整は摩耗のため不明である。

89～98、100～113、115～118、120～124は胴部である。

89・92～95・97・98・100・106・107・111・113・115～118・122～124は I 群である。89は突帯 c 類で、方形の透孔を穿つ。93は復元胴径29.2cmで、突帯は b 類、内面にヨコ方向

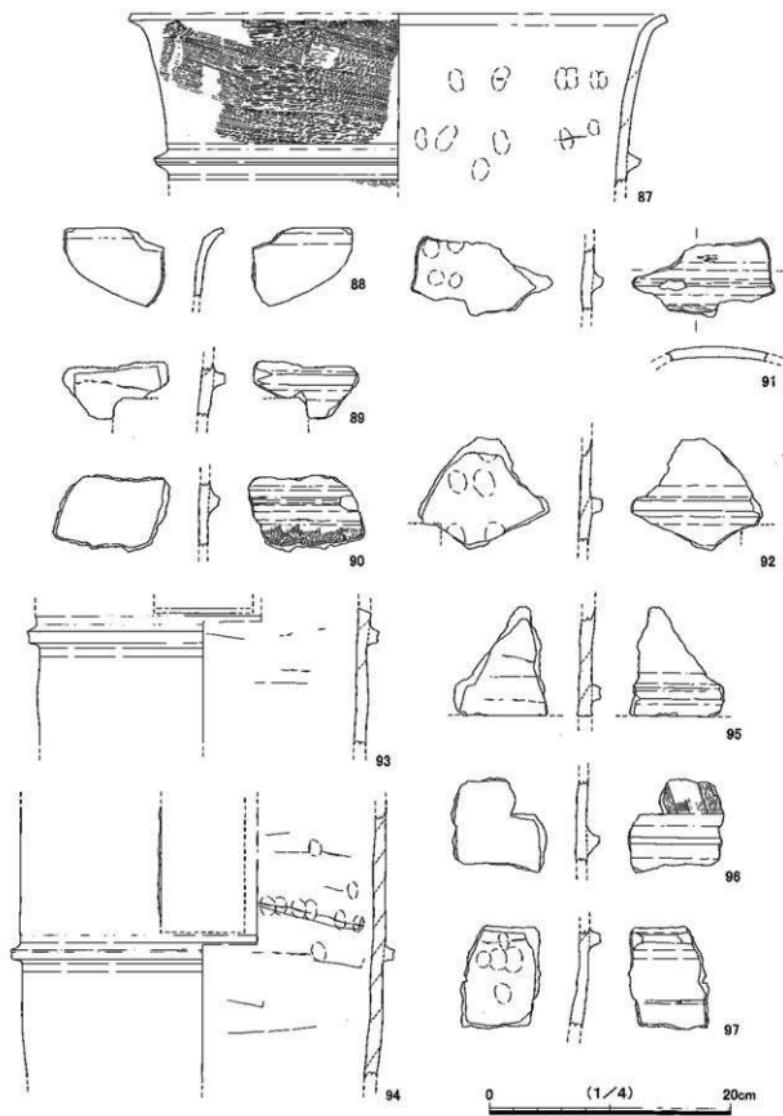


図32 T8 トレンチの2段目テラス出土普通円筒埴輪実測図(1)

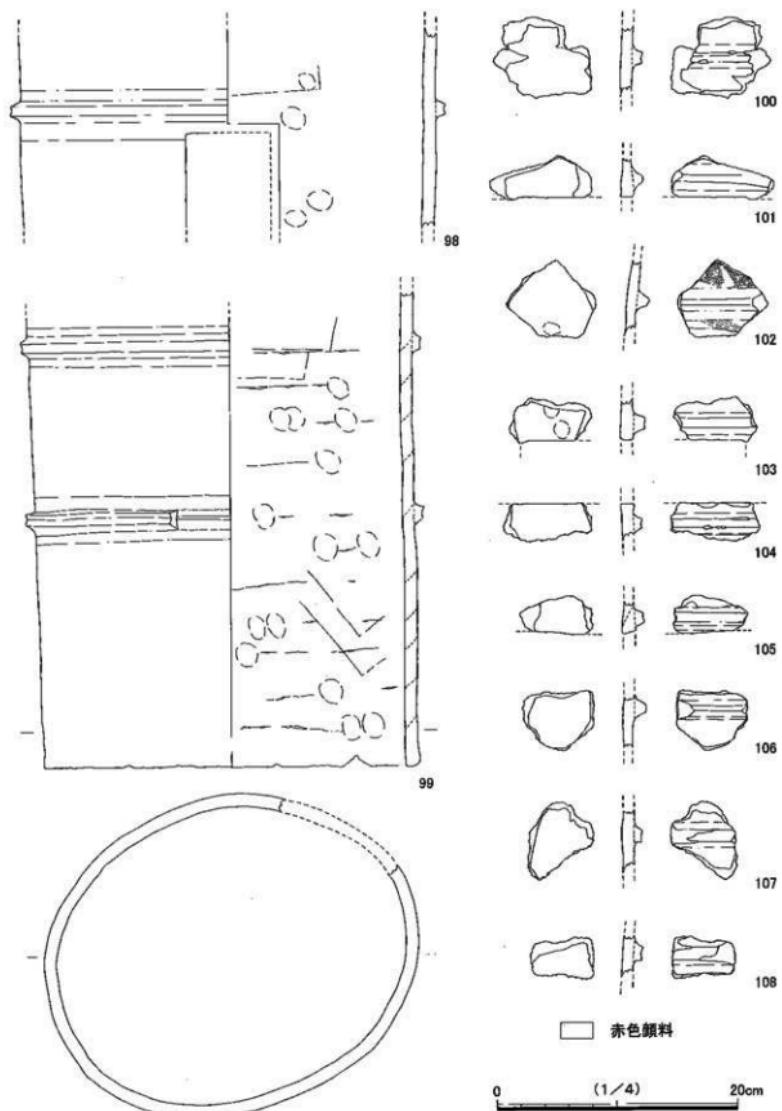


図33 T8 トレンチの2段目テラス出土普通円鉢輪実測図（2）

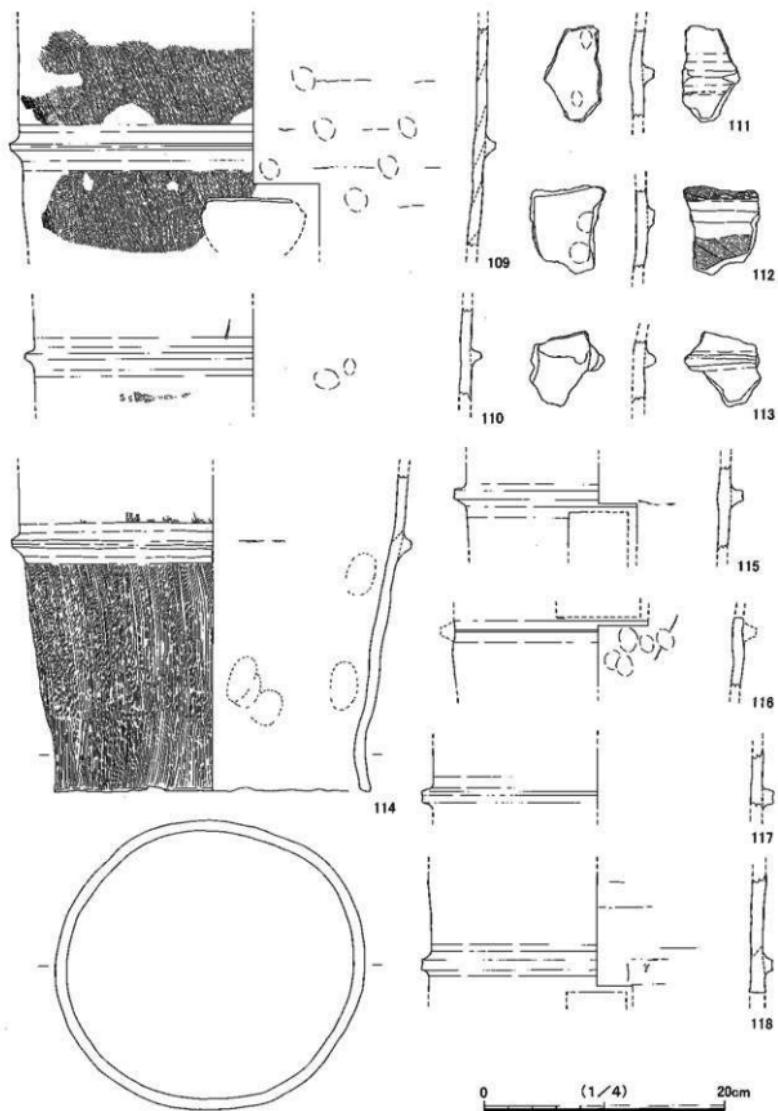


図34 T8 トレンチの2段目テラス出土普通円筒埴輪実測図（3）

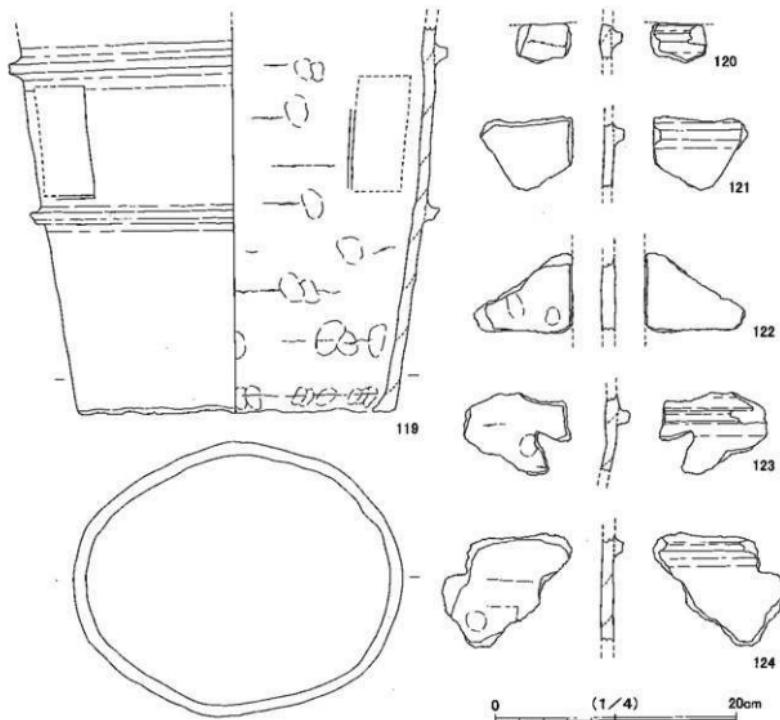


図35 T8 トレンチの2段目テラス出土普通円筒埴輪実測図(4)

の板ナデとユビナデが施され、方形の透孔が穿たれている。94は復元胴径32.0cmで、突帯はb類である。外面はナデが、内面はヨコ方向の板ナデが丁寧に施されている。方形の透孔を穿つ。95はM字形の突帯b類で、方形（逆三角形・半円形）透孔を穿つ。97はc類の突帯で、内外面ナデ調整である。外面の突帯から約5.0cm下部でヨコ方向の擦痕が確認された。98は復元胴径36.0cmで、M字形の突帯b類に方形の透孔を穿つ。100・107は突帯b類で、内外面ナデが施される。外面に赤色顔料を確認できる。115は突帯c類で、方形の透孔を穿つ。復元胴径は24.0cmを測る。116も方形の透孔を穿ち、復元胴径24.0cmを測る。突帯剥離面には、突帯間隔設定の凹線が確認できる。凹線は幅約0.2cmを測る。117は復元胴径29.2cmを測り、内外面ナデが施される。118はM字形の突帯b類で、内面にヨコ方向の板ナデを施す。ただ、この板ナデについては、一部にヨコハケの痕跡も確認されるため、ヨコハケの条線が不鮮明となり板ナデに見えている可能性もある。復元胴径29.2cmを測

る。122は方形透孔を確認できる資料である。124には内面に一部ヨコ方向の板ナデが確認できる。

90・91・96・102・109・110・112はII群である。90は、外面原体Bのタテハケを施す。91は、外面原体Bのナナメ・ヨコハケを、内面ナデを施す。内面横断部の曲率が緩やかで、培円筒埴輪の可能性がある。96は、外面に原体Bのナナメハケを施す。102は、外面原体Cのナナメハケを、内面ナデを施す。109は復元胴径が40.2cmを測り、突帯e類で半円形の透孔を穿つ。外面には原体Bの左上がりのナナメハケを反時計回りに施す。内面にはナデを施すが、粘土紐の接合痕が明瞭に残っており、粘土紐の幅が3.0~5.0cmであることが認められる。110は復元胴径が37.8cmを測り、突帯c類である。また、突帯上辺に点状圧痕が残されており、突帯間隔設定時の規格工具の痕跡と思われる。外面原体Bのタテハケ、内面ナデが施される。112は突出度の低いd類の突帯で、外面に原体Bのナナメ・ヨコハケを施す。

101・103~105・108・120はいずれも突帯周辺の資料で、外面には突帯貼り付け時のヨコナデしか確認できないので、該当する分類を判断したい。101・103~105・120はいずれも方形（逆三角形・半円形）透孔を穿つ。

#### ④ T8 トレンチ：1段目テラス出土普通円筒埴輪（125~129、図36）

T8 トレンチ：1段目テラス出土埴輪のうち、原位置を保っていた埴輪は126である。126はII群に属するもので、底部は1周分残存する。最大径26.8cm、最小径23.3cmであって、長短の差は3.5cm前後とゆがみの程度は小さい。底部高は19.1cmを測り、器壁は1.1cm前後である。突帯はc類である。器面の風化により、内外面とも調整を観察しづらいが、外面には原体Bのタテハケを一部確認することができる。内面には、タテ方向の強いユビナデを施した時の指頭圧痕が明瞭に観察できる。また、粘土紐の接合痕も明瞭に残っており、その幅が3.0~5.0cmにおさまることがわかる。また、底部から6.0cm前後のところに小孔が穿たれている。この小孔は外面より内面にむかって穿たれているが、貫通している箇所は直径0.2cm以下である。胎土は砂礫を多く含み、やや粗雑な印象を受けるB類で、色調はにぶい黄橙色を呈している。本例は1条目突帯付近では残存しているが、残存部分に、2段目の透孔は確認できなかった。また、赤色顔料の塗布も確認することはできなかった。125は口縁部である。口縁付近で水平に折れ曲がるD類である。復元口径は29.6cmを測る。127~129はいずれも胴部で、II群に属し、外面にハケメの細かい原体Cのタテハケ又はナナメハケを施す。内外面の風化具合、胎土や色調が126に似ており、同一個体の可能性も考えられる。127は外反していく形態をしている。復元胴径は突帯側面部分で25.0cmを測る。128は復元胴径が30.0cmを測り、半円形（円形）透孔を穿つ。内面には粘土紐の接合痕が残る。129は復元胴径が31.3cmを測る。内面に0.5cm前後幅で刺突したような痕跡を残す。

#### ⑤ T8 トレンチ：1・2段目テラス以外出土普通円筒埴輪（130~138、図36・37）

墳頂平坦面からは131・134が、3段目斜面からは133・136・137が、2段目斜面からは130・

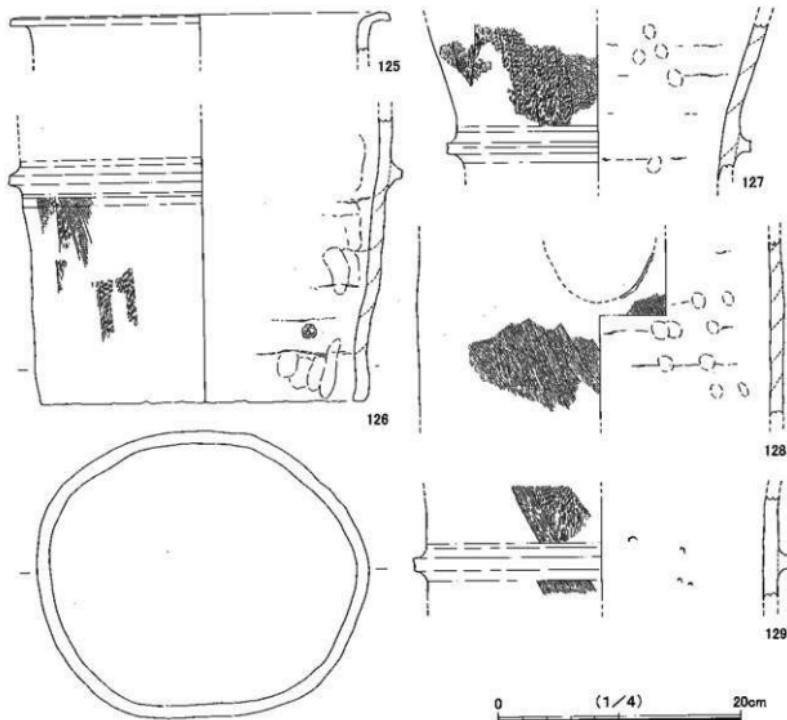


図36 T8 トレンチの1段目テラス出土普通円筒埴輪実測図

132・135・138がそれぞれ出土している。上層からの崩落土・流土に混じって出土した。出土傾向としては、2段目テラス以上からの出土が目立っており、埴頂部や2段目テラスに樹立していた埴輪が崩落してきたことを想定させる。また、埴輪部付近ではほとんど出土していないことも大きな特徴である。

130・131は口縁部である。130はII群に属し、口縁が外反するC類で、端部は丸くおさめている。外面には、ヨコ方向に近い左上がりのナナメハケ（原体B）が、端部際まで施されている。131は口縁A類で、端部で外方につまみ出されている。内面に一部ナナメハケが残るが、端部付近はヨコナデである。内外面とも赤色顔料が確認できる。

132～137は胴部である。132・134はI群である。132は方形の透孔が穿たれている。134は復元胴径34.0cmを測り、突帯はe類である。円形透孔が穿たれるが、他の円形透孔が直径6.0cm前後であることと比べると、当資料の直径約4.0cmはやや小さい。胎土は精緻なA

類で、浅黄橙色を呈し、外面には赤色顔料が塗布されている。133・135～137は突帯付近の資料なので、分類しがたい。133・136・137では外面に赤色顔料を確認できる。

138は底部である。II群に属し、復元底径は25.4cmを測る。外面に原体Bのタテハケを時計回りに施している。また、底面には基部粘土帶の接合痕が確認された。それによると、底面の設置面を観察できるように埴輪を傾け、外面を上に内面を下になるようにしたところ、粘土帶の左側からのものが右側からのもの外側に接合していることを確認することができた。

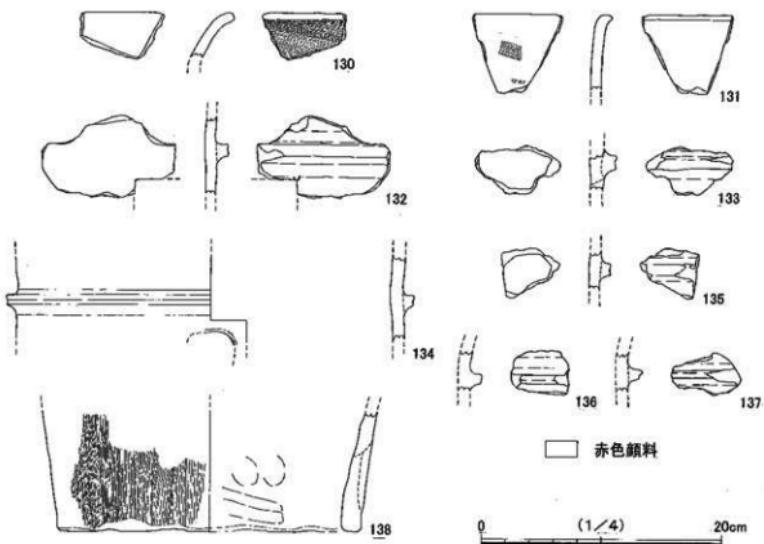


図37 T8 トレンチの1・2段目テラス以外出土普通円筒埴輪実測図

#### ⑥ T9 トレンチ・T2 トレンチ出土普通円筒埴輪 (139～146、図38)

前方部前端側に設定したトレンチである。原位置を保った埴輪は確認しておらず、出土量は少ない。139～142がT9 トレンチで、143～146がT2 トレンチで出土した資料である。

139はD類の口縁部で、端部付近で水平に折れ曲がり、面をもつ。II群である。外面は原体Bのナナメハケを、内面は原体Bのヨコハケを施す。端部付近は、内外面のハケ後にヨコナデで仕上げられている。また、外面は口縁端部から3.3cm付近にヨコ方向の擦痕が確認される。140は内外面とも摩耗が激しく、突帯も剥離しているが、その剥離面に突帯間隔設定の凹線が認められる。その幅は約0.2cmである。141では、突帯上辺に点状圧痕が認められる。突帯間隔設定の規格工具の痕跡であろう。142はII群で、復元底径21.9cmを測る。

外面は原体Bのナナメハケを、内面はナナメ方向の板ナデとユビナデが施される。外面のナナメハケは、反時計回りに、2段に施されている。また、底面に板目状の圧痕が確認される。144~146はいずれも底部で、II群に属す。外面調整は、144・146が原体Aのタテハケを、145が原体Aのナナメハケを施す。胎土は粗雑なB類で、色調は浅黄橙色を呈しており、いずれの要素も非常に似ているため、同一個体の可能性もある。146の外面には赤色顔料の垂れた痕跡が確認できる。

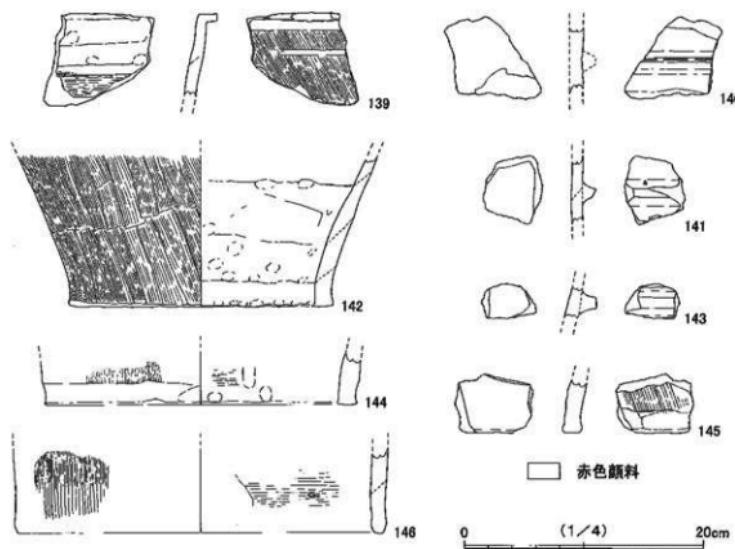


図38 T9・T2 トレンチ出土普通円筒埴輪実測図

### 朝顔形円筒・壺形埴輪

荒神山古墳では、朝顔形円筒埴輪と壺形埴輪が出土している。破片資料であるがゆえに、肩部下段の突帯が朝顔形円筒埴輪の場合、通有の断面形状であるが、壺形埴輪では鉢状の断面形状であるという点以外に、識別しがたい。

それゆえ、本報告では両者を一括してとりあげ、上記の基準により明確に判別した場合のみ区別して記述する。

なお、図化の方針は普通円筒埴輪の報告と同一とする。

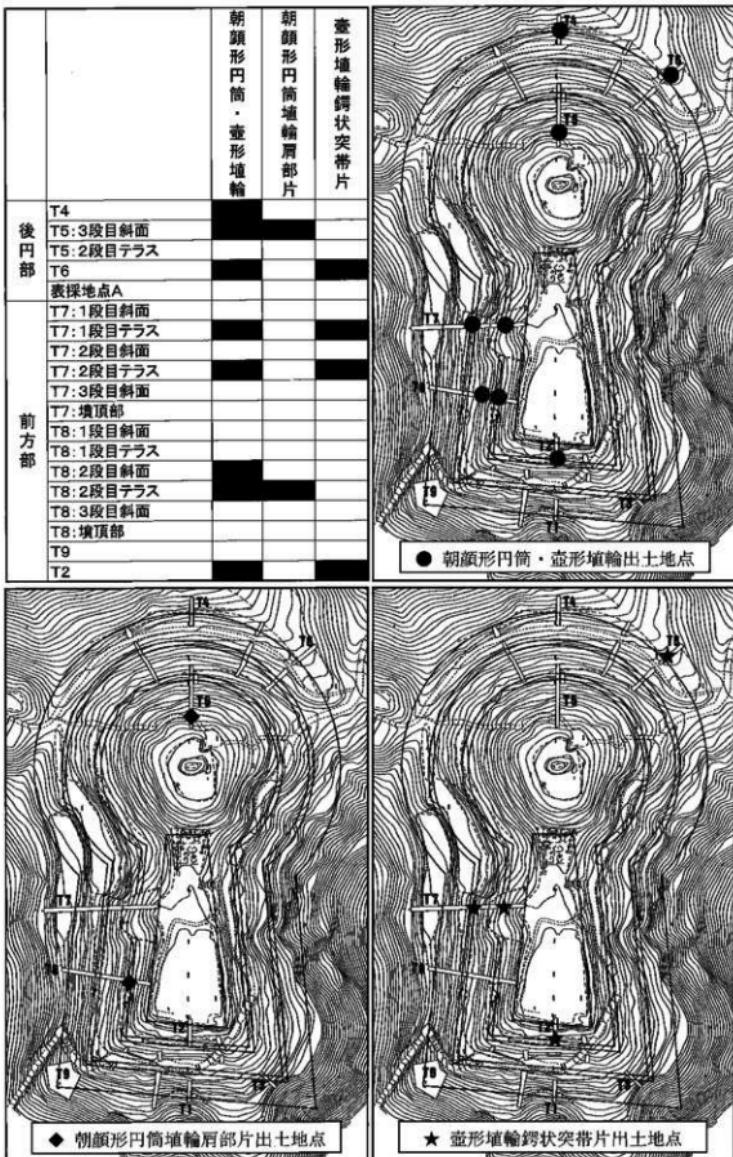


図39 朝顔形円筒・壺形埴輪出土位置図

### (1) 朝顔形円筒・壺形埴輪の出土分布と概要

朝顔形円筒埴輪又は壺形埴輪の破片が出土した位置はT4トレンチ、T5トレンチ：3段目斜面、T6トレンチ、T7トレンチ：1段目テラスと2段目テラス、T8トレンチ：2段目斜面と2段目テラス、T2トレンチである（図39）。これらのうち、朝顔形円筒埴輪と確定することができる肩部片は、T5トレンチ：3段目斜面、T8トレンチ：2段目テラスで出土している。また、壺形埴輪と確定できる銅状穴帶片は、T6トレンチ、T7トレンチ：1段目テラスと2段目テラス、T2トレンチで出土している。このように、朝顔形円筒埴輪、壺形埴輪と確定できる破片に限ると、両者が伴出しない傾向を読みとれることから、それぞれが別個に配置されていたことがわかる。口径についてみると、30cm～42cmのものがあり、分布の中心は30cm前後、35cm前後、40cm前後の3種類に大別できる。これらの違いは、朝顔形円筒埴輪と壺形埴輪の違いに起因するのかもしれない。2次口縁部高は、147のみ確認でき10.2cmを測る。次に、1次口縁部と2次口縁部との接合方法については、167～169に見られるように1次口縁部の上に2次口縁部を接合するものが主体を占める。また、171では、2次口縁部が剥離した1次口縁部端に刻み目を確認しており、1次口縁部と2次口縁部の接合をしやすくするためのものと思われる。以下、地点ごとに様相を記していく。

### (2) 後円部出土の朝顔形円筒・壺形埴輪

後円部で朝顔形円筒・壺形埴輪を出土したのは、T4トレンチ・T5トレンチ：3段目斜面・T6トレンチである。T6トレンチで147・148、T5トレンチ：3段目斜面で149・150・152～155、T4トレンチで151が出土している。以下、各出土トレンチ・地点ごとに記述を

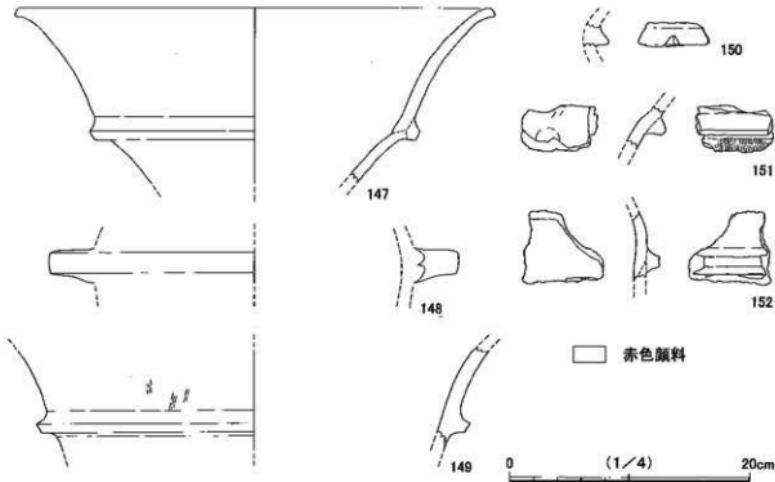


図40 後円部出土朝顔形円筒・壺形埴輪実測図(1)

行う。

T6トレンチでは、147と148が墳丘外に転落した状態で出土した。その出土状況から同一個体の可能性が高い。同一個体とするならば、銅状突帯を含むので、壺形埴輪と判断できる。147は口縁部である。復元口径は39.0cm、2次口縁部高は10.2cmを測る。外面は風化しており調整などはわからない。148は壺形埴輪の銅状突帯である。口径は34.0cmに復元できる。今回、他にも銅状突帯と思われる資料を確認しているが、それらと比べると本資料は突帯の幅が厚いのが特徴的である。外面

は摩耗しており、調整はわからない。147・148も胎土は砂礫を多く含むB類で、色調は浅黄橙色である。赤色顔料の塗布はなされていない。

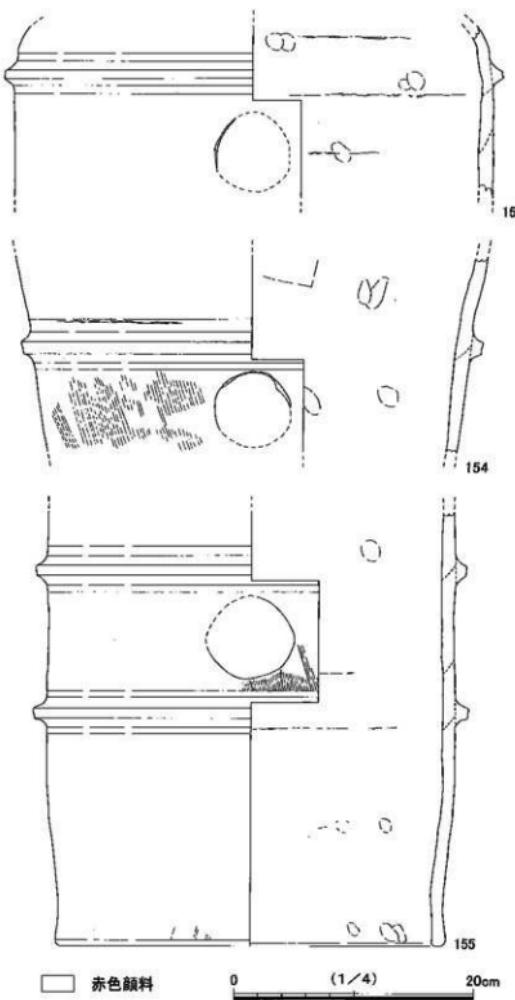


図41 後円部出土朝顔形円筒・壺形埴輪実測図(2)

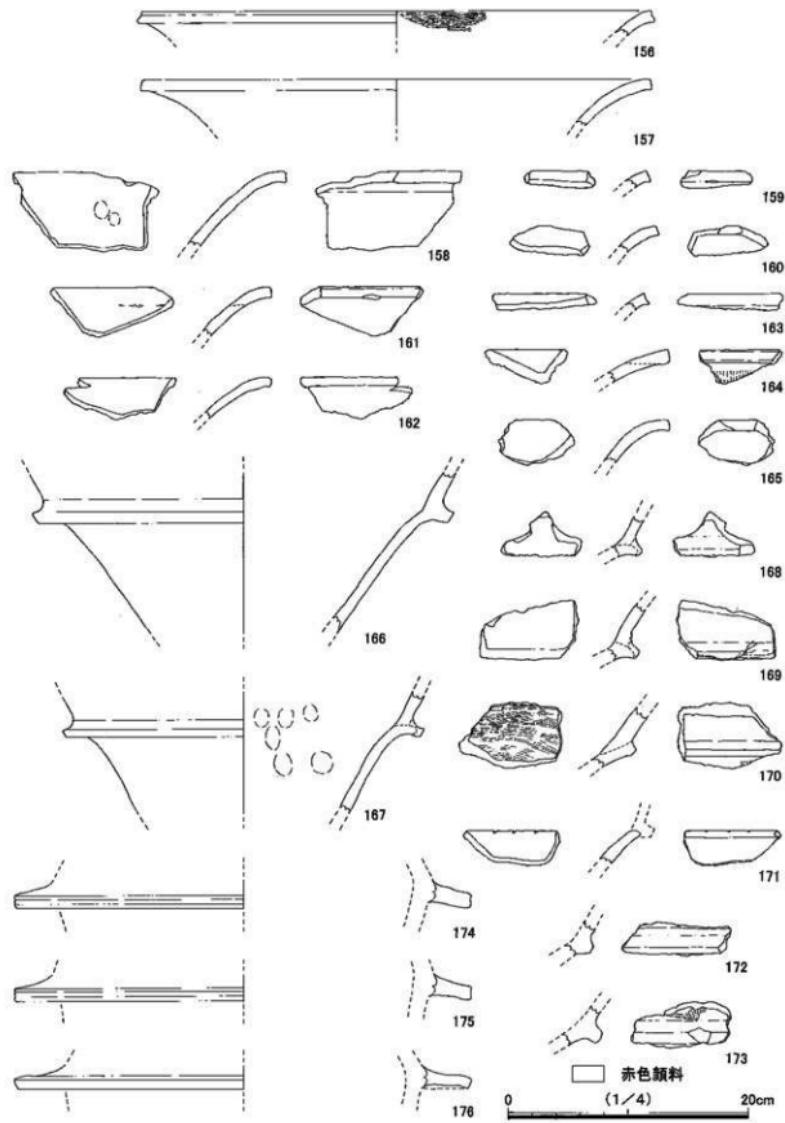


図42 前方部出土朝顔形円筒・壺形埴輪実測図（1）

T5トレンチ：3段目斜面では149・150・152～155が出土した。特に、153～155はT5トレンチ：3段目斜面の上部で倒壊していたもので、同一個体と考えられる。149は1次口縁部の破片で、外面に原体Aのタテハケを施したII群である。復元口径は1次口縁の突帯側面部分で36.0cmを測る。内面は摩耗が激しく、調整などは不明だが、外面には赤色顔料が確認される。150は頸部、152は肩部である。153～155は、いずれもc類の突帯を呈し、胎土はB類で色調は橙色、外面に赤色顔料が1条目突帯より上部に塗布されている。153を除いて、外面に原体Bのタテハケを施すII群である。復元胴径は153で41.1cm、154で38.2cmを測り、155では復元底径32.5cm、底部高19.6cm、復元胴径は2条目突帯部分で35.8cm、1条目突帯部分で36.3cm、突帯間隔11.9cmを測る。153～155全てに円形透孔を確認することができる。153の肩部の形態は、152同様丸く外側に膨らまずにやや直線的な半円形を呈する。

T4トレンチでは、唯一151が確認された。1次口縁部片で、原体Aのタテハケの入るII群である。

### (3) 前方部出土の朝顔形円筒・壺形埴輪

前方部で朝顔形円筒・壺形埴輪を出土したのは、T7トレンチ：1段目テラスと2段目テラス・T8トレンチ：2段目斜面と2段目テラスと3段目斜面・T2トレンチである。T7トレンチ：1段目テラスで出土したのは171・174～176・182である。T7トレンチ：2段目テラスで出土したのは、156・170・172・177・181・183である。T8トレンチ：2段目斜面で出土したのは、165である。T8トレンチ：2段目テラスで出土したのは、157～163・166～169・179である。T8トレンチ：3段目斜面で出土したのは、180である。T2トレンチで出土したのは、164・173・178である。以下、各出土トレンチ・地点ごとに記述する。

T7トレンチ：1段目テラスで出土したのは、171・174～176・182である。171を除いて壺形埴輪と確定できる資料である。171は1次口縁部である。2次口縁部が剥離しており、剥離面に3条の刻み目が確認できる。この刻み目は2次口縁との接合強化を意図したものであろう。174～176は壺形埴輪の鋲状突帯である。いずれもヨコナデが施される点、砂礫の混じるB類の胎土である点、法量的に類似する点などから、同一個体の可能性が高い。182は、壺形埴輪の底部から鋲状突帯までの資料である。鋲状突帯と胴部は接合しないが、出土状況より同一個体であると判断したので復元的に図化した。底部は3／4強残存しており、底径は38.5cmを測る。外面には原体B類のタテハケを、内面は底部からタテ方向の強いユビナデを施し、底部から10.0cm付近でナデの方向が左上がりのナナメ方向へ変化している。

胴部には直径5.8cm程度の円形透孔を穿つ。胎土は砂礫を含むB類で、灰黄褐色を呈す。鋲状突帯の形状や胎土などからみて、174～176と同一個体の可能性がある。

T7トレンチ：2段目テラスで出土したのは、156・170・172・177・181・183である。156は口縁部である。復元口径が42.0cmを測り、外面に原体Aのタテハケ、内面に原体Bのヨコハケを施す。170・172は1次口縁部である。177は頸部で、外面ヨコナデされており、

復元した頸部径は17.4cmを測る。181は壺形埴輪の鉢状突帯から肩部にかけての資料である。内外面とも摩耗が激しく調整などは不明だが、粘土紐の接合痕は確認できる。胎土は砂礫を多く含むB類で褐色である。肩部の形態はやや直線的である。183も鉢状突帯から胴部の資料で、鉢状突帯部外径は36.1cmに復元できる。外面には板ナデ・ユビナデ、内面にはナデが施される。胴部には円形の透孔が穿たれる。胎土はB類で、にぶい黄橙色を呈す。

T8トレンチ：2段目斜面で出土したのは165で、口縁部資料である。2段目テラスからの可能性の高い資料である。

T8トレンチ：2段目テラスで出土したのは157～163・166～169・179である。157～163は口縁部である。いずれも外反し、端部に面をもつタイプで、摩耗のため調整がわからない。162を除いて、いずれも内外面にはヨコナデが施されている。157は復元口径42.0cmを測る。166～169は1次口縁部である。168は摩耗のため調整不明だがそれ以外のものは外面ナデを施す。1次口縁部の復元径は166で35.0cm、167で30.0cmを測る。また、166と167は外面に赤色顔料を確認することができる。179は朝顔形埴輪の肩部である。やや外側に丸く膨らむ形態をしており、内外面ナデ調整を行う。復元胴径は突帯側面部部分で32.0cmを測る。

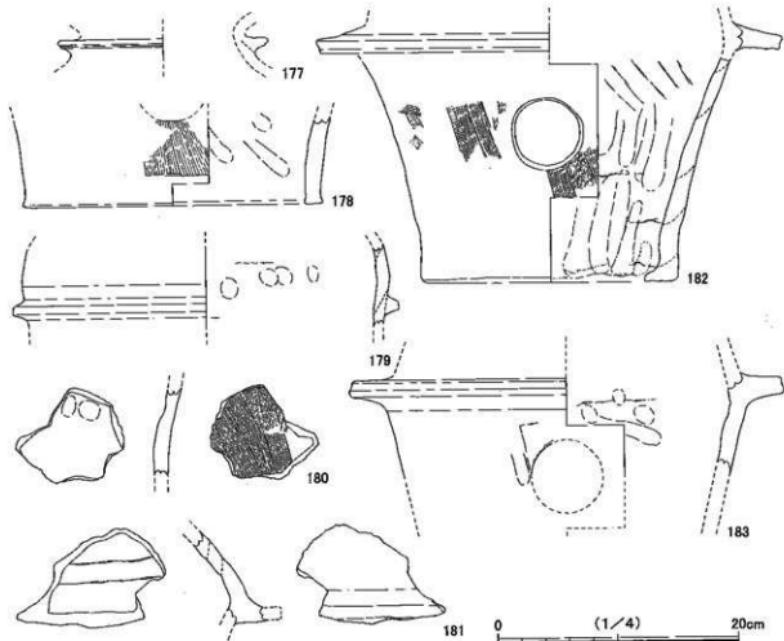


図43 前方部出土朝顔形円筒・壺形埴輪実測図（2）

T2トレンチで出土したのは164・173・178である。164は口縁部、173は1次口縁部、178は底部である。178は底部の資料だが、円形（半円形）透孔を確認できる。今回報告する円筒埴輪には、底部に透孔を穿つ例は認められず、壺形埴輪のみ確認していることから、本資料も壺形埴輪の底部として報告する。復元底径は25.0cmを測り、外面に原体Aのタテハケ、内面にナナメ方向のユビナデが施されている。胎土は砂礫を含むB類で、浅黄橙色である。

### 形象埴輪

形象埴輪としては家形埴輪、蓋形埴輪、叔形埴輪を確認できた。すべて1点ずつしか出土していない。出土位置については、家形埴輪がT8トレンチ：3段目斜面から、蓋形埴輪がT7トレンチ：1段目テラスから、叔形埴輪がT8トレンチ：2段目テラスから出土している。いずれも表土・流土からの出土であり、原位置は確認できないがいずれも前方部のトレンチからの出土である。184は、家形埴輪の軸部と屋根の接合部である。全面的に摩耗が激しく、調整は不明である。胎土はB類で、色調はにぶい橙色を呈す。185は蓋形埴輪の飾り板受け部の破片である。摩耗のため調整はよくわからないが、内面には指頭圧痕を確認することができる。胎土はB類で、色調は浅黄橙色を呈す。186は叔形埴輪である。矢筒部を縦取る部位の破片で、梯子状の刻みが入っている。腐葉土直下の表土からの出土で、風化による摩耗が激しいため調整は確認できない。胎土はB類で、0.1~0.3cm程の砂礫を含み、色調は灰黄褐色を呈する。187・188は、器種不明埴輪である。187は、T7トレンチ：墳裾部

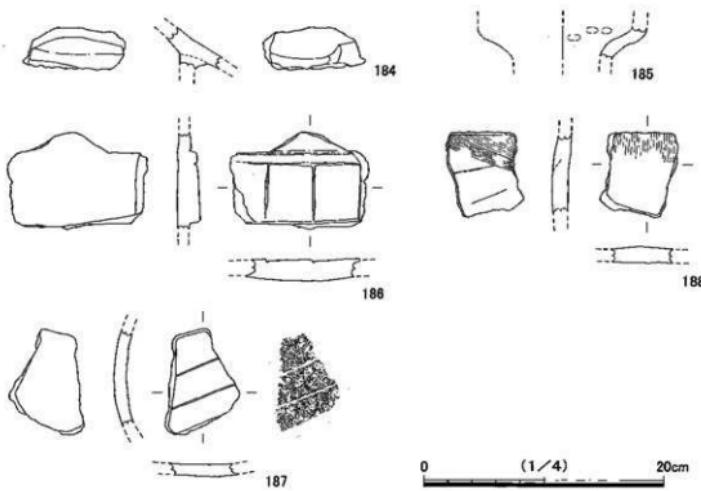


図44 形象埴輪実測図

からの出土である。ゆるやかにカーブし、2本の線刻が施されている。摩耗が激しいため調整は不明である。胎土はB類で、色調はにぶい黄橙色を呈す。188は、T8トレンチ：墳頂平坦面からの出土である。残存部は6.5cm×5.5cmを測り、器壁の厚さは1.3cmを測る。内外面を判別しがたいが、いずれの面にもハケが認められる。また、粘土縫の接合痕も確認できる。胎土は精緻なA類で、色調は浅黄橙色を呈す。

### 石製品

これまでの4次にわたる発掘調査の出土品ではないが、彦根市教育委員会所蔵品の中に、緑色凝灰岩製の車輪石がある。この車輪石は、荒神山山麓に位置する延寿寺より市教育委員会に寄贈をうけたもので、荒神山出土と伝わるものである。本資料が、その形態的特徴より荒神山古墳の時期とほぼ一致すると考えられるため、ここで資料としてとりあげておく。

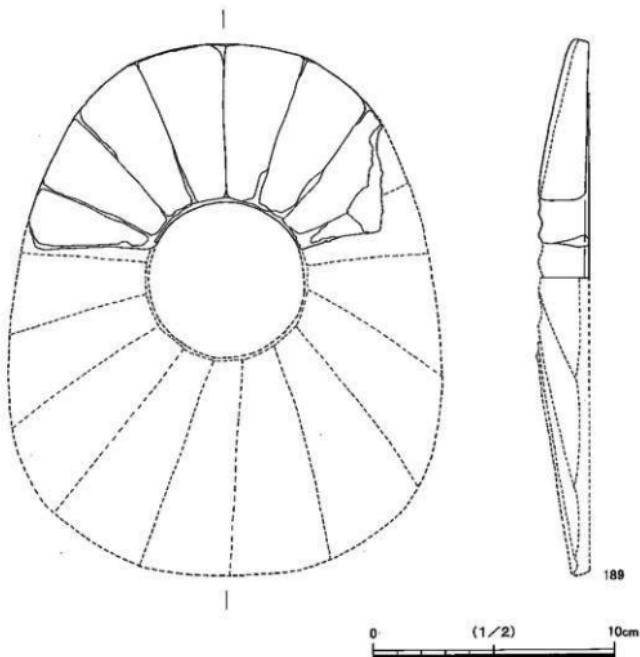


図45 車輪石実測図

### (1) 車輪石

緑色凝灰岩製の車輪石の断片である。色調は緑灰色を呈する。資料は車輪石の上半部にあたると考えられるが、形態を復元すると輪郭卵形で内孔が円形となる。残存部の法量は、長さが8.4cm、幅が14.5cm、最大環体幅は6.4cm、環体高2.0cm。最大厚1.9cmを測り、重さは165.0gである。環体斜面への彫刻は無刻の凹帯で、断面形は底面が中心に向かってわずかに上がり底となっている。

## まとめ

ここまで、4次にわたる荒神山古墳の出土遺物について報告を行ってきた。ここでは、主に埴輪について整理を行い、まとめとしたい。

### (1) 出土埴輪と分布

荒神山古墳では、4次にわたる調査で、円筒埴輪（普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪）・壺形埴輪・形象埴輪（家形埴輪・蓋形埴輪・獣形埴輪・不明埴輪）の出土を確認した。楕円筒埴輪の可能性のある資料を確認しているものの、全周復元できる資料が乏しいために、現段階ではその存在を確言することができない。また、鱗付円筒埴輪に関しても確実な資料を見出しえなかつた。

さて、普通円筒埴輪については、その外面調整の違いにより、大きく2群に分類することができた。繰り返しとなるが改めて整理しておく。I群は、外面調整ナデのもので、内面調整も同じくナデ調整が施され、口縁部の形態は口縁端部で屈曲するA類を主体とする。突帯の形態は、b・c類を主体としながらa・e・fも存在する。突帯間隔設定技法はB手法のみ確認しており、透孔の形状は方形を主体とする。胎土は、やや粗雑な印象を受けるB類が主体的である。II群は、外面調整タテ・ナナメハケのもので、内面調整は、ナデを主体とするものの、ナナメ・ヨコハケも施される。口縁形態は、A類・B類・C類・D類と様々な形態のものがある。突帯に関しても、c類が主体的ではあるが、a類・b類・e類なども少なからず確認でき、様々な形態があるといえる。突帯間隔設定技法に関してはA手法のみ確認しており、透孔は円形を主体としつつ、方形や逆三角形、半円形なども確認されている。胎土は、A類・B類とも確認でき、どちらが主体的とは言えない。赤色顔料の残存割合がI群に比べて高いようである。朝顔形円筒埴輪をこの分類にあてはめるとII群に属すようである。

次に、出土位置、分布について述べる。円筒埴輪については、設定したほとんどすべてのトレチで出土を確認した。その中でも、T5トレチ、T7トレチ、T8トレチでは、各段テラスを中心にまとまった量の円筒埴輪が出土した。原位置をとどめる埴輪はT5トレチ：2段目テラス、T7トレチ：1段目テラス、T8トレチ：1段目テラス、T8トレチ：2段目テラスの4箇所で、計7個体を確認している。さらに、そのうち2箇所で埴輪列を確認している。T5トレチ：2段目テラスでは心々距離1.2mを測る2個体の埴輪

列を、T 8 トレンチ：2段目テラスでは心々距離0.6mを測る3個体の埴輪列を確認している。また、各トレンチの墳頂部、墳裾部では原位置を留める埴輪を確認していないが、T 5 トレンチ・T 7 トレンチ・T 8 トレンチの各トレンチの3段目斜面よりまとまった量の埴輪片が出土していることを勘案すれば、後円部・前方部とともに墳頂部にも埴輪列が囲繞した可能性は高いと考えられる。逆に、墳裾部付近では、各トレンチとも埴輪の出土量がそれほど多くないことから、墳裾に埴輪列はめぐっていなかったか、めぐっていたとしても心々距離が長く樹立本数が少なかった可能性が高い。

以上より、荒神山古墳では、後円部、前方部とともに、墳丘の墳頂部、2段目テラス、1段目テラスで埴輪列が巡っていたと考えられる。今のところ、近江地域で埴輪の多量配列が確認できる最古の前方後円墳である。では、それら埴輪列の配置間隔であるが、墳頂部では、原位置を留めた埴輪を確認していないため、その配置間隔については不明である。2段目テラスでは、後円部のT 5 トレンチ：2段目テラスで心々距離1.2mの埴輪列を、前方部のT 8 トレンチ：2段目テラスで心々距離0.6mの埴輪列を確認しており、後円部と前方部で埴輪列の配置間隔の粗密があることが明らかとなった。1段目テラスでは、後円部で原位置埴輪を確認しておらず、その配置間隔は不明である。前方部でも、T 7 トレンチ、T 8 トレンチで原位置埴輪を確認しているものの、埴輪列は確認していないためその配置間隔については不明である。しかし、トレンチ幅は1.1mであったから、もし心々距離が0.6mで配置されていればもう1個体が確認できたはずである。よって、前方部のT 7 トレンチ、T 8 トレンチの1段目テラスでは、少なくとも心々距離0.6m以上で配置されていたと言えそうである。このように、荒神山古墳では、埴輪の多量配列が実現していたことは間違いないけれども、その配置間隔は一定ではなく、多様な様相を示す。同じ前方部でも1段目テラスと2段目テラスで配置間隔が異なることより、後円部に比べ湖岸から見えやすい前方部側の配置間隔を密にしたとは単純に結論づけられるわけではない。

次に、朝顔形円筒・壺形埴輪の出土位置について述べる。朝顔形円筒・壺形埴輪が出土した位置は、T 4 トレンチ、T 5 トレンチ：3段目斜面、T 6 トレンチ、T 7 トレンチ：1段目テラスと2段目テラス、T 8 トレンチ：2段目斜面と2段目テラス、T 2 トレンチである。朝顔形円筒埴輪と壺形埴輪は破片資料では器種識別が困難であるが、朝顔形円筒埴輪ならばその肩部破片が、壺形埴輪ならばその鉢状突帯の破片が出土すれば、器種を確定することができる。上述の出土位置のうち、それぞれ器種を識別できる資料に限ってみると、朝顔形円筒埴輪の肩部資料はT 5 トレンチ：3段目斜面、T 8 トレンチ：2段目斜面で、壺形埴輪の鉢状突帯資料はT 6 トレンチ、T 7 トレンチ：1段目テラスと2段目テラス、T 2 トレンチで出土している。つまり、朝顔形円筒埴輪を確定できる資料と壺形埴輪を確定できる資料が同じテラスからは出土していないのである。以上から、朝顔形円筒埴輪の配置と壺形埴輪の配置には使い分けがなされていたことが分かる。

最後に、形象埴輪の出土位置については、家形埴輪がT 8 トレンチ：3段目斜面から、蓋

形埴輪がT7トレンチ：1段目テラスから、叢形埴輪がT8トレンチ：2段目テラスから出土している。いずれも表土・流土からの出土ということもあって、本来の配置場所はわからないが、前方部での出土ということだけは確かである。

### （2）円筒埴輪の樹立方法

4次わたる調査で、4箇所計7個体の原位置埴輪を出土しており、それらによって円筒埴輪の樹立方法についての情報を得た。いずれの原位置をとどめる埴輪でも、掘方はみとめられず、整地していく段階で埴輪を樹立したようである。そして、その整地の段階で、埴輪の高さ調節をおこなったことがT8トレンチ：2段目テラスの調査によって明らかになった。このテラスでは、3個体のうち両サイドの埴輪が、同じ高さで樹立される一方、中央の埴輪は1層整地土を入れ、両サイドより高めに樹立されている。この埴輪樹立の高さ調節が何に起因するものであるか。おそらく、器種の違いによる調節と思われるが、現段階では、どの埴輪がどの器種であるか明言できない。ちなみに、これら3個体の底部高は、前方部端より、99：21.0cm、114：20.8cm、119：16.9cmが底部高である。99と114は同じ底部高ではあるけれども、樹立時の底面高は異なることになる。それゆえ、底部高からだけでは、この高さ調節の違いについて十分に説明しがたい。いずれにせよ、荒神山古墳では、埴輪樹立とその高さ調節にあたり、掘方や、底部打ち欠きは確認されておらず、テラス整地の段階で調節されている。このような埴輪樹立時の高さ調節の理由については、器種の違いによって底面高を調節したと考えておくのが妥当であろう。しかし、具体的な器種の想定をなしがたい現状では試案の域をでるものではない。

### （3）編年的位置づけ

最後に、荒神山古墳の埴輪の編年的位置づけを行う。位置づけに際しては、川西氏の編年案を参考とする。まず、有黒斑であることから、Ⅲ期以前と考えられる。次に刺突による突帯間隔設定技法はⅡ期以前に主体的に行われる技法である。外面調整が1次タテハケ調整のみで、2次調整を欠くものが主体的であることも、B種ヨコハケ導入以前の様相として違和感はなさそうである。さらに、鈎状突帯を有す壺形埴輪の存在に注目する。この種の壺形埴輪はⅡ期に出現し、Ⅲ期に盛行する器種であり、今回の資料群がⅠ期まで遡上しがたいことの証左になると考える。以上より、今回の資料群の所属時期は、概ね川西編年のⅡ期に属し、古墳時代の前期末（4世紀末）に位置づけられる。

#### 【引用・参考文献】

- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学界  
辻川哲朗 2003「近江地域の円筒埴輪編年」『埴輪論叢』第4号、埴輪検討会  
辻川哲朗 2003「突帯—突帯間隔設定技法を中心として—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』、埋蔵文化財研究会

表4-1 普通円筒埴輪計測表

番号	種類	部位	出力ドレンジ	区	面積	残存率	形態	口縁		腹部		底部		赤色顔料	透孔	騎士	色調	焼成	外面調整	内部調整	分類
								直径/高さ	側面開口法	直徑/穴開き	側面開口法	直徑/高さ	側面開口法	直徑/高さ							
1	22	17	胴部	T5	2段目 テラス	反転	2.0/12	—	—	c	A	37.3/—	—	—	—	A	明黄褐色	並	タテハケ(A)	タテユビナデ	II
2	22	17	底部	T5	2段目 テラス	反転	1.9/12	—	—	c	A	37.4/—	34.0/18.9	—	—	A	明黄褐色	並	タテハケ(A)	ナナメユビナデ	II
3	22	17	胴部	T5	2段目 テラス	鏡片	0.8/12	—	—	b	—	(26.0)/—	—	外観	—	A	明黄褐色	並	磨耗	ナダ	—
4	22	17	胴部	T5	2段目 テラス	鏡片	0.8/12	—	—	A	(34.0)/—	—	外観	圓形	A	明黄褐色	並	ナナメハケ(A)	ヨコハケ(A)	II	
5	22	17	底部	T5	2段目 テラス	鏡片	不明	—	—	—	—	—	—	—	A	に古い黃褐色	並	ナダ	ナダ	—	
6	22	17	底部	T5	2段目 テラス	鏡片	0.6/12	—	—	—	—	(28.0)/—	—	—	A	明黄褐色	並	ナダ	ナダ	—	
7	22	17	底部	T5	2段目 テラス	鏡片	0.5/12	—	—	—	—	(32.0)/—	—	—	A	明黄褐色	並	ナナメハケ(A)	ユビナデ	II	
8	22	16	底部	T5	2段目 テラス	反転	3.5/12	—	—	—	—	32.5/—	—	—	A	明黄褐色	並	タテハケ(A)	タテユビナデ	II	
9	22	17	底部	T5	2段目 テラス	反転	1.7/12	—	—	—	—	27.5/—	—	—	A	に古い黃褐色	並	タテハケ(A)	ユビナデ	II	
10	22	17	底部	T5	2段目 テラス	反転	2.3/12	—	—	—	—	29.0/—	—	—	A	に古い黃褐色	並	ナナメハケ(H)	ナダ	II	
11	22	17	底部	T5	2段目 テラス	反転	1.8/12	—	—	—	—	28.0/—	—	—	A	明黄褐色	並	ナナメハケ(G)	ユビナデ	II	
12	22	16	底部	T5	2段目 テラス	反転	5.0/12	—	—	—	—	36.0/—	外縫隙れ	—	A	明黄褐色	並	タテハケ・ナナメハケ(A)	タテユビナデ	II	
13	22	17	底部	T5	2段目 テラス	反転	1.8/12	—	—	—	—	22.0/—	—	—	A	に古い黃褐色	並	ナナメハケ(B)	ナダ	II	
14	23	17	胴部	T5	2段目 テラス (底部 銀張)	反転	1.2/12	—	c	—	—	34.0/—	—	—	円形 (半円形)	B	明黄褐色	並	タテハケ(B)	タテユビナデ	II
15	23	16	底部	T5	2段目 テラス (底部 銀張)	反転	7.4/12	—	—	—	—	28.8/—	外縫隙れ	—	A	に古い黃褐色	並	タテハケ(B)	タテユビナデ	II	
16	23	17	底部	T5	2段目 テラス (底部 銀張)	鏡片	0.5/12	—	—	—	—	(28.0)/—	—	—	A	に古い黃褐色	並	ナダ	ナダ	—	
17	24	17	胴部	T5	3段目 側面	反転	2.0/12	—	c	—	—	40.0/—	—	外観	—	A	明黄褐色	並	タテハケ(A)	ナダ	II
18	24	18	胴部	T5	3段目 側面	反転	2.2/12	—	c	—	—	36.0/—	—	外観	—	B	明黄褐色	並	磨耗	磨耗	—
19	24	18	胴部	T5	3段目 側面	反転	1.2/12	—	c	—	—	34.8/—	—	外観	圓形	B	明黄褐色	並	タテハケ(A)	磨耗	II
20	24	18	胴部	T5	3段目 側面	反転	1.8/12	—	c	A	—	35.6/—	—	外観	—	B	明黄褐色	並	タテハケ(A)	磨耗	II
21	24	18	胴部	T5	3段目 側面	反転	1.7/12	—	c	—	—	34.2/—	—	外観	—	B	明黄褐色	並	タテハケ(A)	ナダ	II
22	24	18	胴部	T5	3段目 側面	鏡片	—	—	f	—	—	—	—	—	A	に古い黃褐色	並	磨耗	磨耗	—	
23	24	18	底部	T5	3段目 側面	鏡片	—	—	—	—	—	—	—	—	A	明黄褐色	並	タテハケ(A)	ナダ	II	
24	24	18	底部	T5	3段目 側面	鏡片	0.7/12	—	—	—	—	(26.0)/—	—	—	B	明黄褐色	並	磨耗	タテユビナデ	—	
25	24	18	底部	T5	3段目 側面	反転	1.2/12	—	—	—	—	26.0/—	—	—	I	明黄褐色	並	タテハケ(A)	磨耗	II	
26	25	18	胴部	T4	—	鏡片	—	—	c	—	—	—	—	—	B	明黄褐色	不良	磨耗	磨耗	—	
27	25	18	胴部	T4	—	鏡片	0.5/12	—	c	—	(34.0)/—	—	外観	—	A	に古い黃褐色	並	タテハケ(A)	磨耗	II	
28	25	18	胴部	T4	—	鏡片	0.6/12	—	A	(32.0)/—	—	—	—	A	明黄褐色	並	タテハケ(B)	ユビナデ	II		
29	25	18	胴部	T4	—	鏡片	0.8/12	—	c	(32.0)/—	—	—	—	万形	A	明黄褐色	並	磨耗	ユビナデ	—	
30	25	18	胴部	T4	—	鏡片	0.5/12	—	c	(34.0)/—	—	—	—	B	明黄褐色	並	ナナメハケ(A)	ナダ	II		

( )は残存率10%以下の資料の復元数値、—は該当箇所が残存していないか計測・判別不能なことを示す。

表4-2 普通円筒埴輪計測表

番号	種類	形状	出土地点	区	面積	残存率	高さ	直径/高さ	表面	表面調査法	頭部		底部		色調	焼成	外表面	内表面	分類
											横幅	垂直度	横幅	垂直度					
31	26	19	円錐	表層地点A	—	反転	1.7/12	A	40.3/—	—	—	—	—	—	B	褐色	ナナメハケ(B)	ナナメハケ(B), 口縁部付近ヨコナダ	II
32	26	18	円錐	表層地点A	—	破片	0.5/12	A	(40.0)/—	—	—	—	—	—	A	褐色	ナナメハケ(B), ナナメハケ(B), 口縁部付近ヨコナダ	ナナメハケ(B), 口縁部付近ヨコナダ	II
33	26	18	円錐	表層地点A	—	反転	1.5/12	E	34.9/—	—	—	—	—	—	A	浅黄褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	—
34	26	18	円錐	表層地点A	—	破片	0.3/12	B	(42.4)/0.8	a	—	(43.0)/—	—	内外面	A	浅黄褐色	タテハケ(B), 口縁部付近ヨコナダ	タテハケ(B), 口縁部付近ヨコナダ	II
35	26	18	円錐	表層地点A	—	破片	0.2/12	B	(27.8)/7.6	a	—	(28.0)/—	—	内外面	A	浅黄褐色	タテハケ(B), ヨコナダ	ナナメハケ(C), ヨコナダ	III
36	26	18	円錐	表層地点A	—	破片	0.6/12	E	(32.0)/—	—	—	—	—	内外面	A	浅黄褐色	ヨコナダ	ヨコナダ	—
37	26	18	胴部	表層地点A	—	破片	—	—	—	c	—	—	—	方型(底二角形半円形)	A	褐色	ナダ	ナダ	—
38	26	18	胴部	表層地点A	—	反転	1.2/12	—	—	g	—	33.2/—	—	外側	A	浅黄褐色	タテハケ(B)	ヨコハケ(B)	II
39	26	18	胴部	表層地点A	—	反転	1.3/12	—	—	a	—	34.0/—	—	外面	A	浅黄褐色	タテハケ(B)	タテユビナダ	II
40	26	18	胴部	表層地点A	—	反転	1.5/12	—	—	a	—	37.2/—	—	外面	A	浅黄褐色	ヨコハケ(B)	—	—
41	26	18	胴部	表層地点A	—	破片	1.0/12	—	—	a	—	(36.0)/—	—	外側	A	浅黄褐色	タテハケ(B)	タテユビナダ	II
42	26	19	胴部	表層地点A	—	破片	0.6/12	—	—	a	—	(40.0)/—	—	外側	A	浅黄褐色	並	ナナメヨコハケ(B)	—
43	26	19	胴部	表層地点A	—	破片	1.1/12	—	—	u	—	(30.0)/—	—	外側	A	浅黄褐色	タテハケ(B)	ヨコハケ(C)	II
44	26	19	胴部	表層地点A	—	破片	0.6/12	—	—	a	—	(36.0)/—	—	外側	A	浅黄褐色	タテハケ(B)	タテユビナダ	II
45	27	19	胴部	表層地点A	—	反転	1.3/12	—	—	c	—	44.0/—	—	逆三角形	H	褐色	タテハケ(A)	ヨコユビナダ, ヨコハケ(B)	II
46	27	19	胴部	表層地点A	—	反転	1.6/12	—	—	c	A	27.7/—	—	—	B	褐色	タテハケ(A)	ユビナダ	II
47	27	19	胴部	表層地点A	—	反転	2.0/12	—	—	a	—	26.8/—	—	内外面	A	浅黄褐色	タテハケ(C)	ヨコハケ(C)	II
48	27	19	胴部	表層地点A	—	反転	1.7/12	—	—	u	—	30.0/—	—	外面	A	浅黄褐色	タテハケ(B)	ヨコハケ(B), タテユビナダ	II
49	27	19	胴部	表層地点A	—	破片	1.1/12	—	—	a	—	(38.6)/—	—	外側	A	浅黄褐色	ナダ	タテユビナダ	I
50	27	19	胴部	表層地点A	—	破片	0.8/12	—	—	c	—	(46.0)/—	—	—	B	褐色	タテハケ(A)	ナナメハケ(B)	II

( ) は残存率10%以下の資料の仮元数値、—は該当箇所が残存していないか断滴・判別不能なことを示す。

表 4-3 普通円筒埴輪計測表

番号	種別	寸法	部位	出力レンジ	区	剖面	残存率	形態	直径/高さ	内部構造	直徑/突起間隔	直徑/高さ	水色顔料	通孔	胎土	色調	焼成	外側調整	内側調整	分類	
口縁	腰部	底部																			
51	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.4/12	A	37.3/-	—	—	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	ナデ、口縁周囲 付近ヨコナダ	ナデ、口縁周囲 付近ヨコナダ	I	
52	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	0.6/12	A	(36.0)/-	—	—	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	ナデ、口縁周囲 付近ヨコナダ	ナデ、口縁周囲 付近ヨコナダ	I	
53	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	0.6/12	D	(46.0)/-	—	—	—	—	—	B	に高い 青紫色	不 透光	透光	透光	—	
54	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	0.7/12	D	(38.0)/-	—	—	—	—	—	B	浅青紫色	並	ナデ	透光	—	
55	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	2.2/12	—	c	34.0/-	—	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	タテハケ (B)	透光	II	
56	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.3/12	—	c	35.0/-	—	—	—	—	B	淡青紫色	並	ナデ	ナデ	I	
57	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	反転	1.5/12	—	c	36.0/-	—	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	透光	ナデ	—	
58	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	反転	1.2/12	—	c	38.0/-	—	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	ナデ	ナデ	I	
59	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	2.0/12	—	c	B	40.0/-	—	—	—	方	形 (追 加、角形、内 形)	並	タデユビナダ、 ヨコナダ	タデユビナダ、 ヨコナダ	I	
60	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	0.4/12	—	b	—	(40.0)/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	ヨコナダ	ヨコハケ (A)	—	
61	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	0.8/12	—	c	—	(28.0)/-	—	—	—	方形	B	に高い 青紫色	並	タテハケ (A)	ヨコハケ (A)	II
62	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	—	—	c	—	—	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	透光	透光	—	
63	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	—	—	b	—	—	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	ナデ	ナデ	I	
64	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	0.5/12	—	c	—	(28.0)/-	—	—	—	JS	に高い 青紫色	並	タテハケ (B)	ナデ	II	
65	28	20	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	—	—	c	—	—	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	ナデ	ナデ	I	
66	29	20	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.2/12	—	d	—	34.0/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	透光	透光	—	
67	29	20	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.7/12	—	b	—	33.0/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	タテハケ (A)、 ヨコナダ	ヨコナダ、 ナデ	II	
68	29	20	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.8/12	—	c	B	33.0/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	ナデ	ユビナダ	II	
69	29	20	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	—	—	c	—	—	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	ナデ	ユビナダ	I	
70	29	20	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	2.1/12	—	c	—	32.0/-	—	—	—	B	低い 褐色	不 透光	タテハケ (B)	ナデ	II	
71	29	21	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	0.6/12	—	c	—	(44.0)/-	—	—	—	方形	B	に高い 青紫色	並	ナデ	ナデ	I
72	29	21	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	1.1/12	—	c	—	(32.0)/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	不 透光	透光	透光	—	
73	29	21	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	0.9/12	—	c	—	(34.0)/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	不 透光	透光	ナデ	—	
74	29	21	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	1.0/12	—	c	—	(33.0)/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	ナデ	ナデ	I	
75	29	21	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.5/12	—	—	—	—	27.0/-	—	—	A	褐色	並	タテハケ (B)	ナデ	II	
76	29	21	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	3.3/12	—	—	—	—	25.0/-	—	—	A	褐色	並	タテハケ (B)	ユビナダ	II	
77	30	21	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.3/12	—	c	—	32.0/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	透光	ヨコハケ (A)、 ユビナダ	—	
78	30	21	胴部	T7	1段目 テラス	鏡片	1.1/12	—	c	—	(36.0)/-	—	—	—	方形	B	に高い 青紫色	並	ナデ	ナデ	I
79	30	21	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.7/12	—	d	—	(30.0)/-	—	—	—	A	褐色	並	透光	ヨコハケナダ、 ユビナダ	—	
80	30	21	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.9/12	—	c	—	30.0/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	ナデ	タテユビナダ	I	
81	30	21	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.4/12	—	e	—	33.0/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	タテハケ (B)	ユビナダ	II	
82	30	21	胴部	T7	1段目 テラス	瓦軒	1.3/12	—	b	—	28.0/-	—	—	—	B	に高い 青紫色	並	タテハケ (B)	ユビナダ	II	

( ) は残存率10%以下の資料の復元数値、—は該当箇所が残存していないか計測・判別不能などを示す。

表 4-4 普通凹槽指輪計測表

( ) は残存率10%以下の資料の復元数値、一は該当箇所が残存していないか計測・判別不能なことを示す。

表 4-5 普通円筒埴輪計測表

番号	博団	管部	壁部	底部	上縁		側部		底面		外観調整	内観調整	分類						
					区	表面	残存率	形態	直径/高さ	直角/弯曲	直径/高さ	赤色顔料	透孔	胎土	色調	造形			
108	33	22	胴部 T 8	2段目 テラス	破片	0.6/12	—	—	b — (30.0) / —	—	外観	—	A	にぶい 黄褐色	並	ナデ	ナデ	—	
109	31	22	胴部 T 8	2段目 テラス	瓦軒	4.2/12	—	—	e A 40.2 / —	—	半円形	A	にぶい 褐色	並	ナナメハケ (B)	スピナデ	II		
110	34	22	胴部 T 8	2段目 テラス	瓦軒	4.4/12	—	—	c A 37.8 / —	—	—	A	にぶい 黄褐色	並	タテハケ (B)	スピナデ	II		
111	34	22	胴部 T 8	2段目 テラス	瓦片	0.4/12	—	—	c B (36.0) / —	—	—	B	にぶい 褐色	並	ナデ	スピナデ	I		
112	34	22	胴部 T 8	2段目 テラス	破片	0.6/12	—	—	d — (34.0) / —	—	—	A	僅少	並	ナナメ・ヨコハケ (B)	ナダ	II		
113	34	22	胴部 T 8	2段目 テラス	破片	0.6/12	—	—	f — (32.0) / —	—	—	A	にぶい 褐色	並	ナデ	黒純	I		
114	34	16	底部 T 8	2段目 テラス 埴輪列 中央	瓦軒	0.0/12	—	—	e A 33.2 / —	26.3/26.8	—	—	A	褐色	並	タテハケ (B)	ナデ	II	
115	34	22	胴部 T 8	2段目 テラス	反転	1.2/12	—	—	e — 24.0 / —	—	—	方形	B	にぶい 黄褐色	並	ナナメビナデ	I		
116	34	23	胴部 T 8	2段目 テラス	瓦軒	1.4/12	—	—	B — 24.0 / —	—	—	方形	A	にぶい 褐色	並	タテユビナデ	I		
117	34	23	胴部 T 8	2段目 テラス	反転	1.2/12	—	—	b B 29.2 / —	—	—	A	にぶい 黄色褐色	並	ナデ	ナデ	I		
118	34	23	胴部 T 8	2段目 テラス	瓦軒	1.5/12	—	—	b — 29.2 / —	—	—	方形 (通三 角形・ 弓形 形)	A	にぶい 青色褐色	並	ヨコ板ナデ、ユ ビナデ	I		
119	35	16	底部 T 8	2段目 テラス 埴輪列 底面	破片	12.0/12	—	c (2) e (2) f (2)	B (2) e (2) f (2)	36.1 (2 G.) 33.7 (1番 B.) 12.8	最大27.3, 最小22.7/ 16.9	—	方形	B	にぶい 褐色	並	ナデ	スピナデ	I
120	35	22	胴部 T 8	2段目 テラス	破片	—	—	c B	—	—	—	方形	B	にぶい 褐色	並	ナデ	ナデ	—	
121	35	22	胴部 T 8	2段目 テラス	破片	0.6/12	—	c — (43.0) / —	—	—	—	B	にぶい 褐色	並	黒純	黒純	—		
122	36	23	胴部 T 8	2段目 テラス	破片	1.1/12	—	—	(30.0) / —	—	—	方形	A	浅黃褐色	並	スピナデ	I		
123	35	23	胴部 T 8	2段目 テラス	破片	0.7/12	—	f — (40.0) / —	—	—	—	A	にぶい 褐色	並	ナデ	スピナデ	I		
124	35	23	胴部 T 8	2段目 テラス	破片	0.8/12	—	b — (32.0) / —	—	—	—	A	にぶい 褐色	並	ヨコ板ナデ、ユ ビナデ	I			
125	36	23	D槽部 T 8	1段目 テラス	反転	1.2/12	D	29.6 / —	—	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	ヨコナデ	黒純	—		
126	36	17	底部 T 8	1段目 テラス	破片	12.0/12	—	c — 32.4 / —	最大26.8, 最小23.3/ 19.1	—	—	H	にぶい 褐色	並	タテハケ (B)	タテユビナデ	II		
127	36	23	胴部 T 8	1段目 テラス	反転	1.8/12	—	b — 25.9 / —	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	タテハケ (C)	スピナデ	II			
128	36	23	胴部 T 8	1段目 テラス	反転	2.6/12	—	—	33.0 / —	—	—	半円形 (円形)	B	にぶい 黄褐色	並	ナナメハケ (C)	スピナデ	II	
129	36	23	胴部 T 8	1段目 テラス	瓦軒	1.6/12	—	b — 31.3 / —	—	—	D	にぶい 黄褐色	並	タテハケ、ナナ メハケ (C)	ナデ	II			
130	37	23	L槽部 T 8	2段目 前面	破片	0.7/12	C	(34.0) / —	—	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	タテメハケ (B)	ナダ	II		
131	37	23	L槽部 T 8	墳頂 平坦面	破片	0.6/12	A	(44.0) / —	—	—	—	内円面	—	A	浅黃褐色	並	ナナメハケ(B)、 ナナメ・口構部 付近ヨコナデ	—	
132	37	23	胴部 T 8	2段目 前面	破片	1.0/12	—	c B (42.0) / —	—	—	—	方形	B	にぶい 黄褐色	並	ナデ	黒純	I	
133	37	23	胴部 T 8	3段目 前面	破片	0.6/12	—	b — (39.0) / —	—	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	ヨコナデ	ナダ	—		
134	37	23	胴部 T 8	消音 平坦面	反転	1.5/12	—	e — 34.0 / —	—	—	外観	円形	A	浅黃褐色	並	ナデ	ナデ	I	

( ) は残存率10%以下の資料の復元数値、—は該当箇所が残存していないか計測・特別不能なことを示す。

表 4-6 普通円筒埴輪計測表

番号	種類	部位	出土トレンチ	区	開口	残存率	形態	口部		腹部		赤色顔料	透孔	助土	色調	焼成	外側調整	内面調整	分類
								直徑/底部 底面	直徑/高さ 底部	直徑/底部 底面	直徑/高さ 底部								
135	37 23	腰部	T 5	2段目 斜面	破片	—	—	b	—	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	ナデ	ナデ	—		
136	37 23	腰部	T 8	3段目 斜面	破片	0.5/12	—	c	(36.0)/—	—	外側	A	にぶい 黄褐色	並	ナデ	唐鈴	—		
137	37 23	腰部	T 5	2段目 斜面	破片	0.5/12	—	e	(36.0)/—	—	外側	A	にぶい 黄褐色	並	ナデ	唐鈴	—		
138	37 23	底部	T 8	3段目 斜面	灰軸	1.6/12	—	—	—	25.4/—	—	B	にぶい 黄褐色	並	タテハケ (B)	ナナメユビナデ	Ⅲ		
139	38 24	L壁	T 9	—	破片	0.8/12	D (36.0)/—	—	—	—	—	B	褐色	並	ナナメハケ (H), ヨコハケ (B), L 壁側面ヨコナデ, 縦端部ヨコナデ	Ⅲ			
140	38 24	腰部	T 9	—	破片	0.7/12	—	—	B (36.0)/—	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	標準	唐鈴	—		
141	38 24	腰部	T 9	—	破片	0.4/12	—	e	(36.0)/—	—	—	B	褐色	並	ナデ	ナデ	I		
142	38 24	底部	T 9	—	灰軸	2.4/12	—	—	—	21.9/—	—	B	褐色	並	ナナメハケ (B), ヨ ビナデ	Ⅲ			
143	38 24	腰部	T 2	—	破片	—	—	c	—	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	ナデ	ナデ	—		
144	38 24	底部	T 2	—	灰軸	1.5/12	—	—	—	26.0/—	—	B	浅黃褐色	並	タテハケ (A), ヨ コハケ (A)	ナナメハケ (A), ナ デ	Ⅲ		
145	38 24	底部	T 2	—	破片	0.8/12	—	—	—	(26.0)/—	—	B	浅黃褐色	並	ナナメハケ (A), ヨ コユビナデ	ナデ	Ⅲ		
146	38 24	底部	T 2	—	反転	1.3/12	—	—	—	30.4/—	外側彫刻	B	浅黃褐色	並	タテハケ (A)	ヨコハケ (A)	Ⅲ		

( ) は残存率10%以下の資料の復元数値、—は該当箇所が残存していないか計測・判別不能なことを示す。

表 5-1 朝顔形円筒・壺形埴輪計測表

番号	種類	部位	出土トレンチ	区	開口	残存率	形態	口部		腹部		赤色顔料	透孔	助土	色調	焼成	外側調整	内面調整	分類
								直徑/底部 底面	直徑/高さ 底部	直徑/底部 底面	直徑/高さ 底部								
147	40 21	L壁	T 6	—	反転	1.2/12	—	39.0/—	—	—	—	B	浅黃褐色	並	標準	ナデ	—		
148	40 24	腰部	T 6	—	灰軸	1.2/12	—	—	34.0/—	—	—	B	浅黃褐色	並	標準	唐鈴	—		
149	40 24	腰部	T 5	3段目 斜面	破片	1.6/12	—	36.0/—	—	—	外側	B	にぶい 黄褐色	並	タテハケ (A)	唐鈴	Ⅲ		
150	40 24	腰部	T 5	3段目 斜面	破片	1.5/12	—	—	15.0/—	—	—	A	にぶい 黄褐色	並	標準	ナデ	—		
151	40 24	腰部	T 4	—	破片	0.7/12	—	30.0/—	—	—	—	B	浅黃褐色	並	タテハケ (A)	ナデ	Ⅲ		
152	40 24	腰部	T 5	3段目 斜面	破片	0.6/12	—	c	32.0/—	—	外側	B	褐色	並	ナデ	ナデ	—		
153	41 25	腰部	T 5	3段目 斜面	反転	2.0/12	—	c	41.1/—	—	外側	B	褐色	並	タテハケ (A)	ユビナデ	—		
154	41 25	腰部	T 5	3段目 斜面	反転	2.2/12	—	c	38.2/—	—	外側	B	褐色	並	タテハケ (A)	ユビナデ	Ⅲ		
155	41 25	腰部	T 5	3段目 斜面	灰軸	1.4/12	—	c	(36.0) (36.0) (16.0) 11.9	32.5/29.6	—	B	褐色	並	タテハケ (A)	ユビナデ	Ⅲ		
156	42 26	L壁	T 7	2段目 ラヌク	反転	1.3/12	—	42.0/—	—	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	タテハケ (A), ヨ コハケ (B)	ヨコハケ (B)	Ⅲ		
157	42 26	L壁	T 8	2段目 ラヌク	反転	1.3/12	—	42.0/—	—	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	ヨコナデ	ヨコナデ	—		
158	42 26	L壁	T 8	2段目 ラヌク	破片	0.4/12	—	(40.0)/—	—	—	—	B	褐色	並	ヨコナデ	ヨコナデ	—		
159	42 26	L壁	T 8	2段目 ラヌク	破片	0.5/12	—	(40.0)/—	—	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	ヨコナデ	ヨコナデ	—		
160	42 26	L壁	T 8	2段目 ラヌク	破片	0.7/12	—	(42.0)/—	—	—	—	A	にぶい 黄褐色	並	ヨコナデ	ヨコナデ	—		
161	42 26	L壁	T 8	2段目 ラヌク	破片	0.7/12	—	(42.0)/—	—	—	—	B	にぶい 黄褐色	並	ヨコナデ	ヨコナデ	—		

( ) は残存率10%以下の資料の復元数値、—は該当箇所が残存していないか計測・判別不能なことを示す。

表5-2 胎頬形円筒・菱形埴輪計測表

番号	種類	出土地点	部位	出土位置	区	面面	残存率	剖面	上部		腹部		底部	赤色顔料	透孔	胎土	色調	焼成	外観調整	内面調査	分類
									直径/高さ	交差	直徑/高さ	交差									
162	42	26	口縁部	T 8	2段目 テラス	破片	0.8/12	—	(42.0)/—	—	—	—	—	—	B	褐色	亞	摩耗	摩耗	—	
163	42	26	口縁部	T 8	2段目 テラス	破片	0.7/12	—	(42.0)/—	—	—	—	—	—	B	に赤い 黄褐色	並	ヨコナデ	ヨコナデ	—	
164	42	26	山腹	T 2	—	破片	0.7/12	—	(34.0)/—	—	—	—	—	内外面	B	浅黄褐色	並	タテハケ(A)、△ 焼造部ヨコナデ	ヨコナデ	II	
165	42	26	L字型 斜面	T 8	2段目 斜面	破片	—	—	—	—	—	—	—	—	B	褐色	並	ヨコナデ	摩耗	—	
166	42	26	口縁部	T 8	2段目 テラス	灰軸	1.4/12	—	35.0/—	—	—	—	—	另葉	B	褐色	並	ナデ	摩耗	—	
167	42	26	口縁部	T 8	2段目 テラス	灰軸	1.2/12	—	36.0/—	—	—	—	—	外輪	B	褐色	重	ナデ	ナデ	—	
168	42	26	口縁部	T 8	2段目 テラス	破片	—	—	—	—	—	—	—	B	褐色	並	摩耗	ヨコナデ	—		
169	42	26	口縁部	T 8	2段目 テラス	破片	0.8/12	—	(34.0)/—	—	—	—	—	B	褐色	並	ナデ	ナデ	—		
170	42	26	口縁部	T 7	2段目 テラス	破片	0.7/12	—	(38.0)/—	—	—	—	—	B	浅黄褐色	並	タテハケ(B)	ヨコハケ(B)	II		
171	42	26	口縁部	T 7	1段目 テラス	破片	1.3/12	—	(31.0)/—	—	—	—	—	B	浅黄褐色	並	摩耗	ナデ	—		
172	42	26	口縁部	T 7	2段目 テラス	破片	—	—	—	—	—	—	—	B	に赤い 黄褐色	並	摩耗	摩耗	—		
173	42	26	L字型 斜面	T 2	—	破片	1.0/12	—	(30.0)/—	—	—	—	—	B	褐色	並	タテハケ(A)	摩耗	II		
174	42	26	側斜面	T 7	1段目 テラス	反転	0.9/12	—	—	(38.0)/—	—	—	—	B	に赤い 黄褐色	並	ヨコナデ	摩耗	—		
175	42	26	側斜面	T 7	1段目 テラス	灰軸	0.6/12	—	—	(38.0)/—	—	—	—	B	に赤い 黄褐色	並	ヨコナデ	摩耗	—		
176	42	26	側斜面	T 7	1段目 テラス	灰軸	0.5/12	—	—	(38.0)/—	—	—	—	B	黄褐色	並	ヨコナデ	摩耗	—		
177	43	27	頭部	T 7	2段目 テラス	反転	1.4/12	—	—	17.4/—	—	—	—	B	に赤い 黄褐色	並	ヨコナデ	摩耗	—		
178	43	27	頭部	T 2	—	反転	2.0/12	—	—	—	—	25.0/—	—	円形 (半円形)	B	浅黄褐色	並	タテハケ(A)	ナナメユビナデ	II	
179	43	27	頭部	T 8	2段目 テラス	反転	1.3/12	—	c	—	32.0/—	—	—	B	褐色	並	ナデ	ユビナデ	I		
180	43	27	底部	T 8	3段目 斜面	破片	—	—	—	—	—	—	—	B	に赤い 黄褐色	並	タテ・ナナメハ ケ(C)	ユビナデ	II		
181	43	27	側斜面	T 7	2段目 テラス	破片	—	—	—	—	—	—	—	B	褐色	並	摩耗	摩耗	—		
182	43	27	底部	T 7	1段目 テラス	反転	0.9/12	—	—	38.5/—	21.3/—	—	—	円形	B	灰青褐色	並	タテハケ(B)	タテ・ナナメユ ビナデ	II	
183	43	27	側斜面	T 7	2段目 テラス	反転	1.2/12	—	—	—	36.1/—	—	—	円形	B	に赤い 黄褐色	並	ナナメ板ナデ	ナナメユビナデ	—	

( ) は残存率10%以下の資料の復元数値、—は該当箇所が残存していないか計測・判別不能なことを示す。

表6 形象埴輪計測表

番号	種別	器種	部位	出力トランジ	地区	残存高/幅	最大径	胎土	色調	焼成	外観調整	内面調整	赤色顔料
184	44	27	底	軸部と底盤部の接合部	T 8	3段目斜面	33/85	—	B	にぶい褐色	並	摩耗	摩耗
185	44	27	底	取り扱い受け溝の端片	T 7	1段目テラス	28/63	14	B	浅青褐色	並	摩耗	摩耗
186	44	28	底	矢張部を組取る部品の横片	T 8	2段目テラス	80/716	—	B	灰黄褐色	並	摩耗	摩耗
187	44	27	不明	—	T 7	埴輪部	85/59	—	B	にぶい黄褐色	並	摩耗	摩耗
188	44	27	不明	—	T 8	裏面平坦部	65/55	—	A	淡青褐色	並	タテハケ(B)	ナナメハケ(B)

( ) は残存率10%以下の資料の復元数値、一は該当箇所が残存していないか計算・判別不能なことを示す。

表7 石製品計測表

番号	種別	器種	石材	色調	長さ	幅	最大横厚幅	堆積高	最大厚	重さ(g)
189	45	掌石	緑色斑状岩	緑灰色	8.4	14.5	6.4	2	1.9	365

表8 普通円筒埴輪分類別破片数一覧表

番号	外観調整	該当箇所 片数	形態								突審問隔 設定技法		透孔 形状				胎土	赤色顔料		
			円筒部				中央				A	B	方形容	円形容	透孔 形状	半円形容				
			A	B	C	D	E	a	b	c										
I群	[ ]	39	2					1	13	16		4	2		12	15	1	2	16 24 4	
II群	[ ]	65	2	2	2	1		8	6	20	1	5	1	9	1	3	4	1 2	34 31 20	

附注は、今回同化したものを対象とした。

## VII 荒神山古墳と近江

前方後方墳から前方後円墳へ

### 方形周溝墓の伝統

前期古墳を考える上で、弥生時代の墓制は重要な資料を提示している。とくに注目されるのは方形周溝墓という弥生時代に固有の墓制である。弥生時代以前にも集落を単位とする共同墓地は存在したが、水稻農耕の到来は、自然の大地を食糧確保の生産手段である土地に変え、富を生み出す源として土地に対する執着をそれ以前とは比較にならないほど強く意識し執着したであろう。その結果、墓地においても共同墓地の中を区画して一定の土地を墓として占有するようになった。それが遺構として顕在化したものが方形周溝墓であると考えられる。

方形周溝墓が誕生した当初は、各方形周溝墓に規模の格差は認められず、共同墓地内に同規模の方形周溝墓が等しく群集するものであったが、やがて特定の方形周溝墓に規模などにおいて卓越したものが認められるようになり、格差を生じるようになる。集落内の特定の家族や個人だけが卓越した状態で埋葬されるようになったのである。ただ、それでも共同墓地内に埋葬されることに変わりはなかった。ところが、ついに共同墓地を離れ、家族的な臍帶からも抜け出して、特定の個人だけが共同墓地から隔離した位置に特別の葬法で埋葬されるようになる。その被葬者こそ、拠点集落のさまざまな権限を奪取し、富を一元的に掌握することに成功した統治者の姿と理解される。水稻農耕がもたらした弥生社会は、原始的な共同社会の中に長く埋没してきた家族を可視化させるとともに、さらに家族的な血縁的臍帶をも脱した統治者を生み出したといえよう。

近江において、こうした統治者は、方形周溝墓の伝統の下に前方後方墳を築くようになる。ただ、方形周溝墓から前方後方墳への発達はそれほど容易ではない。両者の間には幾つかの段階が存在したと考えられている。そのことを模式的に述べると、まず方形周溝墓の一辺の周溝の中央に陸橋部を作り出したものが現れ、その陸橋部が徐々に発達して前方部を形成するに至ったと理解される。当初、埋葬主体への通路であり祭祀の場であったものが、墓前祭祀の形態が発展する過程で、その場が成長し独立して前方部を生み出したということであろう。なお、地域ごとに見ていくと、必ずしもこうした進化論的な発達を示すものではないことも明らかになってきている<sup>(11)</sup>。地域間の交流や祭祀形態の地域差などが介在して、実態はさらに多様である。

### 前方後方墳の時代

以上のような段階を経て出現した前方後方墳が、近江各地で確認されるようになる。彦根市内ではこうした様相をいまだ確認できていないが、出現期の前方後方墳の実態については、植田文雄氏の精力的な論考がある<sup>(12)</sup>。植田氏は近江の弥生後期から古墳時代にいたる

土器研究を前提として、出現期の前方後方墳を5期（I期～V期）に分類している。土器編年としては、おおよそ庄内式～布留式古段階併行であり、一般に弥生時代後期末から古墳時代前期前半と理解される時期である。以下、その概要を簡単に記すことからはじめよう。

**出現期の前方後方墳 I期** I期は前方後方墳が誕生する時期である。近江では、法勝寺遺跡 SDX23（米原市）と神郷亀塚古墳（東近江市）があり、県外では愛知県廻間遺跡 SZ01などが存在する。法勝寺遺跡 SDX23は、全長22.4mで前方部が全体の1／3強にまで発達し、前方部前面にも小規模ながら区画溝が巡っている。ただ、SDX23の周囲には方形周溝墓が群在しており、共同墓地から突出するまでには至っていない。神郷亀塚古墳は全長37.9mで幅の広い周溝を伴っており、周溝底からの墳丘は3.8mを測る高塚である。後方部中央には2基の舟形木棺を納めた木椁が確認されており、共同墓地を離れて単独で築造されている。神郷亀塚古墳のこうしたあり方は、弥生時代以来の墓制とは明らかに異なる古墳に相応しい様相であり注目される。因みにこの時期に大和では、初期の前方後円墳である纏向石塚古墳が誕生している。

**出現期の前方後方墳 II期** II期には、近江の高島市熊野本6号墳や愛知県の西上免遺跡 SZ01のほか、新たに富山県でも向野塚で前方後方墳が築造されている。熊野本6号墳は、琵琶湖を望む丘陵に立地する前方後方墳である。全長28mだが、前方部は8mとかなり短い。高さは4.4mを測り、琵琶湖側に後方部が拡張して非対称形を呈している。

**出現期の前方後方墳 III期** III期になると、近江の長浜市高月町小松古墳や近江八幡市浅小井遺跡 SX01のほか、石川県に6基、岐阜県に1基、長野県に1基、千葉県に4基、京都府と奈良県でも1基ずつ確認されるなど、分布域が拡大している。小松古墳は、奥琵琶湖を望む古保利丘陵の山頂に築かれた132基を数える古保利古墳群中の1基である。古保利古墳群は、琵琶湖の北の玄関口である塩津港の権益を掌握した統治者層の古墳群として注目される古墳群である。その内の1基である小松古墳は全長60m、高さ5mを測る均整のとれた墳形を示しており、主体部からは多数の土器とともに、2面の破鏡・銅鏡・鉄鏡が出土している。浅小井遺跡 SX01は、弥生時代後期の環濠に接して築かれた全長35mの前方後方墳である。前方部は11mと小規模である。この時期の前方後方墳は、分布域の拡大とともに、丘陵や山頂に立地するものが多くなり、副葬品に鏡や鉄器を保有するものが出現している。

**出現期の前方後方墳 IV期** IV期からは類例が急増するようになり、該当する前方後方墳は37基を数え、分布域も北は福島県から南は佐賀県まで拡大している。この時期、近江では守山市と隣の栗東市で集中的に7基が検出されている。守山市の播磨田東遺跡 SX1・塚之越遺跡前方後方形周溝墓・経田遺跡 SX3・益須寺遺跡 SX1・同1号墳・横江遺跡 SX3、そして栗東市辻遺跡 A地点 SX6である。いずれも11.2m～23.7mと規模が小さく、統治者層の古墳とは考え難い。この時期には、大和で磐墓古墳など巨大化した前方後円墳の築造が始まっている。

**出現期の前方後方墳 V期** V期になっても前方後方墳は増加の一途をたどり、IV期よりさ

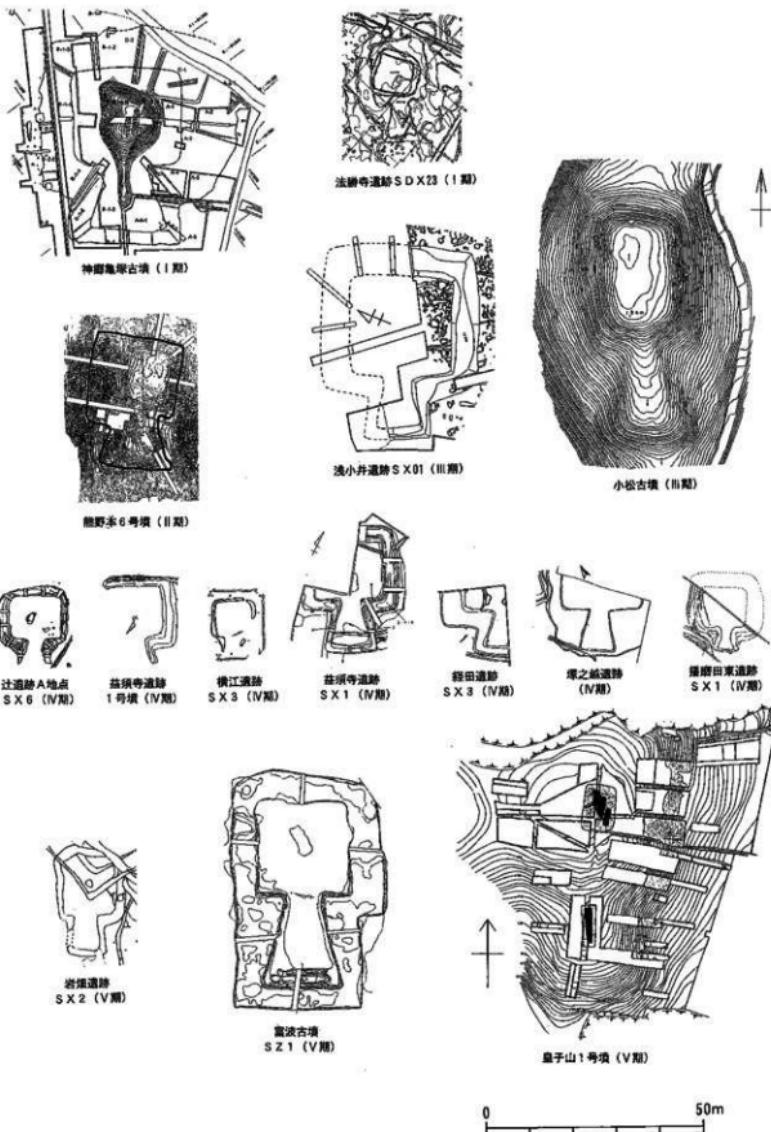


図46 近江の出現期前方後方墳

らに増加して51基を数える。分布域も拡大し、東は宮城県まで広がり、新たに中国・四国地方が加わる。栃木県藤本觀音山古墳は、出現期の前方後方墳としては最大の全長117.8m、後方部の高さは11.8mを測り、前方部に2段、後方部に3段の段築、最上位に葺石を施している。東海地方では愛知県東之宮古墳が、全長72m、高さ8mを測り、竪穴式石室に割竹形木棺を配し、4面の三角縁神獸鏡を含む11面の鏡、鍬形石などの玉石類や鉄劍・鉄刀など多量の鉄器類が副葬されている。北陸地方では富山県椿田布尾山古墳が、全長107m、高さ9mを測り、地域最大級の威容を示している。瀬戸内地方では、全長48.3m、高さ3.8mの岡山県備前車塚古墳が築かれている。規模はそれほど大きくないが、墳丘には葺石が施され、三角縁神獸鏡を含む13面の鏡や鉄鎌・鉄錐など多数の鉄製武具が副葬されていた。特殊器台形埴輪の発見で知られる岡山県都月坂1号墳も、全長33mの前方後方墳である。また、この時期に前方後円墳を数多く築いた大和盆地東山麓の藤元でも、全長120m、高さ14mの前方後方墳である下池山古墳が築かれている。

そして近江では、大津市皇子山1号墳、野洲市富波古墳SZ1、栗東市岩畠遺跡SX2が存在する。皇子山1号墳は、琵琶湖を見下ろす山頂部に築かれた前方後方墳で、全長60mを測り、後方部に10m×7mの中心墓坑があり、葺石を施している。葺石や墳形は、琵琶湖に面する側がより丁寧に整備されており、湖上からの景観を重視したものと考えられており興味深い。富波古墳SZ1は、野洲川右岸の平地に築かれたもので、全長42mを測り、長方形に近い周溝が巡るが墳丘を残していない。岩畠遺跡SX2は、全長21mと比較的小規模であり、周溝が巡るがやはり墳丘は遺存しない。

V期になると、前方後方墳に定型化の傾向が認められるようになり、地域的には東北地方から中国・四国地方を加えた北部九州にまで分布域が広がった。しかも、各地の主要古墳が大和と四国の一部以外は、主に前方後方墳であるという点は留意すべきである。一方、依然として小規模で墳丘の乏しい前方後方墳も存在するなど、規模において格差が顕著となっている点も見落としてはならないだろう。

出現期前方後方墳の画期 以上、出現期の前方後方墳についてI期からV期の展開過程を概観すると、近江あるいは東海地方で誕生した前方後方墳は、その後、日本海ルートと太平洋ルートで東へ、やや遅れて瀬戸内ルートで西へと伝わり、V期には北は東北、南は北部九州にまで分布域を広げている。この間、画期となるのはI～III期とIV・V期である。墳丘の構造を見ると、I～III期では前方部の形状はいまだ不定形のものが多く、その規模も相対的に小さく伸張過程にある。IV期には前方部の伸張が著しくなりV期で定型化する。IV・V期の前方後方墳には、墳丘上に葺石を設けたり、段築を施したものも出現している。埋葬施設の検出例はそれほど多くないが、I～III期では弥生時代以来の木棺直葬が主流である。ところがIV・V期になると竪穴式石室を築くものが現れ定着する。副葬品においても、I～III期では弥生時代以来の地域色を継承する副葬品が多くを占めているが、IV・V期には三角縁神獸鏡や二重口縁壺の副葬が顕著になってくる。つまりI～III期の前方後方墳は、定型化に至る

成長過程にあると見ることができ、埋葬施設や副葬品についても多分に弥生時代以来の地域色を継承するものであった。ところがIV・V期になると、墳丘の構造・埋葬施設・副葬品などにおいて古墳時代前期の前方後円墳と共に通する要素が加わるようになる。この時期、前方後円墳の世界では、大和盆地東山麓において、最初の定型化した前方後円墳と考えられている箸墓古墳がIV期に誕生し、V期には定型の前方後円墳が累々と築かれている。ただ、前方後方墳に新たに加わったすべての要素を、これらの前方後円墳からの影響と即断するのは危険であろう。IV期からV期へと前方後方墳の分布域は拡大を続けており、V期には東北地方から中国・四国地方を加えた北部九州にまで分布域が広がっている。しかも、各地の主要古墳は、大和と四国的一部以外は、主に前方後方墳であった。こうした地域で生まれた前方後方墳の要素が、大和で定型化した前方後円墳に影響を与えたものも存在したと推測される。

このように見てみると、前方後方墳が前方後円墳の影響下に成立したとする論は成立し難くなる。前方後方墳は、弥生時代以来の墓制である方形周溝墓の伝統の下に誕生し、自立的な成長をとげながら分布域を拡大した。その過程で、前方後円墳と相互に影響しあうようになり、やがて定型化に至ったと想定される。

#### 前方後方墳から前方後円墳へ

近江では、I期からV期に至る5期の間、つまり土器編年の庄内式～布留式古段階併行(弥生時代後期末～古墳時代前期前半)の間、方形周溝墓の伝統の下に出現期の前方後方墳が継続的に築かれてきた。

一方、大和盆地東山麓を起源として、IV・V期には畿内型と称される定型化した巨大な前方後円墳が築造される。この時期の前方後円墳は、左右対称の前方後円形の墳丘、墳丘を覆う葺石、墳丘を巡る埴輪、被葬者を埋葬する竪穴式石室と長大な木棺が特徴的であり、木棺内には鏡、鐵形石・車輪石・石劍などの石製腕飾品、勾玉・管玉などの装身具、鐵製の武器・武具、鐵製の農工漁具など多種多様な副葬品を納めた。こうした100mを超える規模の前方後円墳が、大和盆地で累々と築造されるようになり、大和を中心に関連する連合政権の存在が想定された。

強化した大和政権の勢力は、やがて前方後円墳を築いてこなかった周辺の地域にも及び、大和政権を頂点とする政治体制が確立していくことになった。近江でも古墳時代前期前半頃になると、大和政権の勢力の進出が顕著となり、これまで前方後方墳を築いてきた在地勢力に多大な影響を及ぼすようになる。

ただ、大和政権の進出に対して在地勢力が示した様相は一様ではなかった。日本海に近い湖北、広大な平野を擁する湖東、大和に近いが独自性の強い湖南、北近畿と接する湖西、それぞれが弥生時代以来の伝統を内在しつつ前方後方墳を築いており、そのことが前方後円墳の受容に当たっても異なる対応を示すことになったと考えられる。

**湖北地方の様相** 日本海に近い湖北では、奥琵琶湖を望む古保利丘陵の山頂に132基を数え

る古保利古墳群が存在する。古保利古墳群は、琵琶湖の北の玄関口である塩津港の権益を掌握した統治者層の古墳群として注目される古墳群である。この古保利古墳群の中でもっとも早く築かれたのがⅢ期の前方後方墳である小松古墳であったが、古墳時代前期後半には同じ古墳群の中に深谷古墳（全長約35m）・木戸越古墳（全長約37m）などのやや不定形な前方後円墳が次々と築かれた。強大化する大和政権に対して、墳形を受け入れ模倣することで大和政権に恭順の意を示し、それぞれの支配域の権益を保持したものと考えられている<sup>(20)</sup>。一方、古保利古墳群の東に位置する姫塚古墳は、近年の調査によって全長78mを測る布留式古段階の前方後方墳であることが判明している。姫塚古墳は近江最大の前方後方墳であり、当地を領した在地の有力統治者が、古墳時代前期中頃までは前方後方墳を堅持していたことを物語っている。在地統治者の大和政権に対するこうした混沌とした状況は、前期末に至って終止符が打たれることになる。古保利古墳群の南端、山本山の山麓の尾根頂部に整然とした墳形を保つ前方後円墳である若宮山古墳が築かれるのである。全長49mを測り、埴輪と葺石を保ち、後円部には竪穴式石室の存在が推定されている。その位置は、塩津港に向かう船の経由地であり、上陸して北国街道を北上する港湾にも近い。まさしく琵琶湖と陸路の双方を押さえる要衝に、大和政権との直接的なつながりが想定される定型化した前方後円墳が築かれたのである。

湖北地方の南部を流れる天野川流域は、庄内式古段階に当たるⅠ期に法勝寺遺跡SDX23という前方後方墳を誕生させた地である。その後も在地の統治者たちによって息長古墳群の一支群である定納古墳群が築かれた。定納古墳群は9基で構成されており、発掘調査が実施されている。調査の結果、1号墳は全長約21.4mの前方後方墳であることが判明しており、長大な木棺や筒形銅器が出土している。また5号墳は長軸22.1m、短軸18mの方墳であり、2基の長大な木棺が埋納され刀子が1点副葬されていた。2号墳・6号墳も方墳の可能性が高い。そのほか7号墳は長軸14m、短軸11.5mを測り、木棺直葬の梢円形墳が想定されている。定納古墳群は、古墳時代前期後半から中期前半と位置づけられており、全体として方形墳を主体に推移したものと考えられる。当地の息長古墳群に明確な円形墳が築かれるのは、古墳時代中期に想定される甲塚1号墳であり、定型化された前方後円墳の出現は中期末の塚の越古墳を待つことになる。当地は北の北国街道と東の中山道が分岐する位置にあり、入江内湖を経て琵琶湖にも通じている。要衝を押された息長氏の本拠地とされるが、本格的な前方後円墳の出現は予想に反して遅く、在地の統治者が長く方形墳を踏襲したと考えられる。

一方、古保利古墳群と息長古墳群の間に位置する姫川流域の長浜古墳群では、古墳時代前期後半の可能性を持つ龍ヶ鼻古墳や山の鼻古墳が存在している。龍ヶ鼻古墳は前方後方墳、山の鼻古墳は前方後円墳が想定されており、詳細は不明ながら古墳時代前期後半段階で在地勢力が前方後円墳体制に組み込まれていった可能性が考えられる。

湖東地方の様相 犬上川・愛知川・日野川などの大きな河川をもつ湖東地方は、これらがもたらした肥沃な土砂によって豊かな平野を形成するとともに、琵琶湖岸に天然の港ともなる

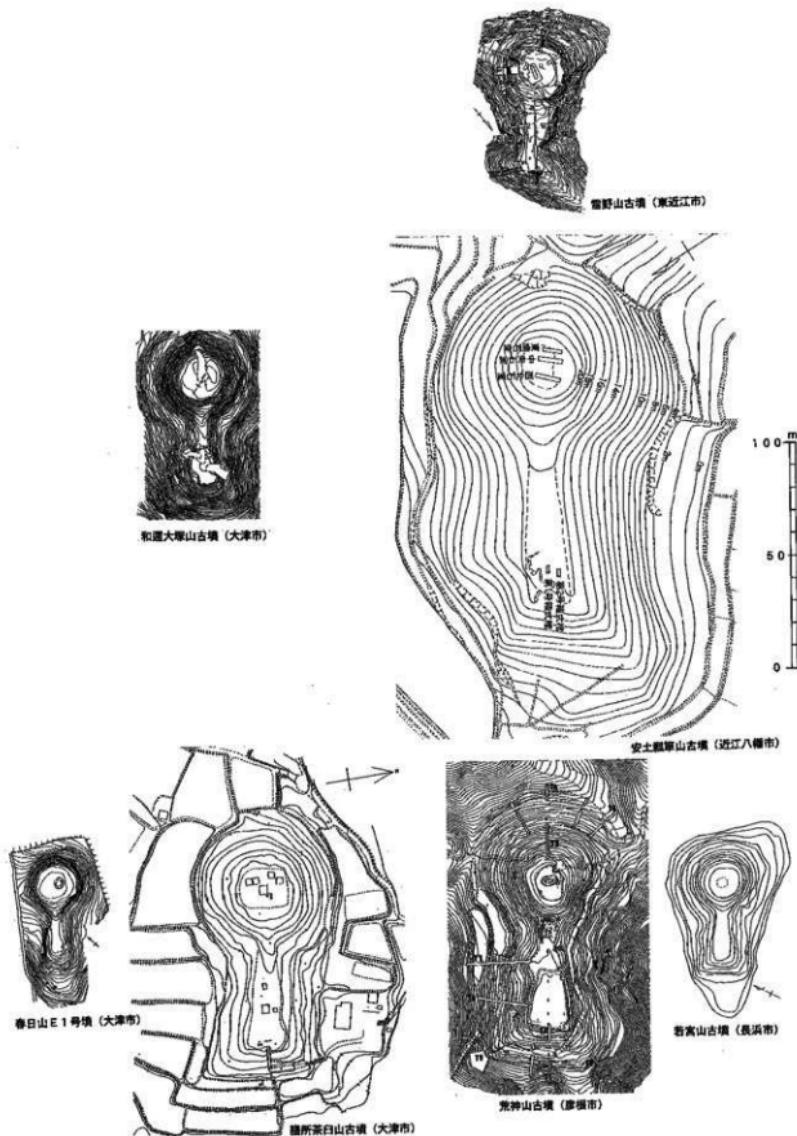


図47 近江の前期前方後円墳

数多くの内湖を生み出し、川を伝って三重県や愛知県に通じる陸路を発達させていた。こうした背景の中で、I期には早くも愛知川左岸に神郷亀塚古墳（東近江市）が築かれたのを初例に、III期には近江八幡市の浅小井遺跡SX01など、在地の統治者たちによって平地に前方後方墳が築かれてきた。

ところがV期に相応する布留式古墳に至ると、日野川中流域の山頂に前方後円墳と想定されている雪野山古墳（東近江市）が築造される。全長70mを測り、前方部はややいびつであるが、後円部は2段に築成して葺石を施している。埴輪は認められない。後円部のほぼ中央には竪穴式石室があり、長大な舟形木棺の痕跡を残す粘土床は鮮やかな水銀朱に染まり、三角縁神獸鏡をはじめ5面の鏡と、玉石・銅鏡・鉄製品・革縫胄など豊かな副葬品を備えていた。いまだ定型化された前方後円墳というには十分ではないが、三角縁神獸鏡の配布を受けるなど大和政権とのつながりの中で誕生した古墳である。

古墳時代前期中頃になると、織山の北西に伸びる丘の先端に安土瓢箪山古墳（近江八幡市安土町）が築造された。現在は内湖から離れているが、かつては内湖に面して立地していたことが知られる。定型化した前方後円墳であり、全長162mは県下最大規模を誇る。葺石と埴輪を保ち、後円部に3基、前方部に2基の埋葬主体があり、後円部の3基はいずれも竪穴式石室を築いている。3基の内、中央石室は長さ6.6mあり、粘土床の上には長大な割竹式木棺が埋置されていた。2面の鏡のほか玉石・筒形銅器・銅鏡・鉄製品・短甲など多量の副葬品が納めている。

そして古墳時代前期末になって荒神山の山頂付近に全長124mの前方後円墳が、前方部を琵琶湖に向けて築かれるのである。I期以降、在地の統治者によって前方後方墳を築造してきた湖東地域は、やがて大和政権とのつながりが強化される中で不十分さを残しつつも前方後円墳の墳形が想定される雪野山古墳を生み、前期中頃には安土瓢箪山古墳、次いで荒神山古墳といった定型化された前方後円墳を誕生させるに至ったのである。湖東地域は、前方後方墳から前方後円墳への流れがもっとも明瞭に追認できる地方といふことができる。

湖南地方の様相 湖南地方を流れる野洲川は、その下流域に広大で肥沃な冲積地を形成しており、弥生時代には服部遺跡・下之舞遺跡・伊勢遺跡などの拠点集落が発達し、大岩山中腹からは24口の銅鐸が発見されている。このような歴史的背景の中で、IV期には守山市の播磨田東遺跡・塚之越遺跡・経田遺跡・益須寺遺跡・横江遺跡と栗東市の辻遺跡で、またV期には栗東市の岩畑遺跡と野洲市の富波遺跡で次々と前方後方墳が築かれている。ただ、富波遺跡のSZ1が全長42mであるほかは、いずれも規模が小さいのが留意される。

古墳時代前期中頃になると、湖南地方の山麓で円形墳の築造が盛んになる。前期中頃の円形墳として、3面の三角縁神獸鏡を出土した野洲市古富波山古墳、三角縁神獸鏡の出土が伝えられる野洲市大岩山古墳と栗東市岡山古墳などが存在する。また前期末の円形墳としては1面の三角縁神獸鏡を出土した瀬田川左岸の織部古墳などが知られる。在地の統治者は、大和政権より三角縁神獸鏡の配布を受けつつ、独自に円形墳の築造を続けることで一定

の距離を保ったと考えられる。このように野洲川流域を中心に早くから開発の進んだ湖南地方は、古墳時代前期を通じて前方後方墳と円形墳の築造に終始し、大和政権の前方後円墳体制に組み込まれることはなかったのである。

**湖西地方の様相** 一方、湖西地方南部ではⅤ期になって皇子山古墳（大津市）が築かれている。全長60mの前方後方墳で、琵琶湖を見下ろす山頂部に位置しており、試掘調査によって後方部から3基、前方部から1基の主体部が検出されている。墳形は琵琶湖に面する側が丁寧に整備されており、葺石が施されるなど定型化が認められる。また、少し北の独立丘上には、ほぼ同期と考えられる円形墳の壺笠山古墳（大津市）が存在する。直径48mを測り、300点を数える特殊器台形埴輪の破片が採集されている。現在、特殊器台形埴輪が出土した遺跡は全国で24遺跡を数えるが、岡山県（吉備地方）11遺跡、大和地方8遺跡と両方が群を抜いて多く、近江は壺笠山古墳の1例のみである。埴輪の起源や特殊器台形埴輪の伝播を研究する上で、円形墳である壺笠山古墳の存在は重要である。

この湖西地方南部に最初に前方後円墳が受容されるのは、古墳時代前期中頃の和邇大塚山古墳である。全長72mの和邇大塚山古墳は琵琶湖の北湖と南湖の境にあり、真野川がつくる堅田の小さな三角州の北丘陵頂部に琵琶湖の閑門を睨むように前方部を琵琶湖に向けて築いている。前方部1段、後円部2段の段築を持ち、埴輪は認められないが葺石を配した定型化された前方後円墳であり、後円部中央には竪穴式石室を設け、青蓋盤龍鏡1面・玉類・鉄劍2口などが副葬されている。次いで前期末になると、春日山E1号墳や膳所茶臼山古墳が築かれる。春日山E1号墳は、和邇大塚山古墳のおよそ2km南の丘陵頂部に位置する全長60mの前方後円墳である。埴輪や葺石は確認されていないが、前方部1段、後円部2段の段築が想定されている。そして、琵琶湖の入口を押さえる瀬田川右岸の山丘に膳所茶臼山古墳が築かれる。全長124mを測り、前方部2段、後円部3段の段築を施した定型の前方後円墳である。埴輪を墳丘の一部に樹立していたと考えられており、葺石を配し、周濠を設けている。その規模・墳形・築造期などが荒神山古墳によく似ており、やはり前方部を琵琶湖に向けて築いている。このように湖西地方南部の前方後円墳の様相は、まず前期の中頃に和邇大塚山古墳が、次いで前期末に春日山E1号墳や膳所茶臼山古墳が築かれており、その受容のあり方は湖東地方に良く似たものであったことが理解される。

北近畿に接する湖西地方の北部では、若狭街道を通って若狭に至るルートが古くから存在した。北近畿は、朝鮮半島との交流を背景に、弥生時代後期以降、鉄製品やガラス加工などの先進的な技術を保持していたことが知られるが、その技術や製品が若狭街道を経て当地にももたらされている。弥生時代後期の熊野本遺跡（高島市）では、鉄製品や玉作りの工房をもつ高地性集落が丘陵上に営まれ、後期末には北近畿起源の貼石墓が築かれる。貼石墓の組合式木棺からは741点のガラス小玉が出土している。

次いで熊野本古墳群が形成される。熊野本6号墳はⅡ期の前方後方墳であった。全長28mだが、前方部は8mと未発達であった。続く熊野本12号墳は全長30mを測り、前期後半頃

の前方後円墳として注目される。ただ、現状の墳形を見ると、後円部の北側と西側の墳丘裾部が直線的であるなど不定形であり、いまだ畿内型の定型化された前方後円墳には至っていない。

### 前方後円墳の受容と展開

以上、近江各地方の前方後方墳から前方後円墳に至る様相を概観したが、最初に述べたように、大和政権の進出に対して在地勢力が示した様相は一様ではなかった。それぞれの地方が弥生時代以来の伝統を内在しつつ前方後方墳を築いており、前方後円墳の受容に当たっても異なる対応を示すことになった。

こうした中にあって、湖東地方では布留式古段階にいち早く雪野山古墳が築かれた。前方部がややいびつであり、いまだ定型化された前方後円墳というには十分ではなかったが、豊穴式石室に長大な舟形木棺を配し、三角縁神獸鏡など5面の鏡を副葬するなど大和政権とのつながりの中で誕生した古墳であった。

前期後半になると、湖北地方北部の古保利古墳群では前方後方墳の小松古墳に変わって深谷古墳や木戸越古墳などの前方後円墳が築造され、中部の長浜古墳群でも前方後方墳の龍ヶ鼻古墳に変わって前方後円墳の山の鼻古墳が築かれるようになる。また、湖西地方北部でも、熊野本古墳群で前方後方墳の6号墳に変わって前方後円墳の12号墳が築造されている。同じ古墳群の中に前期後半段階で新たに前方後円墳が加わった意義は大きく、在地勢力が墳形を変えていち早く大和政権下に参画したことを示しているが、新たに築造された前方後円墳はおしなべて墳形が不定形であり、いまだ畿内の定型化された前方後円墳とは言い難いものであった。

一方、湖南地方では野洲川がもたらした肥沃な冲積地に、弥生時代以来の拠点集落を発達させてきた。こうした歴史と伝統を背景にして、当地では古墳時代前期中頃以降、古富波山古墳・大岩山古墳・岡山古墳、そして前期末には織部古墳などの円形墳が次々と築かれた。これらの円形墳からは三角縁神獸鏡などの鏡が出土しており、在地の統治者層が大和政権から三角縁神獸鏡などの配布を受けつつ、独自に円形墳の築造を続けることで大和政権とは一定の距離を保ったと考えられる。

また、湖北地方南部の天野川流域でも、息長古墳群の一支群である定納古墳群では古墳時代前期を通じて前方後方墳や方形墳の築造に終始し、大和政権の前方後円墳体制に組み込まれることはなかった。

このように近江では、前期中頃以降、前方後円墳の墳形を取り込んだり、三角縁神獸鏡などの配布を受け入れることで自己の勢力の温存を図るもの、あるいは伝統的な方形墓に固執するものなど、大和政権の進出に対して在地勢力が示した様相は多様であった。

ところが一方で、湖東地方では前期中頃に安土瓢箪山古墳、前期末には荒神山古墳といった定型化された大型前方後円墳が誕生している。同様に湖西地方南部でも前期中頃に和邇大

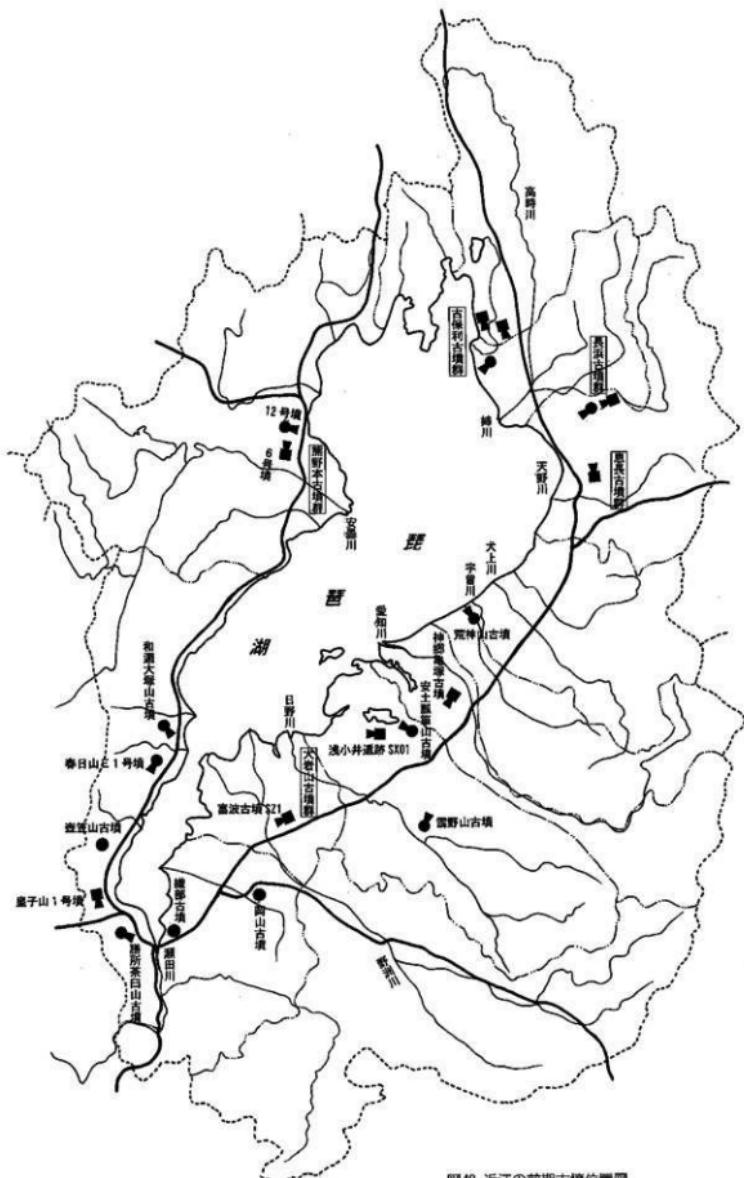


図48 近江の前期古墳位置図

塚山古墳が、次いで前期末に春日山E1号墳や膳所茶臼山古墳が姿を現す。また、湖北地方北部でも、前期末に至って若宮山古墳が築かれている。これらの古墳に共通する特徴は、いずれも從米の不定形な前方後円墳とは異なって畿内型の定型化された古墳であり、規模も大型となっている。また、その立地も琵琶湖岸の丘陵に築かれしており、平野部よりも琵琶湖側に眺望が開け、前方部を琵琶湖に向ける傾向が認められるなど、琵琶湖を意識した築造となっている。こうした特徴を備えた古墳からは、従来の在地の統治者よりも、大和政権と直接的な関係を保ち、琵琶湖の湖上権益に有力な統治者の姿が想定される。しかも、それらの古墳が連携して、湖上のネットワークを構成している点が注目される。

4世紀に入って近江に進出するようになった大和政権は、近江の在地勢力と連合し制圧しながら、さらに日本海地域や東海地方へと版図を拡大するため、その進入ルートを確保する必要があった。そのため陸路と水路の両面にわたって交通の要衝を押さえ、その地の在地勢力に前方後円墳という新たな墓制を供与した。大和政権のこうした動きに、在地勢力は墳形や三角縁神獣鏡の受容などによって自己の勢力を確保したり、伝統的な方形墳に固執するなど多様な対応を示しながらも、やがて遅速の差はあったが大和政権の前方後円墳体制に組み込まれていくことになる。

一方、大和政権内部でも前期後半以降、巨大古墳の築造される地域が大和盆地東山麓から盆地北部の佐紀丘陵へ、さらに生駒山を越えて河内平野へと移動しており、主導権の移動に伴って政権構造を強化していく。その過程で、大和政権は従来の国内における版図の拡大に加えて、新たに鉄の入手などを目的として朝鮮半島との直接交渉ルートの整備に乗り出し、弥生時代後期以来の交流がある日本海域に通じるため、琵琶湖の湖上交通の掌握に再び力が注がれるようになった。大和政権の意図に沿って琵琶湖の湖上権益に有力な統治者が任命され、湖上ネットワークを築いて業務を遂行した。琵琶湖岸に琵琶湖を意識する形で築造された畿内型前方後円墳は、彼らのそうした業績を示すモニュメントとして築かれたと考えられる。荒神山古墳をはじめとするこれらの前方後円墳は、まさしく大和政権の新たな政略のなかで誕生した古墳であったといえよう。

#### 【註】

1. 植田文雄『「前方後方墳」出現社会の研究』学生社 2007
2. 田中勝弘『新修彦根市史 第1巻 通史編古代・中世』彦根市 2007  
『古墳と寺院—琵琶湖をめぐる古代王権—』サンライズ出版 2008

## おわりに

荒神山古墳については、これまでの4次にわたる試掘調査によって、埴輪や古墳の築造手法などから古墳時代前期末の古墳であることが明らかになった。全長124mを測り、県内では安土瓢箪山古墳に次ぐ規模であり、前方部・後円部とも2段のテラスを設けた3段築成の墳丘をもち、埴輪と葺石を配した畿内型の定型化した前方後円墳であった。従来、彦根市など湖東地方北部は前期古墳の空白地帯と言われてきたが、荒神山古墳が確認されたことにより、当地にも巨大な前期前方後円墳の存在が確認できた意義は大きい。

同時に、この古墳が湖東平野の琵琶湖岸に位置する独立丘である荒神山の山頂付近に築造され、平野部よりも琵琶湖側に眺望が開け、前方部を北西に広がる琵琶湖に向けて築いている点が注目された。この時期、近江に進出した大和政権は、在地の勢力と連合し制圧しながら北陸地方や東海地方へと版図を広げ、さらに朝鮮半島に直接交渉するルートを確保するため、琵琶湖の湖上交通の掌握に力を注いだ。そのため琵琶湖の湖上権益に有力な統治者を任命し、湖上にネットワークを築いて業務を遂行させた。荒神山古墳の被葬者にはこうした業務遂行の被葬者像が想定され、その業績を示すモニュメントとして築かれたのが荒神山古墳であったと考えられる。

荒神山古墳のこれまでの調査では、彦根市文化財委員会において幾度も審議の場をもち現地の視察をお願いした。とくに考古学分野を担当していただいている委員や委員の推薦する研究者とは密接な連携をとり、逐次指導を仰ぎながら調査を実施するよう努めた。そして2次調査が終了した時点で、彦根市指定文化財に指定することができた。その後、彦根市文化財委員会からは国の史跡指定に値する古墳であるとの指摘を受け、文化庁の調査官の現地指導を受けながら、これまでの調査の不備を補うべく3次・4次調査を実施し、大きな成果を得ることができた。4次調査終了後は、正式報告書の作成に着手するとともに、「荒神山古墳調査検討委員会」を立ち上げて荒神山古墳について調査成果を基に改めて評価を得る機会を設けた。委員には立命館大学文学部教授和田晴吾氏、元滋賀県埋蔵文化財センター参事田中勝弘氏、滋賀県立大学人間文化学部教授林博通氏、滋賀県立琵琶湖博物館研究部長用田政晴氏、滋賀県文化財保護協会主任技師辻川哲朗氏の各古墳研究者にお願いし、平成22年1月13日には、第1回目の委員会を開催した。委員会では荒神山古墳が、国の史跡に十分値する古墳であるとの評価をいただくとともに、各種のご意見をいただき当報告書に反映させることができた。この委員会では、国指定後の保存整備にも意見が及び、文化庁の指導と援助を得ながら当委員会を発展させて「荒神山古墳保存整備委員会」を発足させたいと考えている。

なお、湖東平野に独立した山を形成している荒神山には、荒神山古墳のほかにも群集墳が30基以上点在しており、山中には荒神山神社（奥山寺）、千手寺・延寿寺などかつての天台系山岳寺院がその面影を良好に留め、戦国大名六角氏の砦跡や土豪日夏氏の城跡などが眠っている。一方、荒神山神社の水無月祭や稻村神社の太鼓登山は、当地域の大祭として氏子を

はじめ多くの人々が集い賑わう。荒神山の周辺にも、織田信長ゆかりの山崎山城跡や朝鮮通信使が信を通じるために往来した朝鮮人街道など、有形無形の豊かな文化財が集積している。

今日、荒神山周辺は豊かな田園地帯が広がり、荒神山の周囲を迂回するように流路を刻む宇曾川や北の曾根沼は、荒神山から眺める琵琶湖とともに四季折々の景観豊かな景勝地として知られ、地域の人々の憩いの場ともなっている。また、荒神山の東山麓にある荒神山少年自然の家や子どもセンターは、子どもたちが自然と文化の共生を体験的に学ぶ施設として活用されている。近年は、彦根市中南部まちづくり協議会が発足し、荒神山を中心としたまちづくりに力が注がれるようになった。荒神山古墳はその中核になる歴史的文化資産としてこれまで協議会とも幾度か協議を重ねてきており、調査の進展と早急な整備・活用が課題となっている。荒神山古墳に寄せる地域の人々の熱い期待に応えるべく、彦根市としても最大限の努力をしたいと考えている。



前方部 T1 トレンチ  
遺構検出状況



前方部 T2 トレンチ  
遺構検出状況



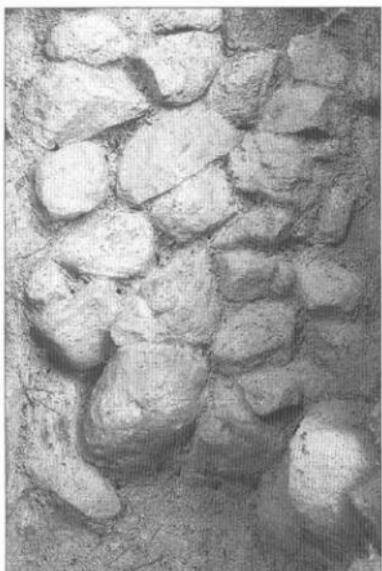
前方部 T2 トレンチ  
2段目テラスと基底石・費石



前方部 T2 トレンチ  
2段目テラスと基底石  
・費石



前方部 T3 トレンチ  
遺構検出状況



後円部 T5 トレンチ  
遺構検出状況



後円部 T5 トレンチ  
基底部の基底石・蓋石



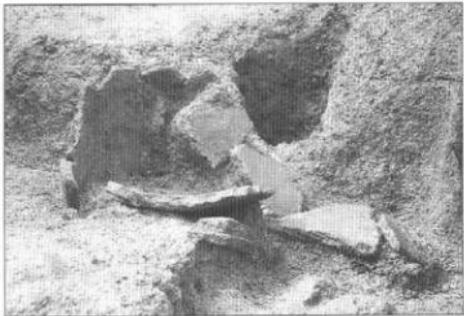
後円部 T5 トレンチ  
遺構検出状況



後円部 T5 トレンチ  
2段目テラスより填頂を望む



後円部 T5 トレンチ  
2段目テラス拡張区



後円部 T5 トレンチ  
2段目テラス埴輪出土状況



後円部 T5 トレンチ  
2段目テラス上方埴輪出土状況



後円部 T5 トレンチ  
2段目テラス上方埴輪出土状況



後円部 T6 トレンチ  
遺構検出状況



後円部 T6 トレンチ  
基底部の基底石・苔石



後円部 T6 トレンチ  
基底部の基底石・苔石



前方部 T7 トレンチ  
遺構検出状況



前方部 T7 トレンチ  
1段目テラスとその上方



前方部 T7 トレンチ  
1段目テラスの埴輪出土状況

前方部 T7 トレンチ  
1段目テラス上方から2段目テラス相応箇所  
を望む



前方部 T7 トレンチ  
埠頂から2段目テラス相応箇所に広がる「張り出し部」





前方部 T8 トレンチ  
調査風景



前方部 T8 トレンチ  
基底部の基底石・葺石

前方部 T8 トレンチ  
1段目テラスから上方を望む



前方部 T8 トレンチ  
1段目テラスの基底石と蓋石

前方部 T8 トレンチ  
1段目テラスの埴輪出土  
状況





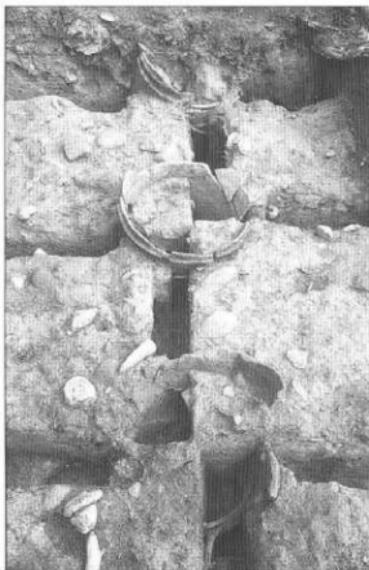
前方部 T8 トレンチ  
2段目テラスの埴輪と基底石・葺石



前方部 T8 トレンチ  
2段目テラスの埴輪と基底石・葺石



前方部 T8 トレンチ  
2段目テラス埴輪出土状況



前方部 T8 トレンチ  
2段目テラス埴輪調査状況



前方部 T8 トレンチ  
2段目テラス埴輪調査状況



前方部 T8 トレンチ  
2段目テラス埴輪調査状況



前方部 T8 トレンチ  
2段目テラス埴輪調査状況



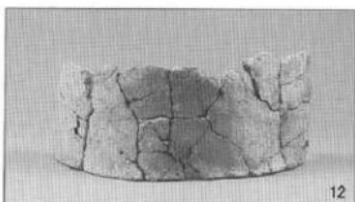
前方部 T9 トレンチ  
北東コーナー遺構検出状況



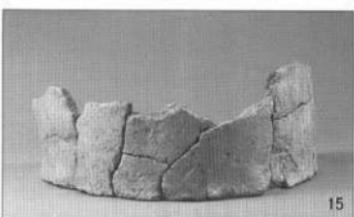
前方部 T9 トレンチ  
北東コーナー下方の基底石・葺石崩落状況



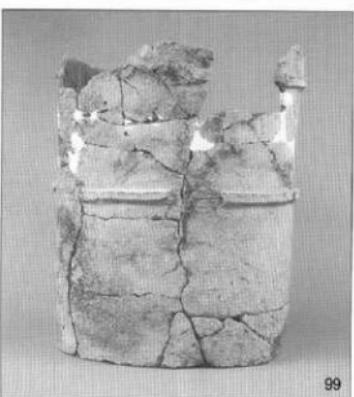
8



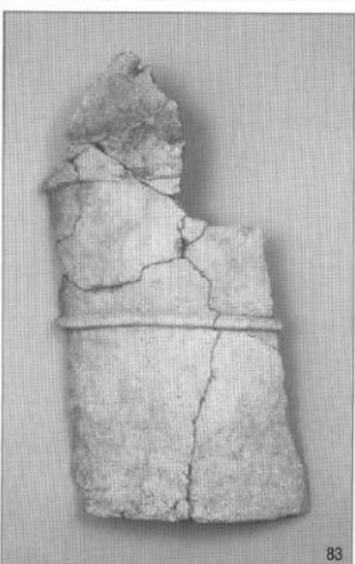
12



15



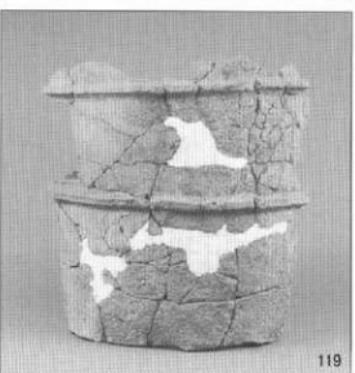
99



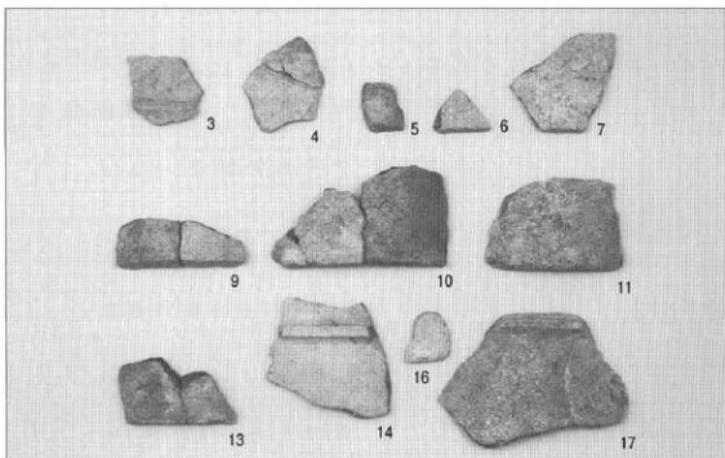
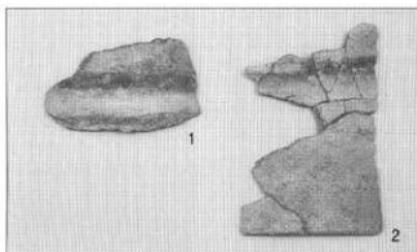
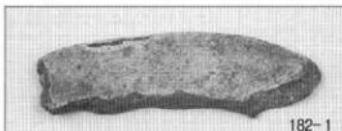
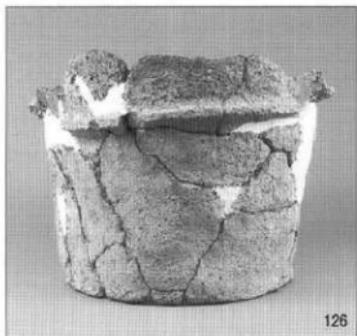
83

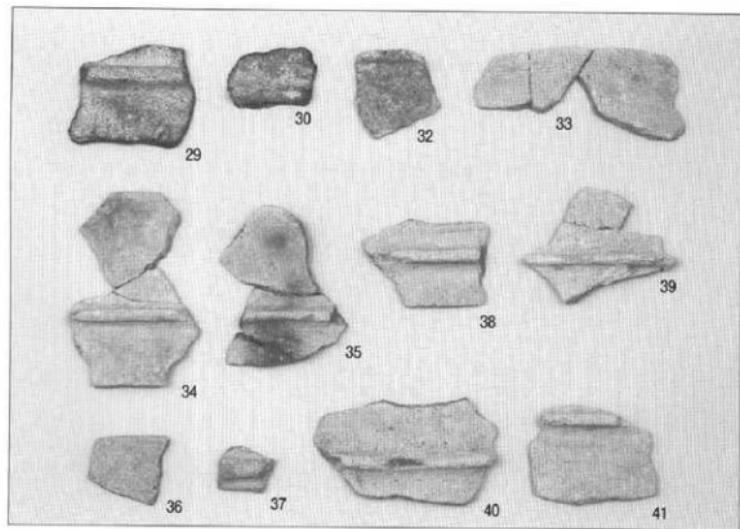
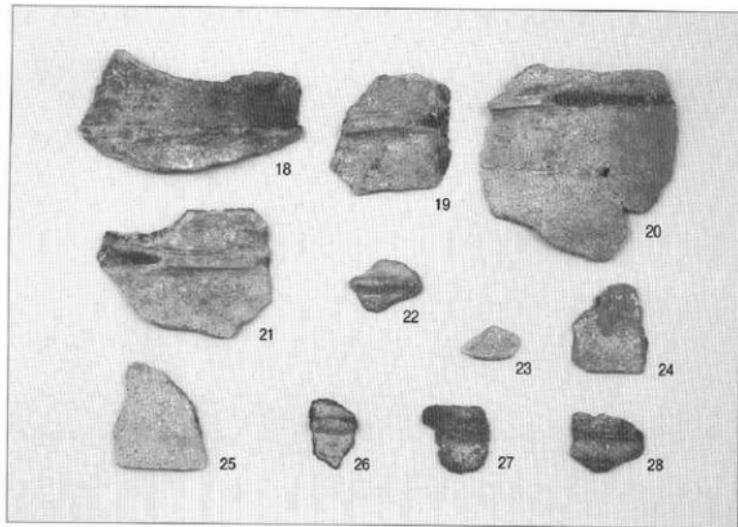


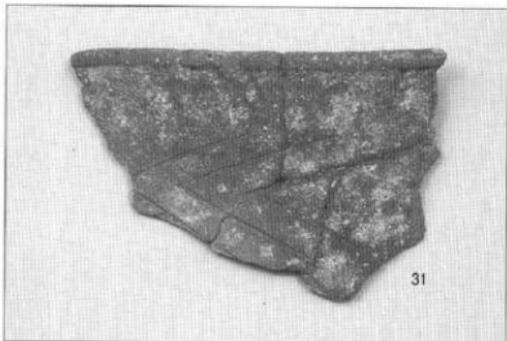
114



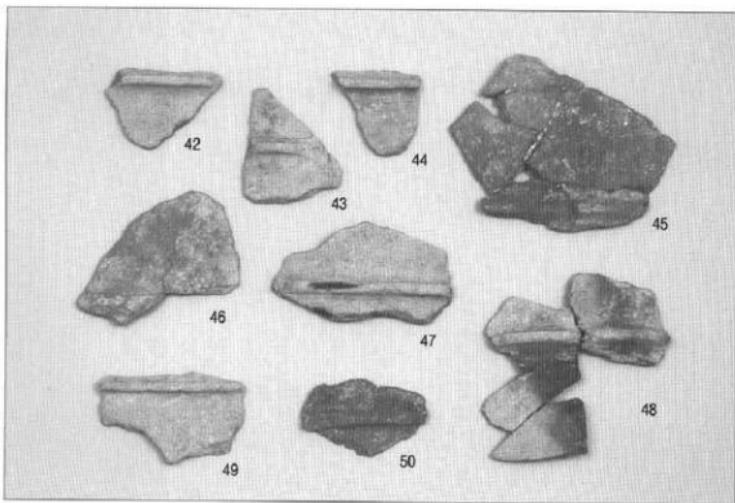
119







31



42

43

46

49

44

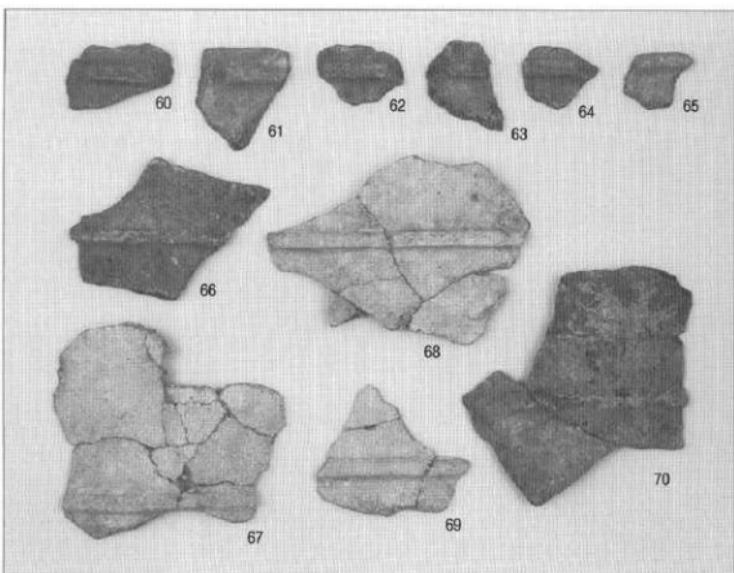
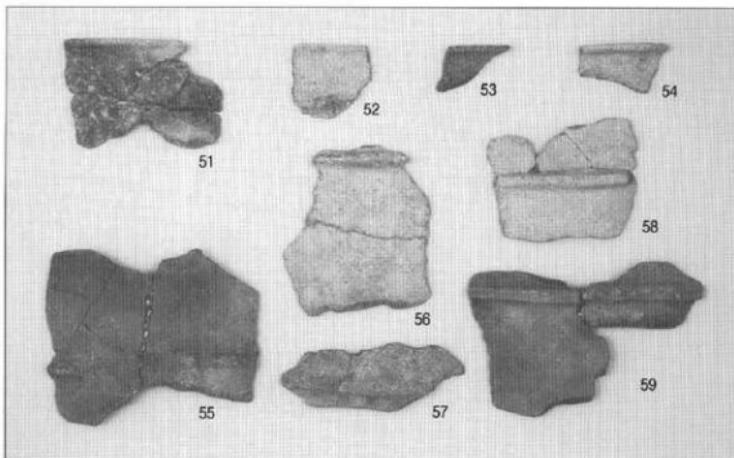
44

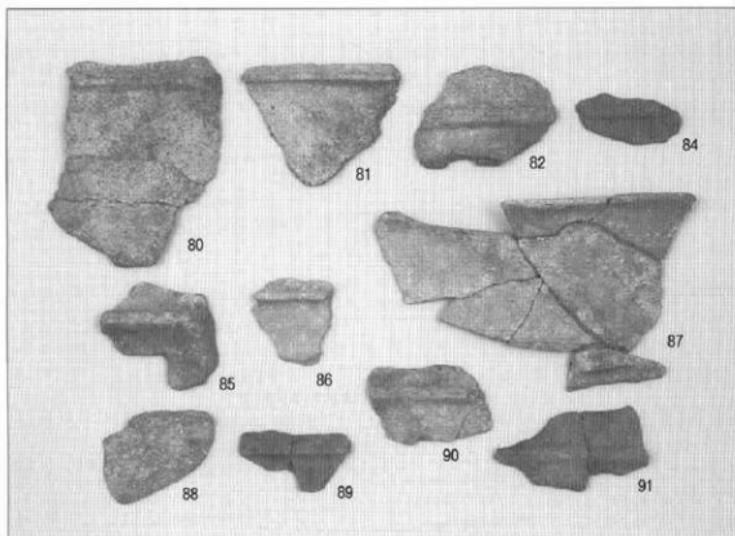
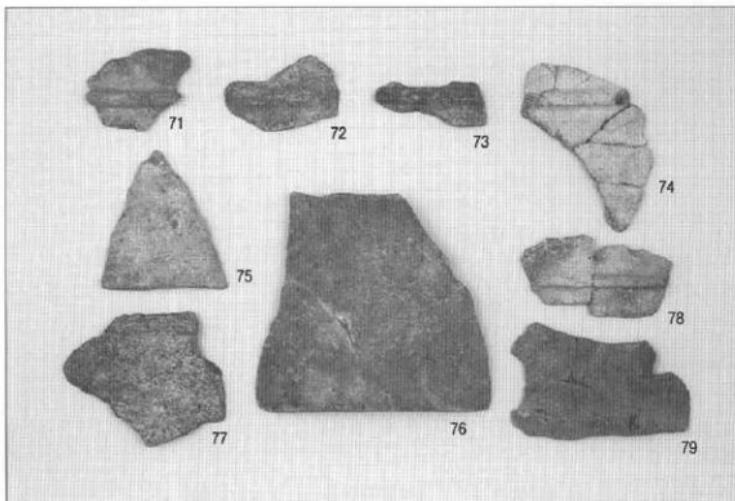
47

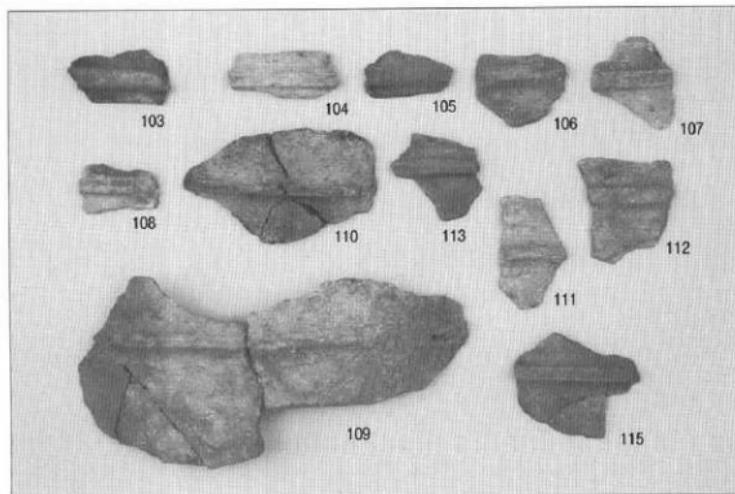
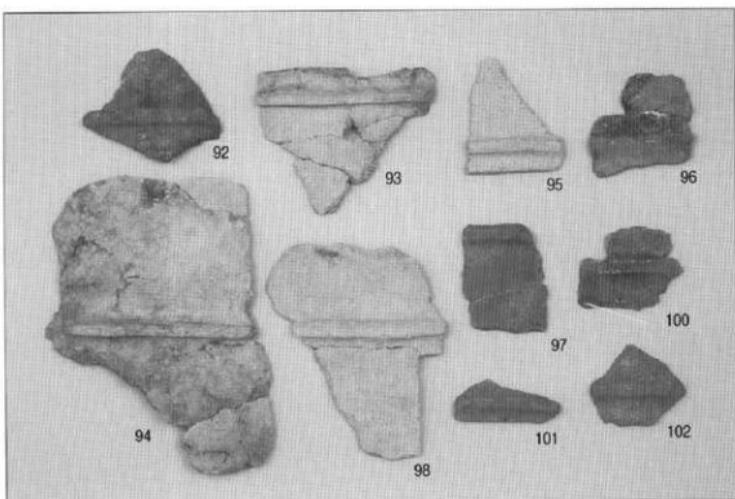
50

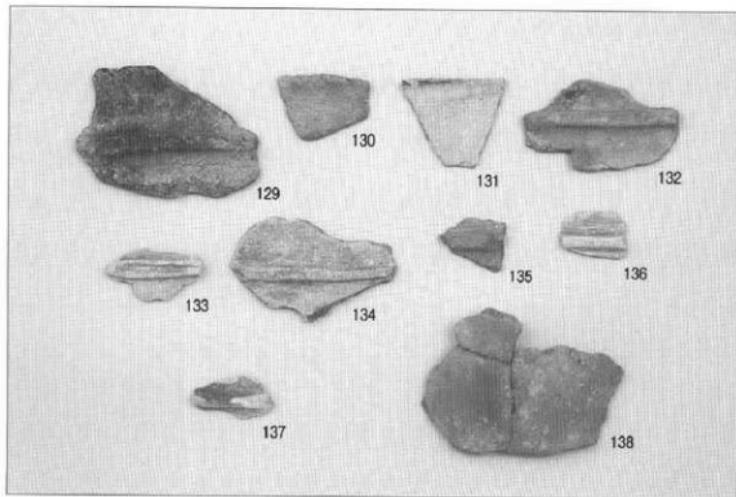
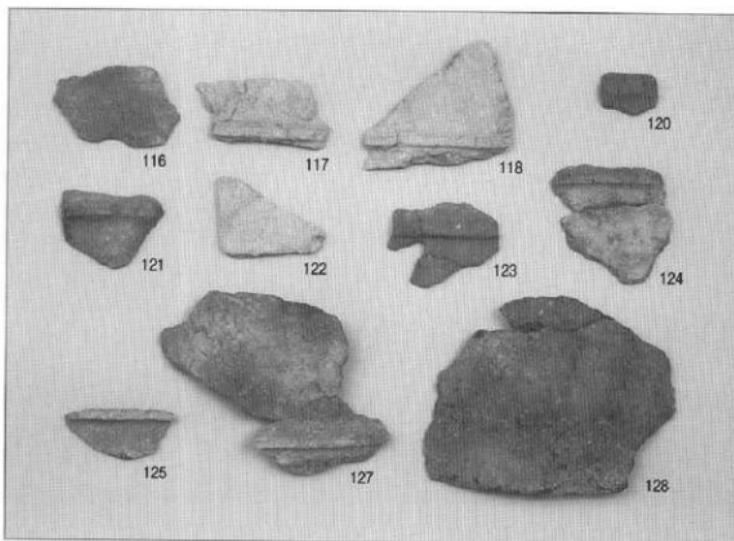
45

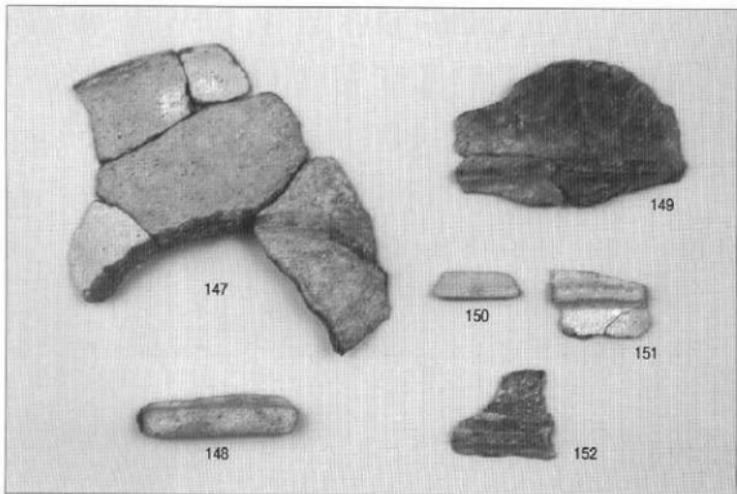
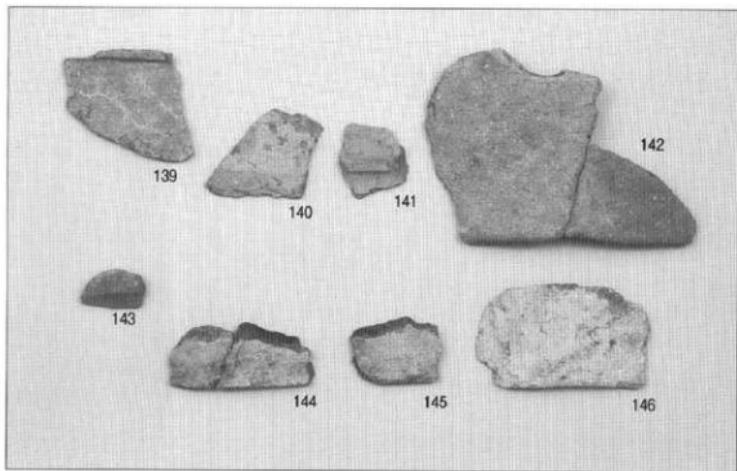
48

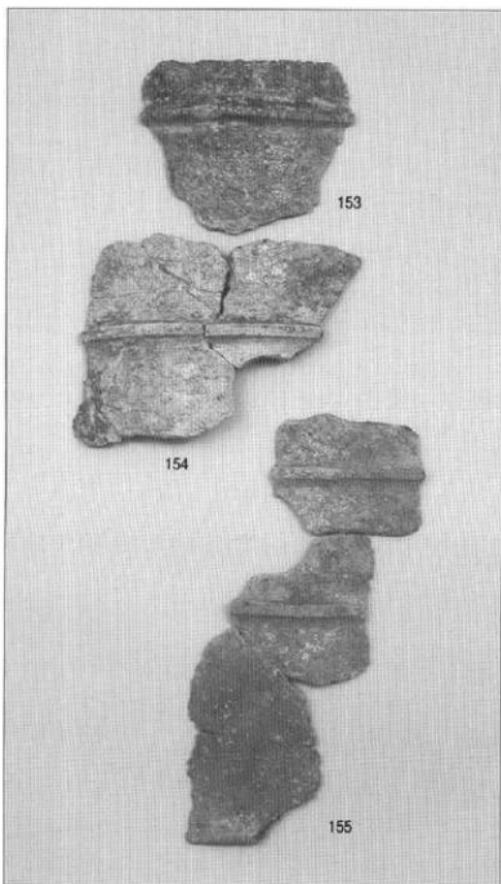


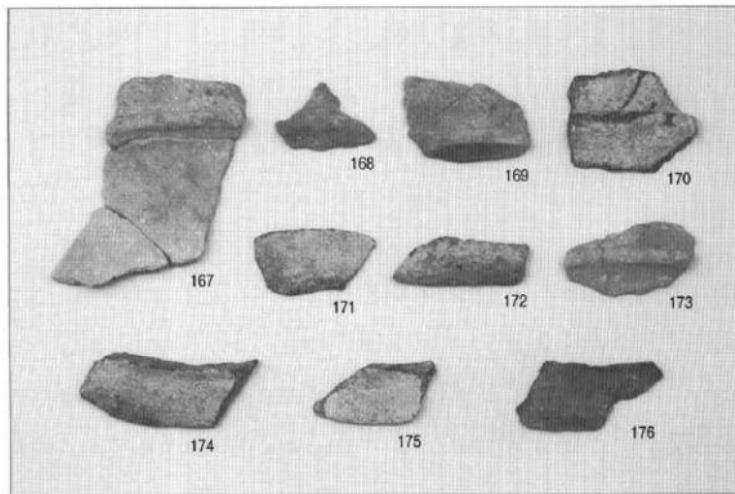
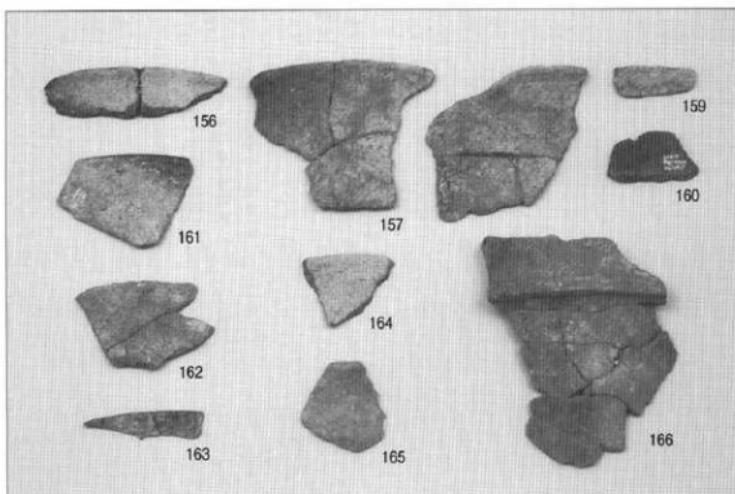


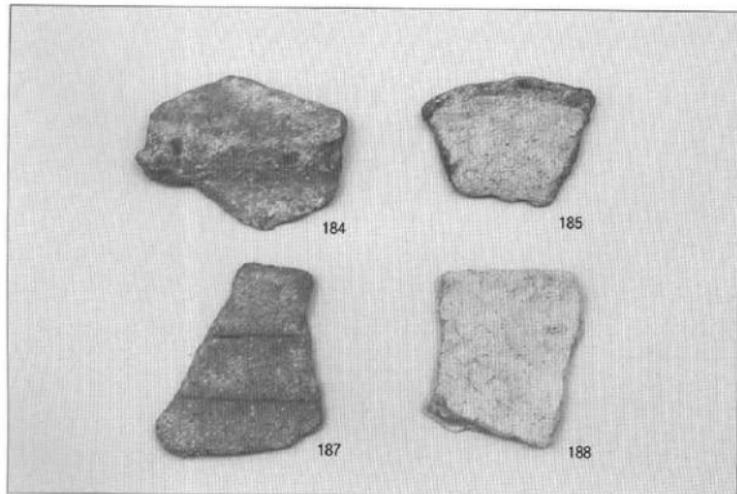
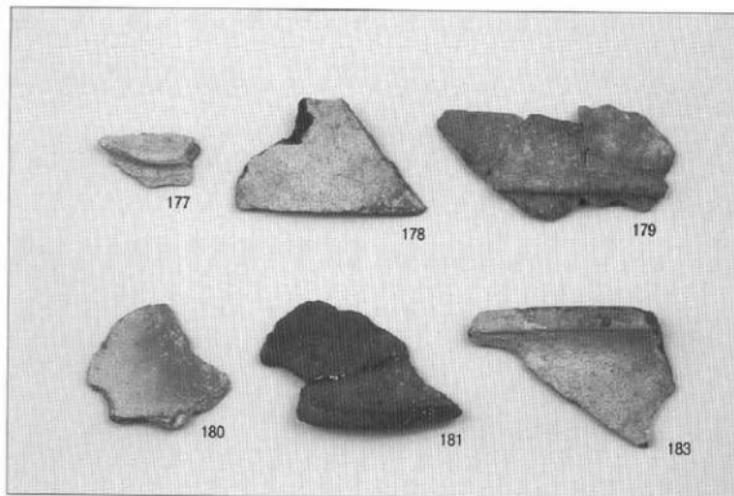














## 報告書抄録

ふりがな	こうじんやまこふん							
書名	荒神山古墳							
シリーズ名	彦根市文化財調査報告書 第2集							
編著者名	谷口徹・林昭男							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財部 文化財課							
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番28号 Tel:0749-26-5833							
発行年月日	平成22年(2010年)3月							
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
荒神山古墳	彦根市 石寺町 山王山 1番1号 ほか	25202	199	35度 14分 06秒	136度 11分 52秒	173m <sup>2</sup>	I次～IV次 (詳細は本文に記載)	範囲確認
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
荒神山古墳	古墳	古墳時代 (前期末)	墳丘 葺石 段築	埴輪	全長124mの前方後円墳			

彦根市文化財調査報告書第2集

## 荒神山古墳

平成22年(2010年)3月発行

編集・発行:彦根市教育委員会文化財部文化財課

〒522-0001 彦根市尾末町1番38号

Tel. 0749-26-5833

印刷・製本:西濃印刷株式会社

〒500-8074 岐阜市七軒町15番地

Tel. 058-263-4101

# KOHJINYAMA TUMULUS



March, 2010

Hikone Educational Bureau  
Cultural Asset Division